

高等八学科表解 第二学年前期

修身 國語 地理 歴史

算術 理科 國語 体操

特54

950

修身 國語 地理 歷史  
算術 理科 圖畫 體操

第二期  
前期

# 高等小學八學科表解

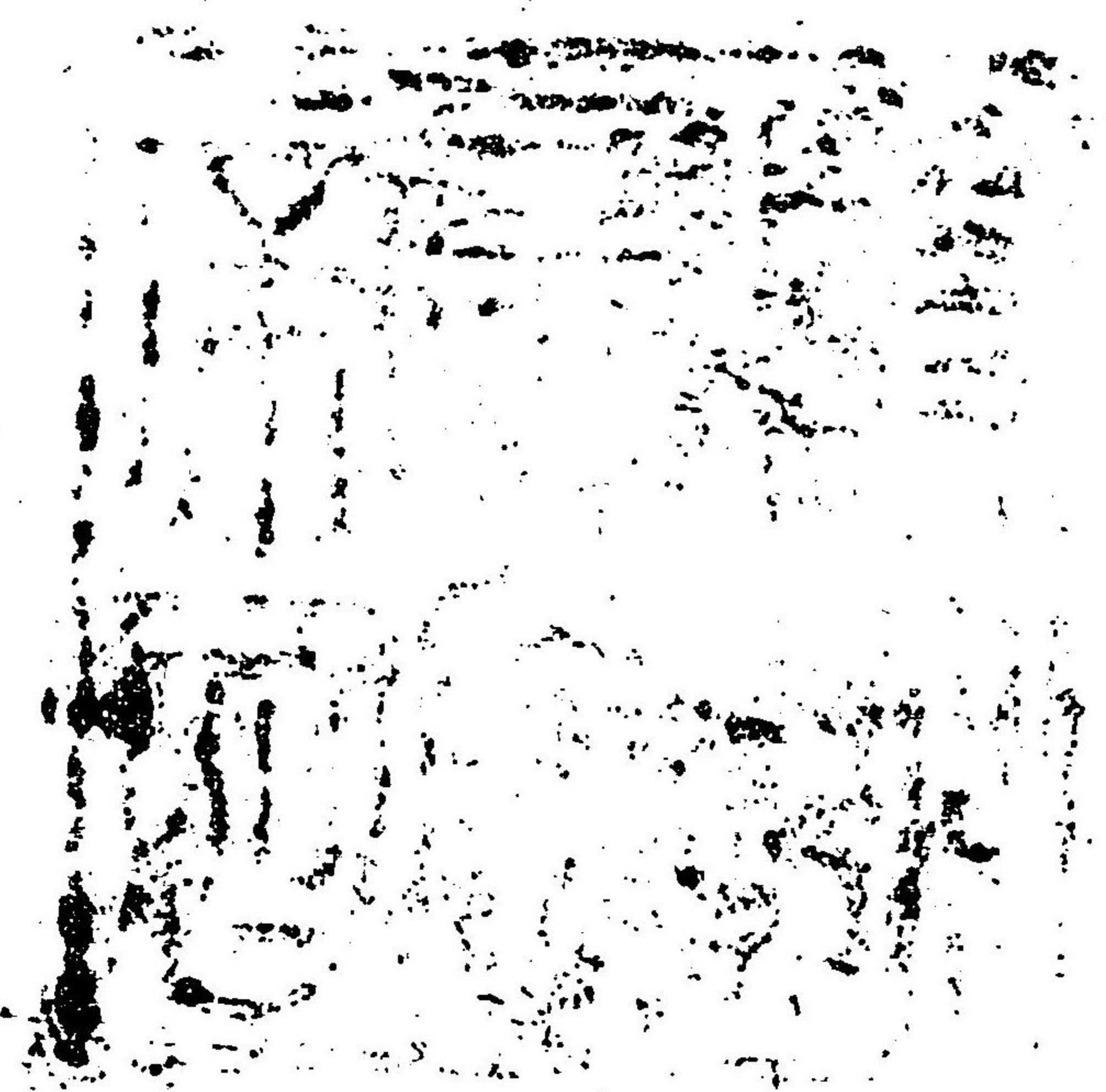
大阪 田中榮堂發行

3

343

24-27

<p>大 阪 大 學</p>	<p>專 門 學 科</p>	<p>算 術 理 科 圖 畫</p>	<p>修 身 國 語 地 理</p>
<p>田 中 榮 堂 發 行</p>	<p>學 科 表</p>	<p>體 操 史</p>	<p>歷 史</p>
	<p>解</p>	<p>前 期 用</p>	<p>第 二 學 年</p>



○修身二學年上



# 修身

二學年前期

## 高等小學 八學科表解 第二學年期 目次

目次終	○體操	○圖畫	○理術	○算術	○歷史	○地理	○國語	○修身
	科	科	科	科	科	科	科	科
	.....	.....	.....	.....	.....	.....	級書讀 方方本	.....
	一五	一七	一七	一七	一七	一八	七 三 七	一

家 庭

家内のもの、み  
な、その務をつ  
くせば一家の幸  
福をきたし國の  
幸福の基となる  
べし。

家内の樂の本 || その身をつつしむ。務をつくす。

家族の務

父 || 大方、外にて働き、生活の費用を得。

母 || 家に居りて、料理、裁縫、養育をなす。

祖父母 || 若き時、父母の如く働きたり。

下男、下女 || 父母の命する仕事をなす。

父母、祖父母をうやまふこと。

父母、祖父母の命をきくこと。

家内の仕事をてつたふこと。

兄弟姉妹 || となかよくすること。

下女、下男等をいたはること。

字 解

家内のもの、おのおのの務、むつまじく、樂大なり、父母は

祖父

祖母

仕事

下女

下男

一家の幸福

主人と召使

主人は、召使を  
あはれみ、召使  
は、主人を大切  
にし、まごころ  
をこめて奉公す  
べし。藤樹と、  
その召使との、  
間柄を見るべし

藤樹の幼時

藤樹の孝行

藤樹と召使

近江國小川村に生る。

性質善良、品行方正、九歳の時より祖父母に養はる。

一、十四五歳の時、伊豫の加藤氏につかふ。廿七歳、母を養はんと、故郷に歸る。

二、伊豫より召使したがひきたる。

三、藤樹は、わが錢の過半を與へて、生計を立てしめんとす。

四、召使は、金錢を受けずして、艱難をともにせんと願ふ。

五、藤樹は、あつくさとして歸らしむ。召使は、涙を流して、歸り行く。

字 解

主人、召使、加藤氏、故郷、養はんがため、家貧し

雇ひ、錢、過半、仰、金錢、涙を流し

○ 修身 二 學年 上

徳行

世の人の手本となるよーな、善き行ある人は、ただに人の尊敬を受くるのみならず、名を、末代までも、のこすものなり。

藤樹の徳行

徳行の光

その例話

母につかへて、孝行をつくす。學問をはげみて、大學者となる。多くの弟子に教ふ。人みな、その徳にうつつる。

近江聖人(近江)とよなふるにいたる。

四十一歳の時、没す。

門人、近郷(近郷)の人、親を失(失)ひたる如く哀(哀)しむ。

村民(シシ)、其徳を仰(仰)ぎ、年年祭をたやさず

武士(フ)、藤樹の墓(カ)をたづね、道を問ふ。

農夫(フ)、内に入り、羽織を着て行く。

農夫は、うやうやしく慕(慕)ふためと思ふ。

武士は、うやうやしく慕(慕)を拜(拜)す。

武士深く、感(カ)じ、ねんごろに墓を拜す。

字解

徳行(トクコウ) 孝行(コウコウ) 學問(ガクモン) 學者(ガクシヤ) 弟子(デシ) 文字(モンジ) 聖人(セイジン) 村民(ソニン) 年年(ネンネン) 武士(ブシ) 邊(ヘン) 農夫(ノウフ) 途中(トチュウ) 衣服(イフク) 羽織(ハオリ) 感じ(カンジ)

朋友

朋友(トモ)は、父母兄弟につぎて親しきものにて、そのよきとあしきとは、己れに、大なる利害あり、あるものなれば、よくえらび、信義(シンギ)を以て交(マシ)るべし。

朋友の必要

友をえらべ

交る心得

格言

樂を共にし、苦を共にす。

互に忠告しあふことを得。

互に助け合ふことを得。

朋友なきものはあはれなり。

諺(ワザ)に「朱(シ)に交(マシ)れば、赤くなる」とあり。

よき人と交れば、よき人となる。

あしき人と交れば、あしき人となる。

朋友をえらびて、交るべし。

親(オヤ)しく交らざる人も親切にせよ。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

交(マシ)りをかゆべかからず。

字解

朋友(トモ) 平生(ヘイゼイ) 対(タイ)しつて 不幸(フコウ) 平日(ヘイジツ) 心得(ココロエ) 忠告(チュウコク) 善惡(ゼンアク) 貴き寶(タカトタカラ)

修身二學年上



高田屋嘉兵衛は  
勇氣ありしがゆ  
ゑに、人のなし  
難(ガ)き事をも  
なしとげたり。  
これによりて、  
勇氣の大切なる  
を知るべし。

勇 氣

字 解

勇氣(ユウキ) いさまし  
幼(オホナ) きわか  
雇人(ヤトヒニン) 運送業(ウンソウギョウ) の  
危険(キケン) ない 報告(ホウコウ) する 産業(サンギョウ) 業(ギョウ) 業(ギョウ) 業(ギョウ)  
漁場(イサバ) を開く 漁場(イサバ) 業(ギョウ) 業(ギョウ) 業(ギョウ)

生所(セイショ) 經歷(ケイレイ)

エトロフ 航路報告

土人をなづく

漁場を開く

淡路(アヅ) に生る、今より百餘年前。  
初(ハジメ) は水夫(スイ) 後、運送業(ウンソウギョウ)。  
富裕(フクイ) となる。

幕府(バク) 航海者(カウボウ) をつものる。應ずるものなし。  
嘉兵衛(カベエ) 命(イナ) を受けて行く。

クナシリ、エトロフ間の航路困難(コンナン)。  
嘉兵衛(カベエ) これをくはしく報告(ホウコウ) する。

エトロフ島の人の野蠻(ヤマン)。  
衣食(イコク) を興へ、言語文字(ゴンゴ) を教ふ  
國家(クニ) の恩(オン) をさとして、なづく。

此地(ココ) 海産物(カイサンブツ) (カイサ) 多し。  
島民(シマジン) に、漁具(イサギ) を興へ漁法(イサウ) を授(ツク) ぐ。  
十七箇所(ジュウシチカノコロ) の漁場(イサバ) を開く。

嘉兵衛の勇氣は  
航路(カウロ) を開き  
公益(コキ) を弘(ヒロ) ぶ  
めたるのみなら  
ず、わが國と、口  
シヤ國との、争  
(ソウ) を解(ト) き  
たり。

露人(ロジン) の暴行(ボウギョウ)  
捕(ト) らるへ  
嘉兵衛(カベエ) の  
沈勇(シムユウ) 和(ワ) 間(カン) を  
嘉兵衛(カベエ) 老後(ロウゴ)

露(ロ) シヤ人(シヤジン) 北海道(ホクไก) を掠奪(ロクダツ) (ロクダツ) する。  
露(ロ) の艦長(カネチカ) ゴロブニンクナシリに上陸(ジョウリク) する。  
幕吏(バクシ) (バク) 捕(ト) へて松前(マツマエ) に送(オウ) する。  
リコルド(リコルド) 日本人(ニッポンジン) をとらへんと待つ。  
嘉兵衛(カベエ) 捕(ト) へられ、少しも恐れず。  
カムチヤカにつれ行(イ) かる。  
兩國(リョウコク) (リョウ) の争(ソウ) (ソウ) をとと決(ケツ) 心(シン) (ケツ) する。  
し、露語(ロクゴ) (ロク) を學(マ) ぶ。  
リコルド(リコルド) に幕府(バク) にわぶべしと説(ト) く。  
兩人(リウジン) クナシリに着(キ) し書(カキ) を呈(テイ) する。  
兩國(リョウコク) 間(カン) の争(ソウ) 解(ト) く。  
幕府(バク) より賞(シヨウ) (シヨウ) せらる。  
老後(ロウゴ) 故郷(コキョウ) (コキ) に歸(キ) り貧民(ヒンジン) (ヒン) を救(ク) ぐ。  
五十九(イハヒコ) 歳の時(トキ) 病(ヤマイ) んで死(シ) する。

字 解

千島等(チシマナド) 奪掠(ダツリヤク) 海軍少佐(カイグンショウサ) 配下(ハイカ) 安否(アンビ) 近海(キンカイ) 本船(ホンセン) 通り  
暴民(ボウミン) 政府(セイフ) 説(ト) きはな 周旋(シュエセン) 兩國間(リョウコクカン) 解(ト) き  
修身(シュシン) 二學年(ニガクネン) 上(ウエ)





勉學

人は、學問(ガク)を勉(ト)めて、物を事をわきまへざれば、本分をつくし、世のためにつくすことあるは、す。されば、幼時より、よく、學びおくべし。

リンコルの家庭

今より二百年ばかり前の人。合衆國の、田舎に生る。家貧し。七歳の頃、父に従ひ、勞役をなす。

學につく

父は、學問させんと、讀本を買ひあたふ。母も教育に熱心(シネツ)なり。七歳の頃、入學す。一里半餘の道を、往復(オ)して、勉強す。

苦學す

インデヤナ州に移(ツ)り、開拓(カク)に従事す。いとまには、もえさしで、文字を習ふ。三冊の本を暗誦(アン)す。

母を失ふ

母は病にかかりて死す。始めて、牧師(ボク)を招(マ)く手紙を書く。勞働者(ロウ)の、代筆(ヒキ)をなすに至る。

字解

合衆國(ガク) 貧(ヒ) 農家(ノウ) 不便(フ) 興(キョウ) 入學(ニュウ) 往(オ) 復(フク) 地方(チ) 移(ウツ) 開拓(カイ) 從事(ジュウ) 暇(イ) 所持(シヨ) 暗誦(アン) 復(フク) 地方(チ) 移(ウツ) 開拓(カイ) 從事(ジュウ) 暇(イ) 所持(シヨ) 暗誦(アン)

勉學 (きつ)

今日は、日に月に進む世の中なれば、幼い時に、勉強したのみでは、たらず。勉學は一生怠るべからず。リンコルの勉學を見るべし。

繼母の愛

氏は慈愛(ジ)ふかき繼母に養(ヤシ)はる。一家六人、樂しき月日をおくる。

ふたたび

村に勞働者(ロウ)多く來り、學校を建(ツ)つ。入學の後、まもなく學校を廢せらる。在學(ザイ)中、進歩(シン)早く、獨學(ガク)の基(キ)を作(ス)る。

本を借りて勉強す

書物を借りて勉強(ケン)す。ワシントンの傳記(デン)を雨にぬらす。はたらきで、その本をわがものとする。ワシントンを慕(ソ)ひ、徳を修(カ)む。

氏の忠實

年長(チヨウ)じ、智(チ)増(マ)すも、忠實(チウ)に働(カ)き、骨惜(ホネ)みせず。資(シ)本(ホン)家(カ)テ(テ)ー(ー)ロ(ロ)ルに雇(ヒ)はれ、よく働(カ)く。その藏書(ゾウ)を借り、毎夜(マイ)勉強(ケン)す。

字解

近所(キン) 傳記(デン) 寢ねる(イ) 驚き(オドロ) 事情(ジヨウ) 勞役(ロウ) 是(コト) 修(シユ) 身(ミ) 二(ニ) 學(ガク) 年(ネン) 上(ジョウ) 是(コト) 日(ニチ) 日(ニチ) 通(ツウ) 學(ガク) 敷(シキ) 週(シュウ) 間(カン) 廢(ハイ) せ(セ) ら(ラ) れ(レ) 在(ザイ) 學(ガク) 中(チュウ) 勞(ロウ) 役(ヤク) 是(コト) つ(ツ) く(ク) の(ノ) ふ(フ) 是(コト)

○修身 二學年 上 十三

正 直

リンコルンは、  
何事も、正直を  
本として、勉強  
せしめ、信用を  
に、人の信用を  
受け、名高き人  
となれり。成功  
に、正直は、成  
（セイ）の本と  
べし。

主人の命  
をはたす

オツファットといふ商人に雇はれり。  
とはいとるに、物を賣りに行く。  
數百里の川を航（ハ）し、主命（ミダ）をはたして  
歸る。

十四

番頭となる

主人は、氏の才と勇とを愛（アイ）す。  
氏は雜貨店（ザッカ）の番頭となる。  
品物をいつはらず。價を二つにせず。  
談話（タン）きはめてたくみなり。  
客（キヤ）多（オ）くなり、店、大いに繁昌す。

正直の例

一婦人（フジン）、この店にて買物をなす。  
勘定（カンテイ）の時、十二錢餘（カ）多く受取たる  
ことに心づき、婦人の家に行きて返す。  
茶四半斤少くわたり、すぐに持ち行く。

字 解

商店（ショテン）  
正 直（セイジキ）  
婦人（フジン）  
買物（カモノ）  
價（ア）  
勘定（カンテイ）  
隔り（ヘダ）  
半斤（ハンギン）  
歸り（カ）  
四半斤（シバンギン）  
心づき（ココロ）  
義勇兵（ギユウヘイ）  
郵便掛員（ユウビンケイ）  
測量師（ソウリョウシ）  
辯護士（ベンゴシ）  
女子（コノコ）  
攻撃（コウキ）  
將軍（カザン）  
女子（コノコ）  
野（ノ）  
豚（ブタ）  
道（ミチ）  
引返（ヒキマゼ）  
人（ヒト）  
痛サ（イタサ）  
救ひ（タメ）  
同情（ドウジヨウ）  
路（ミチ）  
苦む（クルム）  
救ひ（タメ）  
同 情（ドウジヨウ）  
痛サ（イタサ）

同 情

人の喜（ヨロコ）をよ  
ろこび、悲（カナシ）  
をおもひやるは  
同情心（ドウジヨウシン）と  
いひて、慈善（ジヤン）  
博愛（ハクアイ）等の  
貴き行の本なり  
リンコルンには、  
同情に富みたる  
人なり。

其後の経歴

義勇兵（ギユウヘイ）に志願（カシ）して、亂を平らげ  
人を救ふ。  
郵便掛員となり、正直に、事務をとる。  
測量師（ソウリョウシ）となり、非常（ヒョウ）に勉強す。  
辯護士（ベンゴシ）となり、むじつに陥（オチ）る人  
を助く。

女子と記者  
を助く

一女子、雑誌（ザッ）にてシールト將軍（カザン）  
を攻撃（コウキ）す。  
將軍大いに怒り、記者にその人を尋ぬ。  
女子も、記者も、大いに苦しむ。  
氏は、一身に引き受けて、これを助く。

さきこり  
を助く

寒き日、あはれなる、さきこりの男を見る。  
氏は、男を火にあたらせ、木を、きりやる。  
友人と、野に出でて、豚の苦しむを見たり。

豚を救ふ  
格言

友人と、野に出でて、豚の苦しむを見たり。  
道（ミチ）を引き返して、豚を救ひたり。  
格言（カクゴン）ワガ身ヲツメテ、人ノ痛サヲ知レ。

字 解

友人（ユウジン）  
乘り（ノ）  
路（ミチ）  
苦む（クルム）  
救ひ（タメ）  
同 情（ドウジヨウ）  
痛サ（イタサ）

十五

教育勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

高等小學讀本

二學年前期

伊勢神宮

伊勢神宮(イセ)は、わが天皇(ニギハヤヒ)陛下(カミ)の御先祖(ミコノノサネ)の御(ミコト)先(マサ)祖(トコ)です。天(アマ)にまします。照(テ)大神(オホカミ)を、祭(マツル)り奉(ホム)る。所(トコロ)なれば、も(モ)も尊(ツクシ)崇(トコシ)す。御(ミコト)社(ヤ)本(ホ)課(カ)に、り。その由(ユ)來(キ)境(サカイ)内(ウチ)に、建(タ)方(カタ)の御(ミコト)事(コト)を記(シ)奉(ホム)り。

位置と祭神

位置 || 伊勢國度會郡五十鈴川上。

御鏡の由來

天照大神、瓊瓊杵尊に授けたまふ。代代の天皇、宮中(キミノミヤ)におきたまふ。崇神(タカミヤ)天皇、笠縫邑(カサヌヒ)に移(ウツ)したまふ。

神殿の有様

垂仁(スニ)天皇、今の地に移したまふ。古代風(コゴカイ)の建築(ケンキョウ)。檜(ヒノ)の白木(シロキ)。柱(ハシ)は掘立(ホリタテ)。屋根(ヤ)は茅(カ)ぶき。千木(チギ)をおく。二十年毎(ゴ)に改築、その様を改(アラ)めず。ふるき杉(スギ)の木(キ)おひしげる。西行(サイキョウ)の歌(ウタ)「何事(ナニコト)のおはしますか(カ)は…」

境内の有様

代々の天皇、崇敬(ケイ)したまふ。各地(カクノチ)より、參拜(サンバイ)するもの多(オホ)し。

字解

伊勢國(イセノクニ) 度會郡(ワタテヒゴホリ) 五十鈴川(イツスズガハ) 八咫の御鏡(ヤタノミカガミ) 神宮(ジングウ) ほとり(ホトリ) 三種(サンシュ)の

神(カミ) 孫(ムコ) 神(カミ) 孫(ムコ) 授(サツ)けし 代(ヨ)代(ヨ) 宮(ミヤ) 中(ナカ)の 尊(ツクシ)崇(トコシ)す 移(ウツ)す

し 神(カミ) 殿(デン) 古(コ)代(ダイ)風(フウ) 建(ケン)築(キョク) 白(シロ)木(キ) 柱(ハシ) 深(フカ)く 掘(ホ)り 屋(ヤ)根(ネ)

茅(カヤ) 棟(ムネ) 棟(ムネ) 棟(ムネ) 千(チ)木(ギ) 改(カイ)築(キョク) 改(カイ)め 境(サカイ)内(ウチ) 杉(スギ)し

ん 神(カミ) 殿(デン) 古(コ)代(ダイ)風(フウ) 建(ケン)築(キョク) 白(シロ)木(キ) 柱(ハシ) 深(フカ)く 掘(ホ)り 屋(ヤ)根(ネ)

もの 知(チ)ら ず 崇(ソウ)敬(ケイ) 世(ヨ)に 西(サイ)行(キョウ) 歌(ウタ) つたふる

ば 年(ネン)年(ネン)と 各(カク)地(チ)に 參(サン)拜(バイ)す

は 年(ネン)年(ネン)と 各(カク)地(チ)に 參(サン)拜(バイ)す

楠木正行のそ母

楠木正成は、湊川（ミナト）におもむく時、櫻井驛（イサキ）にて、子正行（サキ）に、死後のことを言ひふくめ故郷（ヨシ）に歸らしめしが、正行、父の首を見て、悲（カ）しみ、自殺（カ）せんとしたるを、母はこれを止めて、さまざまに、教訓（キョウコン）（キョウ）を授けたり。正行、大いにさとり、後、名高き忠臣となれり。

正成賊を防ぐ  
櫻井驛の遺言  
遺族の悲しみ  
正行腹さす

母の教訓

後醍醐（ゴタ）天皇の、延元（ゲン）元年。尊氏（ウヂ）直義（チギ）、九州から京都へ攻め上る。正成と義貞とが、兵庫（ヒコ）で防（セ）ぐ。正成は、さいごの合戦（カウ）で思（オモ）った。正行に遺言（ユイゴン）して、河内（カウ）に歸（カ）せられた。正成は、湊川（ミナト）で討死（ウチジ）した。尊氏は、正成の首（カ）を、京都（キョウ）にさらし。後、正成の遺族（ユイゴ）に送り届（ツ）けた。正成の妻と正行とは大いに悲（カ）しんだ。正行は涙（ナミ）をおさへ佛間（ハツ）へ行（イ）った。菊水（キクスイ）の刀（カ）を、腹（ハ）につきたてよとされた。母は正行の腕（ウデ）にとりつきて。『梅檀（ウヅ）は二葉（フタ）よりかうばし』おさないといつてもまごつてよいものか。櫻井驛（イサキ）で父上（ウヂノカミ）のおしやうたこと「……………」を忘れてしまったのか。それでは、天皇陛下（テンノウキミ）のお役に立つ（ツ）ことはおるか、父上（ウヂノカミ）の忠義（チュウギ）もむになる。

字解

數十萬（スウジユウマン） 大軍（ダイケン） 攻め（セ） 命（メイ）じて 防（フ）がしめられたら 今度（コンド）  
合戦（カウセン） 死後の事（シゴゴノコト） 菊水の刀（キクスイノカ） 故郷（コキョウ） 戦（タ）つて 討死（ウチジ） さい  
遺族（ユイゴ） まのあたり（マノアタリ） 胸（ムネ）もふさがり（ハ）しくなり 氣（キ）も遠（ト）く  
流（ナ）れる涙（ナミ） 袖（ソデ） 佛間（ハツマ） 袴（ハカマ）の腰（コシ） いまや（いま）と 腹（ハラ）小（コ）  
腕（ウデ） 泣（ナ）く 梅檀（ウヅ）の 諺（ことわざ） 考（カウ）へ お別（ワカ）れ 武運（ブウン） 一（イチ）族（ソク） 家來（ケライ）  
残（ノ）つて くれぐれ（くれぐれ）話（ワタ）し 忘（ワス）れ お役（やく） 倒（タノ）れ 遺言（ユイゴン） 教訓（キョウコン）  
追（オ）っかける

正行のかくご  
『と刀をとりあげた。正行泣き倒（フ）れた。父の遺言（ユイゴン）、母の教訓（キョウコン）身にしみわたった。尊氏（ウヂ）を亡ぼすことを、わすれなかった。』

蜂 蜜

蜜蜂(ミツバチ)ハ、多ク、群(グ)ヲナス。テ、共同生活ヲイトナシ、三種ノ蜂ハ、ソレゾレ、分業ヲナス。テ、卵ヲ生ミ、巢ヲ造リ、蜜ヲ貯ル。用(ヨリ)多ケレバ、ホトンド、家畜(カ)ノゴトク、人(チカ)コレヲ飼フ。

生活

住所 野山ノ木ノウロ。ニ巢ヲ造リ群ヲナス。

種類 一、群ノ數ニヨリ數萬。二、共同生活。

雌蜂 女王一匹。體長ク、羽短シ。卵ヲウム。

雄蜂 二三百匹。體大ナリ。働カズ。

働蜂 秋、働蜂ニサシコロサル。

蜂ノ巢 構造 六角形ノ小室ノ密接セルモノ

蜂ノ食物ハ、蜜ト花粉(カン)。

蜂ハ口ノ奥ノ嚢(ワク)ニ花粉ハ後肢(アト)ノ毛ヲ取ル。

食ヒノコリハ、巢ニ貯フニハ、蜂蜜。

蜂蜜、蜜蠟ヲ取ルタメ、人家ニ畜(カ)フ。

分封

五六月頃、群ノ一部分ワカレ出ル。働蜂、雄蜂フエ、女王ノ生レタル時。モトノ女王ガワカレ出ル。箱、樽ヲ適當(テキ)ノ所ニ置ケバソノ中ニ入ル。蜂ノ巢ノ數ヲ増スコトヲ得。

字 解

群(グ) 群(グ)ハ、ミツバチノ群ヲ指ス。體(タイ) 體(タイ)ハ、ミツバチノ體ヲ指ス。労働(ロウドウ) 労働(ロウドウ)ハ、ミツバチノ働ク事ヲ指ス。幼虫(ヨウチュウ) 幼虫(ヨウチュウ)ハ、ミツバチノ幼少ノ時ヲ指ス。小室(ショウシツ) 小室(ショウシツ)ハ、ミツバチノ巢ノ小室ヲ指ス。貯(チ) 貯(チ)ハ、ミツバチノ蜜ヲ貯ル事ヲ指ス。怠(タイ) 怠(タイ)ハ、ミツバチノ働カズ事ヲ指ス。増(マ) 増(マ)ハ、ミツバチノ巢ノ數ヲ増ス事ヲ指ス。蜜蜂(ミツバチ) 蜜蜂(ミツバチ)ハ、ミツバチノ總稱ヲ指ス。女王(ジョウガ) 女王(ジョウガ)ハ、ミツバチノ女王ヲ指ス。一匹(イツピキ) 一匹(イツピキ)ハ、ミツバチノ一匹ヲ指ス。六角(ロウカク) 六角(ロウカク)ハ、ミツバチノ巢ノ六角形ヲ指ス。形(ケイ) 形(ケイ)ハ、ミツバチノ巢ノ形ヲ指ス。蠟(ロウ) 蠟(ロウ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。節(セツ) 節(セツ)ハ、ミツバチノ巢ノ節ヲ指ス。密接(ミツセツ) 密接(ミツセツ)ハ、ミツバチノ巢ノ密接ヲ指ス。分泌(ブンビ) 分泌(ブンビ)ハ、ミツバチノ巢ノ分泌ヲ指ス。構造(コウゾウ) 構造(コウゾウ)ハ、ミツバチノ巢ノ構造ヲ指ス。巧妙(コウミョウ) 巧妙(コウミョウ)ハ、ミツバチノ巢ノ巧妙ヲ指ス。精製(セイセイ) 精製(セイセイ)ハ、ミツバチノ巢ノ精製ヲ指ス。蜜(ミツ) 蜜(ミツ)ハ、ミツバチノ蜜ヲ指ス。膏藥(コウヤク) 膏藥(コウヤク)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。囊(フクロ) 囊(フクロ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。煮ル(ニ) 煮ル(ニ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。前肢(マヘアシ) 前肢(マヘアシ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。細毛(サイモウ) 細毛(サイモウ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。食(シヨク) 食(シヨク)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。料(リョウ) 料(リョウ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。餓死(ガシ) 餓死(ガシ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。藥用(ヤクヨウ) 藥用(ヤクヨウ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。家畜(カチク) 家畜(カチク)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。奥(ウチ) 奥(ウチ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。鬚(ヒゲ) 鬚(ヒゲ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。塊(カマリ) 塊(カマリ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。分封(ブンポウ) 分封(ブンポウ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。退去(タイキョ) 退去(タイキョ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。設ク(セツク) 設ク(セツク)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。適當(テキトウ) 適當(テキトウ)ハ、ミツバチノ巢ノ材料ヲ指ス。

業工農の虫

虫類の中には、人のなすわざに似たるものあり。なすものあり。蠶(カビ) 蜜蜂(ミツ) 蜘蛛(クモ) 蚯蚓(ミミズ) 蟻(アリ) などの業に働を、人の業に働くらふれば、かにかによ、知るべきなり。

蠶、蜜蜂の働

蠶 糸をはき、繭(マ)をつくる。紡績の業。  
 蜜蜂 蜜にて蜂窠(ミ)を造る業。幾筋かの縦糸(イ)中より外に横糸(イ)外より密に横糸(イ)を造る業。

蜘蛛の働

蜘蛛の働 網をはる  
 蜘蛛の働 網をはる

蚯蚓の働

蚯蚓の働 土をかへす  
 蚯蚓の働 土をかへす

蟻の働

蟻の働 二、収穫蟻  
 地下(カ)に、穴(マ)をうがうもの。穴の内部(ナ)をかたむるもの。砂石(シヤ)にて石垣を造るもの。草木の小片(コ)を積み重ねる。高き塔(ト)を造り木でかたむ。ありまきのあまい汁 蟻はこれを保護す。 牧畜業 ありまきのあまい汁 蟻はこれを保護す。 牧畜業 ありまきのあまい汁 蟻はこれを保護す。 牧畜業

三、ありまきを養ふ

ありまきのあまい汁 蟻はこれを保護す。 牧畜業

字解

虫類(チュウライ) 工業(コウギョウ) 農業(ノウギョウ) 似たる(ニヒタル) 蠶(カビ) 蜜蜂(ミツ) 蜘蛛(クモ) 蚯蚓(ミミズ) 蟻(アリ) などの業に働を、人の業に働くらふれば、かにかによ、知るべきなり。

外(ソト) 圓(マ) 縦糸(タテイト) 横糸(ヨコイト) 足場(アシバ) みつに 編物(アミモノ) 地中(チチュウ) 穴(アナ) 多量(タリリヤク)

食用(シヨクヨウ) 残(ノコリ) 土粉(ドコ) 糞(フン) 地上(チジョウ) 数年(シウネン) 後(ウシロ) 地面(ヂメン) 上下(ジョウカ)

田畑(タハタ) 耕(カガヤ) 耕す(カガヤス) 種類(シユルイ) 内部(ナイブ) 砂石(シヤセキ) 小片(コ) 積み重ね(ツミカサ) 木(キ)

質(シツ) の 土木(ドボク) 種類(シユルイ) 地方(チホウ) 産(サン) 雑草(ザツソウ) 成長(セイチョウ) 熟(ジュク)

收穫(シュウカク) 群(ムラ) 着(ツク) 附着(フチヤク) 移(ウツ) 牧畜(ボクシヤク) の 業(ギョウ) 業(ギョウ) 業(ギョウ)



蠅と蜘蛛の助けに話

ある國の皇子は蠅(ハ)と蜘蛛(クモ)とが、大ききらひであつたが、ある時、蠅の助けに命を助けられた。また、ある時は、蜘蛛の助けに、危い命を助けられたといふおもしろい話である。

王子のきらひ

ある國の王子、蠅と蜘蛛とをきらつた。

王子の危急

戦争にやぶれ、木のかげにかくれた。敵の一人が刀をぬいてそばによつた。

蠅の助け

蠅が王子の顔(カ)をさまして敵を見た。王子は目をさまして敵を見た。

蜘蛛の助け

その夜、王子は、木のうろでねた。蜘蛛が、うろの口に、巢をかけた。敵の一人が王子はうろの中にあるかもしれんぞといつた。

はかの一人は、蜘蛛の巢があるから、王子は、かくれてゐるものかといつた。二人は、笑(ツ)ひながら、先(サ)の方へい

王子の喜んだ

王子は、ほんと、息(イ)をついた。二度まで危(ア)い命(イ)を助かつて喜(ヨ)んだ。

昔(ムカシ) 王子(オウジ)の(オウジ) だいきらひで(オウジ) 思(オモ)ふ 残(ノコ)さず 世界(セカイ) 追(オ)ひ 烈(ハ)し

い(い)いど 戦争(センプウ) 敵(テキ) 逃(ニ)げ 幾(イ)日(カ) 疲(ツカレ) 眠(ネ)み う(う)とうと(うとうと) 顔(カ) ま(ま)ちか

く(く)ちか(くちか)く 寄(ヨ)つて 勢(イキホヒ) に(に) 恐(コ)れて う(う)ろ(うろ) 夜(ヨ)明(アケ) 通(ト)り 知(シ)れんぞ 破(ヤ)れ

笑(ワ)ひ 先(サキ)の(サキ)方(ホ) 息(イキ)をつ(つ)いた(いた)危(ア)い(い)命(イ)の(ノ)ち 喜(ヨ)んだ 王(オウ) (お)ー 玉(ギョウ) (たま) 玉(キョウ) (たま)み(み)が(が)き 主(シユ) (ぬ)し 烈(レツ) (は)げ(げ)し

類(レツ) (なら)ぶ 裂(レツ) (さ)く 例(レイ) (たと)へ 破(ハ) (や)ぶ(ぶ)る 波(ハ) (な)み 披(ヒ) (ひ)らく

○讀本二學年上

### 昆虫の變態

昆虫は、足が六本あつて、空中をさぶ虫である。昆虫は、卵からかへつてから、幼虫(チョウ)の蛹(キナ)の順序(ジユン)をへて、成長(セイ)するもので、その幼虫の時と成虫の時とは、その形態(カタ)が非常にちがふ。

#### 昆虫の特徴

足が六本ある。  
はねがあつて空中を飛ぶ。  
卵、幼虫、蛹、成虫の四つの時代がある。

#### 昆虫の種類

ちよーちよーまひをまよふ。  
松虫、鈴虫||よい聲でなく。  
蠶||美(ルツ)しい繭(マ)を造る。  
蜜蜂||甘(ア)い蜜をかもす。  
蚊、のみ||動物の血を吸(ス)ふ。  
うんか、ばた||農作物(ケツ)をあらす。  
卵||から、かへつて、親(オヤ)と同じ形(カタ)となる。  
その間に、二、三度、形をかへる。  
卵||がかへると……幼虫。  
十分大きなると……蛹。

#### 昆虫の變態

今度は翅(ハ)のある虫……成虫。  
昆虫の變態は、多く、四つの順序。中にはこの區別(カ)のわからぬもある。  
いなごは幼虫と成虫と、ほぼ、同じ形。

#### 變態の順序

#### 幼虫と成虫

たいてい、幼虫と成虫と、形が違(チ)がふ。  
いもむし……ちよーちよの幼虫。  
けむし……蛾(ガ)の幼虫。  
たいこむし……とんぼの幼虫。  
これらの幼虫と成虫とは、全く別な種類(ルビ)の虫であるよーに見える。

### 字解

空中(クウチウ)を飛ぶ 動物(ドウブツ) 鳥類(チヨウレイ) 松虫(マツムシ) 鈴虫(スズムシ) 聲美(コエウツク)しい 血(チ)  
を吸(ス)ふ 農作物(ノウサクブツ)もの 荒す 卵(タマゴ) 親(オヤ)と同じ形(カタ) 一二三度(ドニミ) 緑(リョク) 色(イロ)  
葉(ハ) 學問(ガクモン)上(ジョウ)のうへ 幼虫(ヨウチュウ) 成虫(セイチュウ) 順序(ジュンジュ) 區別(カ) ほとんど 頭(カシラ) 特(トク)  
別(ベツ)つ 違(チガ)つて 種類(シュルイ) 蛹(ナナギ) 皮(カ)を脱(ヌ)いで 全く(マツク) 蛾(ガ) 思(オモ)はれよ  
うか(オカ)といふこと

○讀本 二學年 上

奈良

奈良は、昔、七十餘年間、都のありし所なれば、今、なほ、名所(イメ)、舊跡(セキイ)、はなはだ、多し。中にも春日神社(カスガ)、東大寺(ト)、興福寺(ケイフ)、等、もつとも名高く、昔の都の面影(モオ)をのこせり。

奈良の歴史

奈良朝七十餘年間都のありし所。當時は、皇居、神社、佛閣ありて、盛なりき都を京都に移されしより、さびれ行く。春日神社、東大寺、興福寺などあり。今の奈良市のもともなり。

春日神社

位置 奈良市の東、春日山(カスガ)の麓(フキ)。境内 古木おひしげり、鹿群れ遊べり。社殿 壯麗。廻廊に無数の金燈籠(カナド)。社前の路傍 石燈籠、さほめて、多し。

東大寺

位置 春日神社の西北。大佛 大佛殿(ツツミ)に、置かれたり。正倉院 聖武天皇の御遺物(ゴイ)などを藏す。嫩草山(カサガ) 東大寺の東、全山芝生(センザン)。位置 東大寺の西南。

興福寺

建物 南圓堂(ナンエン)、北圓堂(ホクエン)、五重塔(ゴジュウ)。猿澤池 南の方。鯉、龜、多く、景色よし。

其他の寺 西大寺、藥師寺(ヤクシ)、唐招提寺(トウテイジ)。

法隆寺

位置 奈良市の西南二里ばかり。創立 聖德太子(セイト)の創立 千二百年前。

奈良の歌

建物(モノ) 金堂(コン)、講堂(コウ)、五重塔(ゴジュウ)。御遺物(ゴイ) 太子の御遺物、佛像(ブツ)多し。花(ハナ) よいに榮(サ)えた、奈良(ナラ)の都(ミヤ)の有様(アツ)を、千年の後に殘(ノ)してをる、名所(メカ) 舊跡(セキイ)の多い中、ことに名高いのは、東大寺である。寺に祭(マツ)つてある、大佛を、建(タ)てられたのは、聖武(シム)天皇様、五丈三尺五寸もある像(ゾウ)を、すゑてある、佛殿の瓦は、雲(クモ)にそびえてをる。

字解

御代代(コダイダイ) 當時(トウジ)の 皇居(コウキョ)の 神社(ジンジャ) 佛閣(ブツカク) 都(ミヤコ) 社寺(シャジ) 暗さば(クラサバ) かりほらい 壯麗(ソウレイ) 無數(ムスウ) 歴史(レキシ)の 参考(サンコウ) 景色(ケシキ) 〇 讀本(ヨミホン) 二學年(ニガクネン) 上(ウエ)

鳥居強右衛門

鳥居強右衛門ハ、長篠城(ナガシノ)ニテ、敵(キテ)ニ圍(カ)マレシ時、主人ノタメニ、軍使(シヤクシ)トナリ、危(アヤシ)キヲオカシタリシガ、ツビニ敵ニ捕(ト)ヘラレタリ。敵ノオドシニモ、恐(オソ)シゴトニ、役目(シヤク)ヲハタシテ、殺サレタリ。

長篠城

軍使トナル

勇氣

鳥居強右衛門ハ、奥平信昌(オクノヒサ)ノ臣(シヤク)。長篠城ニテ、武田勝頼(タケノカサト)ノ、大軍ニ圍(カ)マレ、兵糧(ヒョウ)トボシクナリテ、ササヘガタシ。

信昌、家康(ヤス)ノカヲ借(カ)ラントス。使ニ行カント答フルモノナシ。強右衛門、使ヲ命ゼラレタリ。家康、所ニユキ、救ヲ乞ヒメリ。家康、乞ヲ許シ、明日出發スベシトイフ。強右衛門ハ、タダチニ、ヒキカヘシタリ。

夜、不幸ニシテ、敵ニ捕ヘラレタリ。敵將(シヤク)、イツハリヲ言ハシメントス。強右衛門、イツハリテコレヲ諾(ダ)ス。壯士(シヤク)、白刃(シヤク)ヲ提(ヒツ)ゲ、城際(シヤク)ニツレテ、大聲ニテ、マコトノ事ヲイヘリ。ツイニ、敵ニササレテ、死セリ。

字解

鳥居トリイ 從シヨガ ヒテ、長篠城ナガシノニテ、大軍オホイニテ、圍カミ、城兵シヤクヘイ、防フセギ戦タカヘドモ、乏トボシク、ホトンドササヘガタキニイタレリ。集アツメ、十重トヘ通カヨハン、ダニモ、ステニ、池イケノ魚ウチコトナラズ、城シロ敵テキヲ退シヨソク、手段シユダンヲマミエテ、果ハタス見合ミアハセ、答コタフ、進スミ、カカル時トキ、惜オシムベキニアラズ、謹ツシんで、使ツカヒ喜ヨロコビ、命イジタリ。川底カハソコニ、敵陣テキジン到イリ、救スクヒケ、乞コヒタリ、許ユルシ、明日シヨウ出シユツ發パツカ、歸カヘリ、不幸フコウニ、捕トラヘ、敵將テキシヤクヲ、重オモキ賞シヨウトシ、與アル、目下メツカ多事タジハ、暇イトマヲ、諾ダクス、翌日ヨクジツ、壯士ソウシ、白刃ハクジン、大聲オホイ、諸君シヨクン、死シセリ。

# 水成岩火成岩

地球の外皮(ガイ)すなはち、地殻(ガイ)は、種類(カク)の、岩石(ガク)から出来(キ)てをる。岩石(ガク)は、學問(ガク)上(カク)では、水成岩(ガク)と、火成岩(ガク)との二つに分ける。水成岩(ガク)は、水の底(コ)に沈(シ)んで出来(キ)た岩石(ガク)、火成岩(ガク)は、地熱(ネツ)の作用(ヨウ)によつて出来(キ)た岩石(ガク)である。

地殻(ガイ) (岩石)

水成岩

種類 地層 成因

地球の外皮(ガイ)はいろいろな物を包む。卵(カク)の殻(カク)のようであるから地殻(ガイ)といふ。地殻(ガイ)は土、砂、岩などでできてゐる。これをすべて、岩石(ガク)といふ。岩石(ガク)は、水成岩(ガク)と、火成岩(ガク)とに分ける。

水(カク)の力で、水の底(コ)にできた岩(ガク)。

岩石(ガク)は、暑(アツ)さ、寒(サム)さ、雨(アメ)で、こはれる。こはれた岩石(ガク)は、圓(マダ)い石(イシ)となり、砂(スナ)となり、泥土(ドウ)となつて、水の底(コ)に沈(シ)む。

つも、板(イタ)をかさねたようになる。

鐵道(テツ)の切制(キセツ)などで、見(ミ)ることがある。

水底(スイ)の地層(チ)が陸地(リク)になつたのである。

地層(チ)の下部(カ)は、壓力(プレ)のため、岩(ガク)となる。

粘板岩(ネン) || 石盤(セキ) || 硯(スズ) || 砥石(トシ)

凝灰岩(ギ) || 建築用(ケン)にする。

石灰岩(セキ) || 石灰(セキ)をこしらへる。

# 字解

外皮(ガイ)は、包(ツ)んで、柔(ヤ)い、砂(スナ)、堅(カ)い、岩(イワ)、學問(ガク)上(カク)の、水成岩(スイ)、火成岩(カ)

暑(アツ)さ、寒(サム)さ、脆(モロ)く、流(ナ)れ、河(カ)水(スイ)、打(ウ)たれ、圓(マ)い、泥(ド)土(ツ)どろ、勢(イ)

のろい、底(ソコ)、沈(シ)んで、板(イタ)、幾(イ)枚(マイ)、積(ツ)み重(カ)ね、旅(リ)行(コウ)の、切(キ)割(リ)、昔(ム)

地(チ)殻(カク)は、陸(リク)地(チ)を、下(カ)部(ブ)に、強(ツ)い、壓(ア)力(リキ)から、石(セキ)灰(カイ)、次(ツ)ぎに、内(ナイ)部(ブ)の、地(チ)

熱(ネツ)い、非(ヒ)常(ジョウ)に、冷(ヒ)え、礦(コウ)物(ブツ)、燒(ヤ)物(モノ)

○ 本 二 年 上

火成岩

種類 成因

火山(カ)からふき出した汁(シユ)で、できた岩(ガク)。

地(チ)中(チュウ)の物(モノ)は、非(ヒ)常(ジョウ)に高(タカ)い地熱(チネツ)にあへど、強(ツ)い壓(ア)力(リキ)のため、とけず、地(チ)殻(カク)に、すきまが、あると、ふき出す。

その汁(シユ)は、冷(ヒ)えかたまって、岩(ガク)になる。

花崗岩(カ) || 安山岩(アン) || 建築用(ケン)

親切の報

あめりかの、あ  
る鐵道に近い、あ  
山中の小屋で、  
かつかつ、世を  
送つてゐる、二人  
の親子が、ある  
時鐵橋の落(チオ)  
たことを、知ら  
せて、多くの乗  
客(キヤク)を助け  
た。鐵道會社や  
乗客は、多くの  
金錢を贈った。そ  
れで、二人は、い  
つし、らくに、  
くらしした。

やもめと娘

鐵橋流(テツキョウ)る

親子の義氣(ギキ)

徳のむくい

あめりかのあ  
る山中の鐵道  
のちかく。あ  
る小屋に、く  
らして居た。  
鶏(ニトリ)を飼(カ)  
つたり、薪(キキ)  
をとったりし  
てゐた。

雪(ユキ)のけの水が、  
鐵道の橋を、流  
した。この親子  
のはかに誰(レ)も  
知りません。  
汽車が來たら、  
谷に落ちませう。

親子は「知ら  
せたい」とい  
る考へた。薪  
をはこんで來  
て、火をつけ  
ました。機關  
車(キカン)のあ  
かりが見え  
ました。火を  
見付けんか、  
汽車は、とま  
りません。

母親は火をさ  
しあげてかけ  
ました。娘も  
木の枝に火を  
つけてかけま  
した。二人は  
「車をとめよ  
」と、さけび  
ました。

機關手(キカン)  
は、親子の所  
で、や、とと  
めました。車  
掌(シヤウ)は、  
機關手、乗  
客(キヤク)は、  
わけをたづ  
ねました。

親子は喜んで、  
橋を見せまし  
た。人人は禮  
をのべて、金  
を贈りました。  
鐵道會社でも、  
多くの、金を  
贈りました。  
親子は、いっ  
し、らくに、  
くらししました。

鐵道線路(テツドールセンロ)とほれるみち

みすばらしい

娘

かつかつ、世を送つて

をるくらし

やもめ

職(シヨク)業(ギョウ)

賣(ウ)り

年(トシ)春(ハル)雪(ユキ)いち

谷(タニ)橋(ハシ)

流(ナガ)し

夜(ヨ)中(ナカ)

降(フ)つて

親(オヤ)子(コ)

誰(タレ)

汽(キ)車(シャ)落(オ)ち知(シ)つ

考(カン)へ

やつと

思(オモ)ひ

積(ツ)み重(カ)ねて

運(ハ)んで

機(キ)關(カン)車(シャ)る

機(キ)關(カン)手(テ)

母(ハハ)親(オヤ)

着(キ)物(モノ)

結(ム)ス

高(タカ)く

枝(エダ)

きづかはしいので

聲(コエ)

さけび

聞(キ)き

車(シャ)掌(ショウ)

乗(ジョウ)客(キヤク)

命(イノチ)を救(スグ)ふ

贈(オク)り會(カイ)社(シャ)

○讀本二學年上

### 水成岩火成岩

地球の外皮(ガイ)すなはち、地殻(チカク)は、種類の(ガク)は、種々の(セキ)から出(チ)てくる。岩石(セキ)は、學問上では、水成岩と、火成岩との二つに分(カ)ける。水成岩と(シ)は、水の底(ソ)に沈(シ)んで出来た(ソ)岩、火成岩とは、地熱(ネツ)の作用(ヨウ)によつて出来た岩である。

#### 地殻(岩石)

地球の外皮はいろいろな物を包む。卵の殻(カ)のようであるから地殻といふ。地殻は土、砂、岩などでできてゐる。これらすべて、岩石といふ。岩石は、水成岩(スイセキ)と、火成岩(カセキ)とに分ける。

#### 水成岩

種類 地層 成因

水の方で、水の底にできた岩。岩石は、暑さ、寒さ、雨で、こぼれる。こぼれた岩石は、圓い石となり、砂となり、泥土(ドイ)となつて、水の底に沈む。つもて、板をかさねたよーになる。鐵道の切制などで、見ることがある。水底の地層が陸地になつたのである。地層の下部は、壓力のため、岩となる。粘板岩(ネンバン) 二石盤(バン)、硯(リキ)、砥石(トイ)に用ふ。凝灰岩(ギガンカ) 二建築用(ケンチ)にする。石灰岩(セキカ) 二石灰をこしらへる。

#### 火成岩

種類 成因

火山からふき出した汁で、できた岩。地中の物は、非常に高い地熱にあへども、強い壓力(リツク)のために、とけずにゐる。地殻に、すきまがあるぞ、ふき出す。その汁は、冷(ヒ)えかたまって、岩になる。花崗岩(ミカク)、安山岩(アンサン) 二建築用(ケン)にする。

### 字解

外皮(ガイ) 包んで 柔い 砂 堅い岩 學問上(ガク) 水成岩 火成岩  
 暑さ(アツ) 寒さ(サム) 脆く(モロ) 流れ(ナガ) 河水(カスイ) 打たれ 圓い 泥土(ドイ) 勢(イキホヒ)  
 のろい(ヌル) 底(ソ) 沈んで 板(イタ) 幾枚(いくまい) 積み重ね(カサ) 旅行(リョウ) 切割(キリ) 昔(ムカシ)  
 地變(チヘン) 陸地(リクヂ) 下部(カブ) 強い(ツヨク) 壓力(アツリキヨク) 石灰(セキカイ) 次に(ツギ) 内部(ナイブ) 地(チ)  
 熱(ネツ) 非常(ヒョウ) 冷(ヒ) 欠(ウツ) 礦物(コウブツ) 燒物(ヤキモノ)

法製のすらが

がらすは、効用  
廣し。がらすは、  
石英(セキ)炭酸石  
灰(ハイ)をませ  
熔(ト)かして製  
す。我が國にて  
は、精良(リョウ)の  
ものを製する  
こと能はず。外  
國の輸入をあふ  
ぐ、惜(オ)むべき  
ことなり。

がらすの効用

がらすの製法

精良のがらす

効用、はなはだ廣し。  
らんぶ、藥瓶(クワリ)、こつぷ、鏡(ミタ)、電氣  
燈(デンキ)のほや。  
顯微鏡(ケンビ)、望遠鏡(キョウエン)、眼鏡(メガ)のれんす。  
がらすは、人間快樂の父、學問進歩の母  
原料||石英の砂、炭酸を、だ、石灰。  
右ませ合せ、るつばで熱してとがす。  
種種の形に造り、冷してかたむ。  
はや、瓶などは、長き管の先に、汁をつ  
けてふきのばし、型に入れて形を正す。  
板がらすは、切りひろげて造る。  
皿(コ)つぷなどは、鑄型に入れて造る。  
石灰の代りに、みつだそーをませる。  
顯微鏡、望遠鏡などのれんすとす。  
光り、強く美麗(レイ)。裝飾品(ソウシヨ)を  
造るに用ふ。

字解

用(ヨウ) 藥瓶(ヤクビン) 皿(サラ) 窓(マド) 板(イタ)  
種類(シユゴ) れんす(レンス) ならすや(ナラスヤ) 人間快樂(ニョウケンカイラク)の父(チ)のちのちのし(ノ)のし(シ) 學(ガク)  
問進歩(モンシンポ)の母(ハハ) いふべし(イフベシ) 冷(ヒヤ)し固(カク)め 先(サキ) 吹(フ)く 正(タダ)したたく  
ただちに(ただ) 石灰(セキカイ) 種(シユ)るい(ルイ) みつだそー(みつだそー) 美麗(レイ)なれば(なれば) 裝飾品(ソウシヨクビン)  
精長(セイリョウ)て(て)よい 外國(ガイコク) 輸入(シユニユ)せり(せり)を(を)ります(ります) くちをし(くちをし)き(き)こと(こと)なら(なら)す(す)や(や)ど(ど)て(て)は(は)あ(あ)り(り)ま(ま)か(か)せん

精良(リョウ)なるがらすは、我國にできず  
おほむね外國より輸入せり。  
くちをしきことならすや。

類字

皿(サラ) 血(チ) 母(ハハ) 母(ウガツ) 母(ナカレ) 代(カハリ) 伐(キル) 樂(タノシム) 藥(クスリ)



秀吉ノ逸事

秀吉ノ逸事、三ツヲアゲタリ。第一ハ秀吉ノサトシ、第二ハ儉約、第三ハ大度。コレナリ。ソノ人トナリヲ思フベシ。

内山里ノ松茸

山城(ヤマシロ)ノ内山里(ウチヤマシロ)ヲ、梅松ニ預ケタリ。松茸生(オ)ヒタリトテ、奉(マツ)リタリ。秀吉「ワガ威光(イ)サモアラン」ト笑フ。ソノ後モ、シバシバ、奉リタリ。ジツハ他所ヨリモトメタルモノ、秀吉生ヒスグルゾトテ、ヤメサセル。

高野山ノ割粥

秀吉、高野山ニ參詣(サン)シタリ。料理人(リヨウジン)、割粥(カユ)ヲ奉リタリ。秀吉喜ビテ「感心ナリ」ト言ヘリ。コレハ、多人數ニテ、キザミタルナリ。秀吉「奢(オ)リハセヌモノゾ」トテ、怒レリ。秀吉、アルトキ、伏見ニ居タリ。鐵砲ノ音ニ、一座(イサ)ノモノ、アヤシミタリ。秀吉ハ笑ヒ非タリ。見ニ行キタルニ、秀吉ノ言ノゴトシ。

伏見ノ鐵砲

鐵砲ヲ放(ハ)チタル大名ハ、オソレ非タリ。數日ノ後、城ニ伺(ウカ)ヒタリ。秀吉ハ、心ニカケザル有様(アリ)ナリキ。

字解

山城ノ國 内山里 梅松 預ケタリ 植エシメ 松茸 生ヒタリ  
 奉リタリ 笑ヒ 威光 マコトニ、サモアラン  
 他所 左右ノモノ 向ヒテ 高野山 參詣 割粥  
 コソ……ナレ 多人數 組板 話 怒  
 無ケレバ 一粒 奢リ 伏見 鐵砲 放ツラツ 座 アラジ  
 罰 伺ヒ 先日ノ遊オモシロカリキヤ 有様

○讀本 二學年 上

須磨明石

松緑(マツキ)にし、  
 て砂白(スナシロ)き、  
 須磨の浦(スナグサ)や、朝  
 風に、帆(ホ)をあげて、  
 出て、出る船(フネ)多  
 き、明石(アカシ)潟(ガシ)に  
 や、淡路島(アワジ)の風景(ケイ  
 ツ)は、  
 つに言(コト)はんかた  
 なし

須磨の風景

明石の景色

淡路島のながめ

四十二

須磨の浦は、松が緑(マツキ)で、砂(スナ)が白う  
 て、景色(ケイシキ)が、すぐれて、をる。  
 その、磯(イソ)はたへでて、貝(ガイ)をひらうてゐ  
 る子どもも、一つの、みものである。  
 明石(アカシ)潟(ガシ)は、朝(アサ)はをかけて、でる舟  
 が多く、海(ウミ)が、にぎやかである。  
 木(キ)の間(マ)には、明石(アカシ)の城(シロ)も、人麻呂(ヒトマロ)の社(ヤシロ)も、見えてをる。  
 淡路島(アワジ)は、海(ウミ)のむかふに、ごく、ちか  
 く見えてをる。  
 そこへ通(ト)ふ、汽船(キセン)の笛(フエ)の音(ネ)も、すす  
 しさうに、波(なみ)にひびきわたる。

一、須磨(スナ)の浦(ウラ)は、攝津(セツ)の國(クニ)の、西海岸(ニセキ)にあり。古(コ)より世(よ)に聞(き)えたる勝地(カチ)なり。戸數(ドスウ)は四百餘(ヨウジュウヨウ)、今(イマ)も、のきごとに、すだれを  
 かけて、名物(ナモノ)の菓子(カシ)松風(マツカゼ)、村雨(ムラメ)といふものを、賣(う)る家(や)多(おほ)し

海邊(ウミヅ)は青(アヲ)き松(マツ)と、白(しろ)い砂(すな)とが、入(い)りまじつて、帆(ホ)かけ舟(ふね)が見  
 えかくれして、そのけしきのよいことは、本(ほん)の繪(え)のごとし。夏(なつ)  
 ここに遊(あそ)ぶ人(ひと)ことに多(おほ)し。

二、明石(アカシ)潟(ガシ)は、有名(有名)なる、海水浴場(カイソヨウ)にして、けしきのよきこ  
 と須磨(スナ)の浦(ウラ)にゆづらず、夏(なつ)は、海水浴(カイソヨウ)をなす人(ひと)はなはだ、多(おほ)し、明石  
 の城(シロ)、人丸(ヒトマル)神社(ジヤ)このあたり(あたり)にあり、いづれも景色(ケイシキ)よし。人丸(ヒトマル)神社(ジヤ)の社  
 前に、盲杖(メウサウ)櫻(オウ)といふ、名高(な)き、櫻(オウ)あり。

緑(キナンド)に、みどりいろの砂(すな) 風景(ケイシキ) すぐるる 磯邊(イソヅメ) 拾(ひろ)ふ ながめ 朝(アサ)

明石(アカシ)の城(シロ) (元和元年小笠原氏築く) 人麻呂(ヒトマロ)の社(ヤシロ) (人丸神社)

といふ、元和(げんわ)年間(ねんかん)になつ、人麻呂(ヒトマロ)をまつる) 木(キ)の間(ま) あなたあか

陸地(リクヂ) 通(と)ふ 汽船(キセン)の笛(フエ)の音(ネ) 涼(すず)しく 浦(ウラ)

〇 日本(にっぽん) 二(に) 年(ねん) 上(じやう)

四十三

字解

### 夏の一日

瀬戸内海の風景、あ  
 る入海の風景、あ  
 朝の海岸、晝の  
 海岸、夕、海岸、  
 夜の海岸の、景  
 色を記し、をば  
 りに、その地に  
 て海水浴をなせ  
 るものが、その  
 有様を知らず、  
 手紙をかける

海岸の風景

朝のけしき

晝のけしき

夕のけしき

夜のけしき

瀬戸内海(セトウ)のある入海(ウミ)。  
 海面は、波、おたやかなり。  
 海岸には、白き砂に、青き松あり。  
 松の間に、二三の漁家(カキ)見ゆ。  
 漁船(イサネ)、島島の間をこぎ出づ。  
 太陽(タビ)の漁夫(イサノ)、網(ミ)を引く。  
 一群(クワン)の漁夫(イサノ)、網(ミ)を引く。  
 おとな、子ども、集(マツ)りて、海に入る。  
 おもひおもひにおよぐ。  
 岩に腰(コシ)かけて魚つる人もあり。  
 日傘(ヒカ)さして貝を拾ふ少女もあり。  
 泳(オ)ぎたる人、歸り去る。  
 漁夫、網をかけたづく。  
 沖の漁船見ス、濱ふたたび、にぎはふ。  
 漁夫、魚を籠(カゴ)に入れて、になひ行く。  
 漁家の燈(トチ)の光見えそめ、  
 松の上の満月(ツキ)、影(カゲ)し

海水浴、し  
 らせの文

書きはじめ。  
 時候(トキ)と、先方(サキ)の見舞(ミマユ)。  
 自分(ジブン)の様子(ヨリ)。  
 漁村(イサノ)のけしき、氣候(キョウ)。  
 遠浅(トシ)で海水浴に、適當(テマ)な所(トコロ)。  
 海水浴をする人多く、にぎやか。  
 自分(ジブン)は、海水浴と、理科(カ)とのけいこ。  
 手紙のくくり。  
 追(オ)て、歸宅(キヤク)の上の話、日記(ニヒ)の

### 字解

海面(カイメン) 散在(サンザイ) 海岸(カイガン) 砂地(スナヂ) 漁家(イサノカ) 沖(オキ) 漁船(イサネ) 木の葉(キノハ) 散(チ) 遠ざかり(トウ) 一群(イチクワン) 漁夫(イサノ) 脱ぎ(ヌグ) 泳(オキ) 立泳(タチオキ) おもしろげ(オモシロゲ) 少女(シヤウジョ) 濱(ハマ) 待ち(マテ) 窓(マド) 涼し(スズシ) 暑中休暇(シヨチュウキヤカ) 讀本(ドクポン) 二學年上(ニガクニシノウ)

### 話たれは追にかふ

汽船が、ある港にとまってゐた時、二人の子どもが、泳ぎくらしをした。大きなふかが、追うて来た。大砲掛は、しんぱいして、大砲に丸をこめてはなした。ついでよくふかを打

#### 水およぎ

ある年の夏、汽船が、港(みなと)にとまっていた。乗組(のりぐみ)の人は、暑さに苦んでゐた。晝(ひる)すぎに、船長は、泳(およ)ぐことを許した。人人は、海にとびこんで、泳いだ。

#### 泳ぎの競争

二人の子どもが、泳ぎくらしをしてゐる。一人は、大砲掛(だいぱうかけ)の子である。その子は、相手(あいて)をぬいてゐたが、急に、相手(あいて)にぬかれて、まげさうだ。大砲掛は「負けらな」と、勵(げ)ましてゐる。

#### ふか、人を追ふ

「ふかだ」といふ、聲(こゑ)がきこえた。人人は、あわてて、汽船にもどつた。子供等は、知らずに、泳いでゐる。四五町(よちま)むかふに、大ふかが、泳いでくる。だんだん、子どもに、近づいてくる。大砲掛は氣(き)が氣(き)でない。「むきをかへよ」と、叫(こゑ)んでゐる。

ちころした。子どもは無事に助けられた。

#### 大砲掛の心配

子どもらは、まだ、笑(わら)って泳いでゐる。助(たす)のぼしとは、まにあひさうにない。ふかは、「いよいよ、子どもにせまった。子どもらは、とても、にげられない。

#### 大砲をうつ

大砲掛は、大砲に丸をこめた。丸(たまご)が、子どもにあたりはすまいか。ふかの口(くち)は、子どもに、つきさうである。大砲一發(いちぱつ)ずざーん。大砲掛は、顔(かほ)をおほひ、人人も大心配。ふかは、うまく、撃(うち)たれてあつた。喜び(よろこ)びの聲(こゑ)の内に、子どもらは、歸(かへ)ってくる。

### 字解

汽船(きせん)

乗組(のりぐみ)

泳方(お泳ぎかた)

大砲掛(だいぱうかけ)

勵(げ)

相手(あいて)

まじらひ

叫ぶ(こゑをよぶ)

あわてる

側(わき)

撃つ(うち)

とたんひきす

まじらひ

船長(せんちやう)

○ 讀本 二學年 上

(一) 動物の體色

動物の體色はたいてい周囲の色に似てゐる。その害をふせぎ、他の動物を都合よく利用するに都合がよい。保護色は、周囲の色に似てゐる。かくさんあるが、

動物の用意

身を守るため、他をおそふため、體色の用意は、もつとも、都合がよい。

保護色

例一 田の蛙……土色。葉(ナ)に居るあまがへる……緑色。菜(ナ)の花に居る蝶……黄色。大根の花に居る蝶……白色。

例二 暗い所……鼠、蝙蝠……黒ずんだ色。砂の上……ひらめ、かれい……砂の色。かかる動物は、周囲の色にまぎれて、身の害をのがれ、他をおそうに、都合がよい。それで、保護色といふ。

保護色のかはること

保護色は、かはることがある。兎は茶褐色だが、冬は、白色にかはる。いかは水色だが、岩の色にかはる。

字解

動物 ドイブツ おそふ おそふ 都合 ツグゴウ 用意 ヨウイ 體色 タイシキ の の 住んで スミ 土色 ツチイロ 葉 ハ 緑 キナンド

色 シキ の の 菜 ナ 黄色 キイロ 大根 ダイコン 日中 ニツチユ の の 暗い クラ 日暮 ヒヨケ の の 黒ずんだ クロ 海の ウミ

底 ソコ 砂 スナ 周囲 シュウイ の の 似て ニ まぎれて まぎれて 少く スカナ 類 ライ 學問上 ガクセンジヨウ の の 保護色 ホゴシヨク

さへ さへ 北國 ホツコク の の 茶褐色 チャカクシヨク の の 雪 ユキ の の 降る フ 水中 スイチュウ の の 浮く ウ 岩 イワ の の 地 チ

方 ホウ 産する サン 一種 イツシユ の の 一つ イツツ に に 捕へ トラ 眞黒 マツクロ 緑 キナンド 金色 キンイロ 自由 ジユウ

かめ かめ と と かげ かげ の の 一種 イツシユ。木の上 キノウヘ に に すみ、蠅 ハエ (ハエ) など など を を 捕 トラ (ハエ) へ へ 食 ク (ハエ) ぶ。周囲 シュウイ の の 色 シキ に に つれて、眞黒 マツクロ (マツクロ)、緑 キナンド (キナンド) 金色 キンイロ (キンイロ) など、自由 ジユウ (ジユウ) に に かはる。

(二) 色體の物動

動物の中には、形を周囲の物に似せるものがある。色と、また、保護色と、周囲の物と、鮮明な色と、警戒色と、これらを警戒色といふ。

形を似させる

保護色(ホウシ)よりも、都合(ツグ)のよい方法。みぶりによって、周囲のものに似せる。

えだし、くどり

桑(ク)の害虫(ユイチ)。體色は、桑の木に似てゐる。桑の木で、休んでゐると、小枝と思へる。どびんわりと、いふ名がある。

このはち

はねの裏(ウラ)は、枯葉(カレ)に似てゐる。枝にとまってゐると枯葉に見える。

警戒色

體色が、周囲に、まぎれぬ鮮明(センメイ)なもの。たいてい、武器(ブ)、悪味(アクミ)、悪臭(アクシユウ)をもつてゐる。他の動物を、寄(ヨ)せつけない。身(ミ)の安全(アンゼン)をたもつ。

蜂と蝶との例

蜂(ハチ)……毒(ドク)の針(ハリ)……黄と黒とのだんだら。あげはのち……悪味(アクミ)……鮮明な彩色(センメイサイシキ)。

すかんく

あめりかに産(サン)する動物。肛門(コウモン)から、臭(ク)い液(エキ)を出す。白黒の縦筋(スジ)が通(ス)つてゐる。他の動物は見つけて寄りつかない。

字解

みぶりにする、周囲(ジュウイ)は、害(ガイ)後端(ゴウタン)のはし、小枝(コエダ)は、農夫(ノウフ)の表(オモテ)、美麗(ビレイ)な彩色(サイシキ)色(シキ)裏(ウラ)枯葉(カレハ)は、次(ツギ)以上(イジヤウ)まで、まつたくまるきり、鮮明(センメイ)なもの(もの)は、つかり、恐(オソ)れ 武器(ブキ)嫌(キライ)ふ、悪味(アクミ)悪臭(アクシユウ)寄(ヨ)り付(ツ)かない、安全(アンゼン)な毒(ドク)類(ルイ)近(チカ)づく、肛門(コウモン)非常(ヒジョウ)に、液(エキ)脊(セ)筋(スジ)警戒色(ケイセイ)といふ。

(附) すかんくは、いたちに似たり。肛門のあたりより、非常に悪臭ある液を分泌す、その液衣服につけば、一ヶ月間、地中にうづめても、去らぬ。また目に入れば、たちまち、めくらさ、なるといふ。

# 虎

虎(ト)ハ、インドニ産(チ)スル猛獸(モウジユ)ニシテ、ソノ形(カクシ)猫(ネコ)ニ似(ニ)タリ。身體(クニシ)ノ構造(コウゾウ)テ、生活(カクシ)ニ適(タ)シ、マタ、ソノ性質(セイシヤク)、伶俐(レイリ)ナルガユエニ、人(ヒト)ノタクミニ、人(ヒト)ノ

## 産地ト大體

産地(サンチ) || インド。性質(セイシヤク) || 猛獸(モウジユ)。身長(シナウチ) || 五尺。尾ノ長(ビノナガ) || 三尺。形状(カクシ) || 猫(ネコ)ニ似(ニ)タリ。

## 毛色

光澤(コウタク)アル黄色(キイロ)。横(ヨコ)ニ黒線(コクセン)アリ、鮮明(センメイ)。黒線(コクセン)ハ竹ノ影(カゲ)ニ似(ニ)テ、所在(シヨクザイ)ヲ認(シ)メ難(ガム)シ。

## 形態

頭(カブ) || 短(ミダカ)ク圓(マダラ)シ、顎(アゴ)ノ筋肉(キンニク)太(オホ)ク、物(モノ)ヲカムニ適(タ)ス。

牙(キバ) || 顎(アゴ)ニ上下(ウヘノタテ)トモ二本(ニホン)ツツアリ。

舌(ゼツ) || 舌(ゼツ)ノ上(ウヘ)ニ、後(ノチ)ニ向(ムカ)ケル、突起(トツキ)アリ。

足(タビ) || 骨(ハネ)ニツキタル肉(ニク)ヲ、ナメトルニ適(タ)ス。

食物(シヨクモノ) || 獸類(ジュウライ)ヲ捕(ツ)フルニハ、物影(モノカゲ)ヨリ、不意(フイ)ニ、ト

# 字解

尾(ビ) || 猛獸(モウジユ)ノ尾(ビ)ハ、光澤(コウタク)ツツヤリ。鮮明(センメイ)ニシテ、異ナルコトナシ。爪(ツメ) || 羊(ヒツジ)ノ爪(ツメ)ニ似(ニ)テ、柔(ユウ)クシ。骨格(コツカク) || 骨格(コツカク)ハ、攻撃(コウゲキ)ニ適(タ)ス。牙(キバ) || 牙(キバ)ハ、舌(ゼツ)ニ似(ニ)テ、突起(トツキ)アリ。舌(ゼツ) || 舌(ゼツ)ハ、肉(ニク)ヲサクニ適(タ)ス。伶俐(レイリ) || 伶俐(レイリ)ナルガユエニ、人(ヒト)ノタクミニ、人(ヒト)ノ

攻撃(コウゲキ)ヲマヌカレテ、今(イマ)、ナホ多ク生存(セイゾン)セリ。

## 食物

獸類(ジュウライ)ヲ捕(ツ)フルニハ、物影(モノカゲ)ヨリ、不意(フイ)ニ、ト

## 虎狩

鹿(カ)ノ前足(マエタビ)ノ一打(ヒト)ニテ殺(コロ)ス。虎(ト)ハ人(ヒト)ヲ捕(ツ)ヘ食(ク)フコトアリ。皮(クニ)ハ裝飾(カクシ)トナスベシ。インド(インド)ノ人(ヒト)ハ、種々(シツシツ)工夫(クワフ)シテ、コレヲ狩(カ)ル。

## 虎ノ生存

性質(セイシヤク)伶俐(レイリ)ナリ。構造(コウゾウ)生活(カクシ)ニ適(タ)ス。攻撃(コウゲキ)ヲマヌカレ、多ク(オホク)生存(セイゾン)セリ。

○讀本 二學年 上

# 風

風は、空氣が、太陽の熱に、暖められて、運動するより、起るものにして、種類多し。暴風（フウリ）颶風（ウツ）などは、われらに、害をおよぼすことあるれども、多くは、ほごよくふきて利益（キエ）を興（ア）ふるものなり。

燭の障子  
の燭の障子  
の燭の障子

大小二室の障子をしめ、小室をあたたむ。障子（シヨ）を開き、敷居（シキ）と鴨居（カモ）とに蠟燭（ロウソク）を置く。

その説明

空氣、冷ゆれば、重くなりて、下へくだる。空氣、暖（ヌグ）まれば、軽（カ）くなりて、上へのぼる。上へのぼれば、冷えたる空氣、動き來る。燭（ロウソク）の傾（カ）きかたを異（ヒ）にするば、これがためである。

原因の

原因（ゲン）は、ひつきより、この理による。ある地方の空氣、のぼれば、そのあとをうづめるため、四方より空氣流れ來る。

種類

無風（ムフ）、軟風（ナン）、和風（ワフ）、疾風（カッ）、強風（キヨウ）、暴風（フウ）、颶風（ウツ）

風害の

## 利害

農作物を荒す。樹木、垣根を倒す。屋根をばぐ。船をくつがへす。氣候をやはらぐ。雨をはこぶ。植物の生育を助く。空氣をよくす。道路をかわかす。船をはしらす。

# 字解

諸子（シヨシ）みな、あひ隣（トナ）れる。大小の二室（ダイシヨウニシツ）の障子（シヨ）を開き、敷居（シキ）と鴨居（カモ）とに蠟燭（ロウソク）を置く。傾（カ）きかたを異（ヒ）にするば、これがためである。

敷居（シキ）様（サマ）より、さすれば、置（オ）ける。傾（カ）む。坐（ザ）するもの。感（カン）ずべし。位置（イ）ち。上下（ジヨウカ）した。傾（カ）きかたを異（ヒ）にするば、これがためである。理由（リユウ）の、説（セツ）明（メイ）せん。冷（ヒ）ゆ。重（オモ）く。暖（ヌグ）まる。輕（カ）く。動（ウゴ）き來（キ）る。ひつきより。理（リ）の、地球（チキウ）上（ジョウ）の、表面（ヘイメン）で、傳（ツタ）ひ。方向（ホウコウ）の、北風（キタカゼ）、南風（ナンフウ）を、稱（シヨウ）す。暴風（フウフウ）、颶風（ウツフウ）、農作物（ノウサクモノ）の、荒（アラ）し。不潔（フケツ）な、倒（タ）し。運（ウン）び。生育（セイイク）の、乾（カ）かす。利益（リキ）の、興（ア）ふ。

○ 讀本 二學年 上



# 天氣豫報之法

人は、空氣(キク)の中に、すんでをるから、氣象(キキ)を知らねばならぬ。中央氣象臺(チュウオウキキダイ)は、全國(クワンコク)の天氣豫報(テニキヨウホウ)は、各測候所(カクソウコウジョ)をつくり、は、その地方(コウバツ)の天氣豫報(テニキヨウホウ)をつくり、りて、これを掲(カキ)示(シ)す。また、暴風(ボウフウ)などの

氣象(キキ)を知る要(ヨウ) 全國(クワンコク)天氣(テニキ)豫報(ヨウホウ) 地方(コウバツ)天氣(テニキ)豫報(ヨウホウ) 天氣(テニキ)豫報(ヨウホウ) 報(ヨウホウ) 示(シ)

空氣中の現象(ゲンショウ) 氣象(キキ) 晴(ハレ)れる、雨降(アメ)る 氣象(キキ)は、人の生活(セイゴ)に、大關係(オホケンケイ)がある。 氣象(キキ)は、氣象臺(キキダイ)や、測候所(ソウコウジョ)で、調べる。 各測候所(カクソウコウジョ)は、毎日、三度、氣象臺(キキダイ)に報告(コウゴ)す。 氣象臺(キキダイ)は、全國(クワンコク)の氣象(キキ)を、測候所(ソウコウジョ)に報す。 測候所(ソウコウジョ)は、全國(クワンコク)天氣豫報(テニキヨウホウ)に基(キ)き、その地方(コウバツ)の氣象(キキ)を考へて、掲示(カキシ)す。 全國(クワンコク)の天氣豫報(テニキヨウホウ)、地方(コウバツ)の天氣豫報(テニキヨウホウ)は、氣象臺(キキダイ)、測候所(ソウコウジョ)、役所(ヤクジョ)の前等(ゼントウ)に掲示(カキシ)す。 人は、あしたの天氣(テニキ)を、知(チ)ることを得(エ)る。 氣象臺(キキダイ)は、暴風(ボウフウ)、暴風雨(ボウフウアメ)等を、報知(コウチ)する。 測候所(ソウコウジョ)や信號所(シヨウゴ)に、しるしを掲げる。

# 字解

警報(ケイポウ)を、出(デ)して、警戒(ケイカイ)せしむ。

警報(ケイポウ)の効用(コウユウ) 港(トナリ)の船(フネ)は、出帆(シュッパン)を見合せ、沖(オキ)の船(フネ)が、出帆(シュッパン)してから、船(フネ)の難(ナ)が少(オク)くない。

警報(ケイポウ)の種類(ルイ) 晝(ヒル) 赤(アカ)い球(クウ) 圓筒形(エンキョウケイ)のもの 圓錐形(エンスイケイ)のもの 夜(ヨ) 紅燈(ベニトウ) 綠燈(キナンドウ) 等(トウ) 港(トナリ)の船(フネ)は、出帆(シュッパン)を見合せ、沖(オキ)の船(フネ)が、出帆(シュッパン)してから、船(フネ)の難(ナ)が少(オク)くない。

生活(セイカツ) 氣象(キキ) 役所(ヤクジョ) 仕事(シゴト) 圓錐形(エンスイケイ) 見合せ(ミアヒセ) 避(ヒ)く 報知(コウチ) 中央(チュウオウ) 電報(デンポウ) 紅燈(ベニトウ) 綠燈(キナンドウ) 信號所(シヨウゴ) 沈(シヅ)んだり 午前(ゴゼン) 午後(ゴゴ) 必要(ヒツヨー) 現象(ゲンショウ) 報告(コウゴ) 翌日(ヨクジツ) 暴風雨(ボウフウアメ) 警報(ケイポウ)

○ 讀本 二學年 上



五鎮守府

ワガ海軍ハ、五ツノ海軍區ニ分ツ。各區ニ軍港、鎮守府アリテ、軍務ムンヲ扱フ。軍艦ハ各鎮守府ニ分レ屬セリ。

現今(ヨシ)五鎮守府アリ。

第一 横須賀(ヨコスカ) 第二 吳(ウ) 第三 佐世保(サセボ) 第四 舞鶴(マヅヒ) 第五 旅順口(リョウシュウ)

戰艦

モットモ、優勢ナル軍艦。敵ノ軍艦、砲臺ヲ破壊ス。巨砲ヲスエツケ、厚キ鋼鐵ニテ包ツム。敷島(シマキ)、富士、三笠、朝日、ナドノ類。任務モットモ多シ。

戰時(ゼン)敵狀ヲサグリ、ワガ運送船(セウセン)商船(セウボウ)ヲ保護シ、敵艦ヲ捕獲(クホク)破壊ス。

ワガ國ノ海軍

ワガ國ノ海軍區、軍艦ノ種類、構造、任務、組織等、沿海防禦ニ必要ナル海軍ノコトヲ知ラシム。

軍艦ノ種類

巡洋艦(ジュンヨウカン) 平時(ヘイ)は、近海警戒(カイ)ノタメ、巡航艦(ジュン)ス。艦體(タカ)大ニシテ多量(ヨリ)ノ石炭ヲ積(ツ)ミ、速力(ソククリ)早ク、長時間航海(チヨウカウ)カハスルコトヲ得。出雲、淺間、八雲、常磐(トキ)ノ日進、春日等、戰時(ゼン)島ノ間、淺海(カシ)ニ入り敵艦破壊。平時(ヘイ)ワガ沿海ヲ警戒ス。船體(タカ)輕小(ケイコウ)、船足(フジ)淺シ。筑紫(ツクシ)字治(ジ)等。敵狀(テウ)ヲサグリテ、ワガ軍艦ニ通報(ツウポウ)ス。ワガ軍艦ノ命令(メイレイ)、通信ヲ取次(ツグツグ)ス。船體(タカ)輕ク、速力早ク、通報ニ便ナリ。千早(チハヤ)、八重山(ヤエヤマ)等。水雷母艦(スイライボカン) 驅逐艦(クソクカン)等モアリ、形態(ケイ)ハナハダ小。速力ハヤシ。雨、霧、夜明、日暮、暗夜ニ敵艦ヲ破壊ス。

艦隊組織カンマイツシキ 軍艦二隻以上ニテ艦隊ヲ組織ス。  
 海軍区内ヲ巡航シテ警備ケイビノ任ニ當ル。  
 常備艦隊ジョウビカンダイ 鎮守府ニ屬セズ。  
 航海、商業ノ保護

# 字解

沿岸エンガン 沿ユ 岸ガン 防禦ボウゴ 防ボウ 禦ゴ 海岸カイガン 海カイ 岸ガン 海面カイメン 海カイ 面メン 軍港グンコウ 軍グン 港コウ 鎮守府チンシュフ 鎮チン 守シュ 府フ 取扱トリアツカ 取トリ 扱アツカ 屬ゾク 屬ゾク 戦艦センガン 戦セン 艦ガン 砲艦ホウガン 砲ホウ 艦ガン 通報艦ツウボウカン 通ツウ 報ボウ 艦カン 任務ニシム 任ニシム 務ム 構造コウゾウ 構コウ 造ゾウ 優勢ユウセイ 優ユウ 勢セイ 巨大キョウダイ 巨キョウ 大ダイ 鋼鐵コウテツ 鋼コウ 鐵テツ 戦時センジ 戦セン 時ジ 港灣コウワン 港コウ 灣ワン 情況ジョウキョウ 情ジョウ 況キョウ 運送船ウンソウセン 運ウン 送ソウ 船セン 商船ジョウセン 商ジョウ 船セン 敵艦テキカン 敵テキ 艦カン 破壊ハカイ 破ハ 壞カイ 捕獲ホカク 捕ホ 獲カク 近海キンカイ 近キン 海カイ 警戒ケイカイ 警ケイ 戒カイ 艦體カンタイ 艦カン 體タイ 速度ソクド 速ソク 度ド 淺海センカイ 淺セン 海カイ 輕カウ 輕カウ 船足フナアシ 船フナ 足アシ 通報ツウボウ 通ツウ 報ボウ 命令メイレイ 命メイ 令レイ 取次トリツギ 取トリ 次ツギ 便利ベンリ 便ベン 利リ 形體ケイタイ 形ケイ 體タイ 夜明ヨアキ 夜ヨ 明アキ 日暮ヒクツレ 日ヒ 暮クツレ 乘ジョウ 乘ジョウ 發射ハツシャ 發ハツ 射シャ シテ 艦隊カンダイ 艦カン 隊ダイ 組織シキ 組シキ 織キ シテ 巡航ジュンコウ 巡ジュン 航コウ 演習エンジュウ 演エン 習ジュウ

# 高等小學書方

二學年前期

○書方二學年上

# 字體

楷書 カイショ	行書 ギョウショ	草書 ソウショ	注意 チュウイ
楷書とは、第六、七ページ、十八、十九ページに書いてあるよーなもつとも正しく、まじめな字体であつて、一點(シテ)一劃(カ)も、なほざりにしてはならぬ。たとへていへば、装束(ゾウゾク)を着、冠(カウ)をいただいて、行儀(ギョウギ)正しくかまへてをるよーなものである。	行書は、楷書を少しく略(リョク)したもので、書き方手本中、楷書を除いた他の文字は、みな、行書である。たとへば、羽織(ウヅ)を着て、行儀正しくかまへてをるよーなものであるが、やはり、行儀をくつすことは許さない。	草書は、行書をいっそ一略したもので、書き方手本中には、示してない。楷書や行書を、十分に習ひ得ぬものが、草書を書かうとすれば、まちがったものができて、たいそ一害があるから、早くから、なぐりがきすることはよろしくない。	字を習ふには、まづ、楷書を習うて、筆法、字形を十分に會得(クワイトク)した後、行書を稽古(ケイコ)するが順序(ジユン)である。楷書で、十分に練習しておかねば、行書も草書も書けるものでない。

# 諸注意

一 姿勢 シセイ	二 執筆 シツビツ	三 運筆 ウンビツ	四 字配 ジハイ
正しく腰をかけ、足をそろへて立て、上体は、少しく前に傾けるも、目は、あまり近づけてはならぬ。頭を左方に傾けたり、臂(ヒ)を机にのせこれにもたれたりしてはならぬ。	<p>双鉤法 ソウコウホフ</p> <p>筆の向側に、二本の指をかけることで、大字を書く時は、かならず、この法によらねばならぬ。</p> <p>單鉤法 タンコウホフ</p> <p>筆の向側に、一本の指をかけることで、小字を書く時は、この法によつてもよろしい。</p>	<p>大字</p> <p>大字を書く時には、双鉤法によらなくては、力が足りない。右手は何れの部分も机につけないで、左手は、指だけをのせ、紙をおさへてゐて書く。</p> <p>小字</p> <p>小字の時には、單鉤法によれば、早く書ける。この時は、左手を枕とし、右手の手頭を載せて書く。</p>	<p>字配とは、その紙に書いた字が、規律(キツ)正しく奇麗(キレイ)にはまつてをることである。字配の善悪は、成績(セキ)に大關係がある。天地を程よくあけ、高低がないよーに、間を等しくあける。</p>

横劃

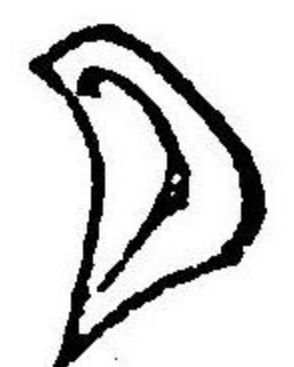
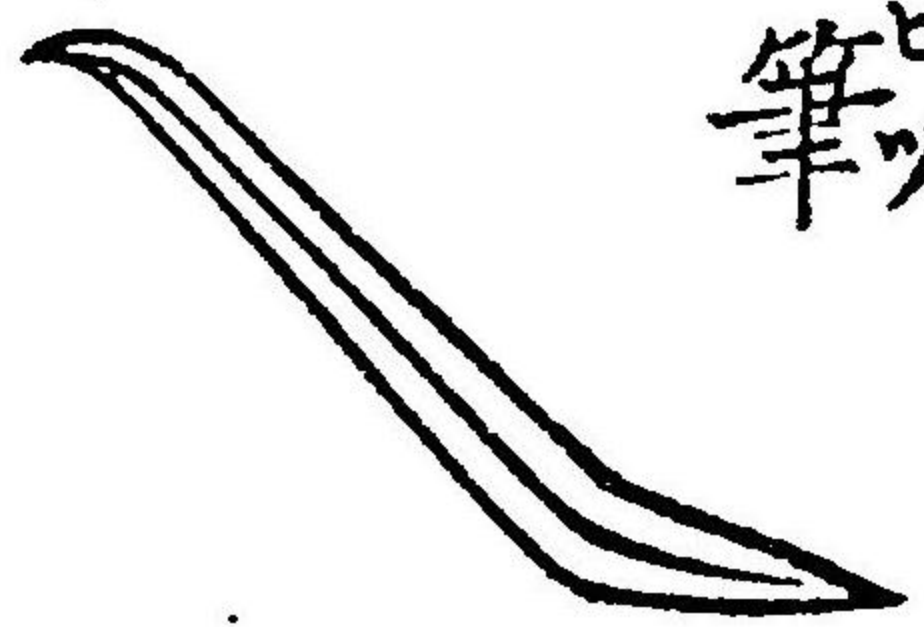
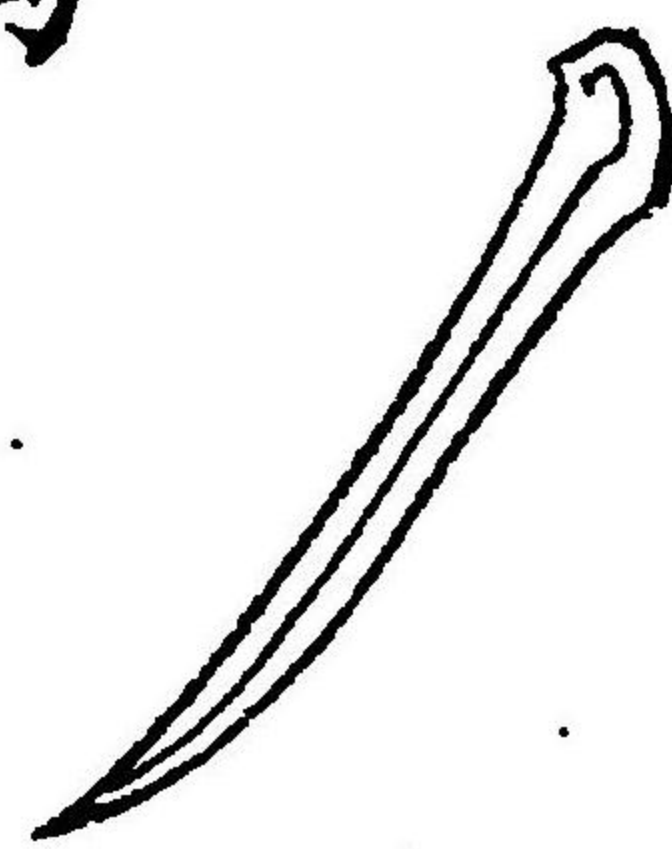


縦劃



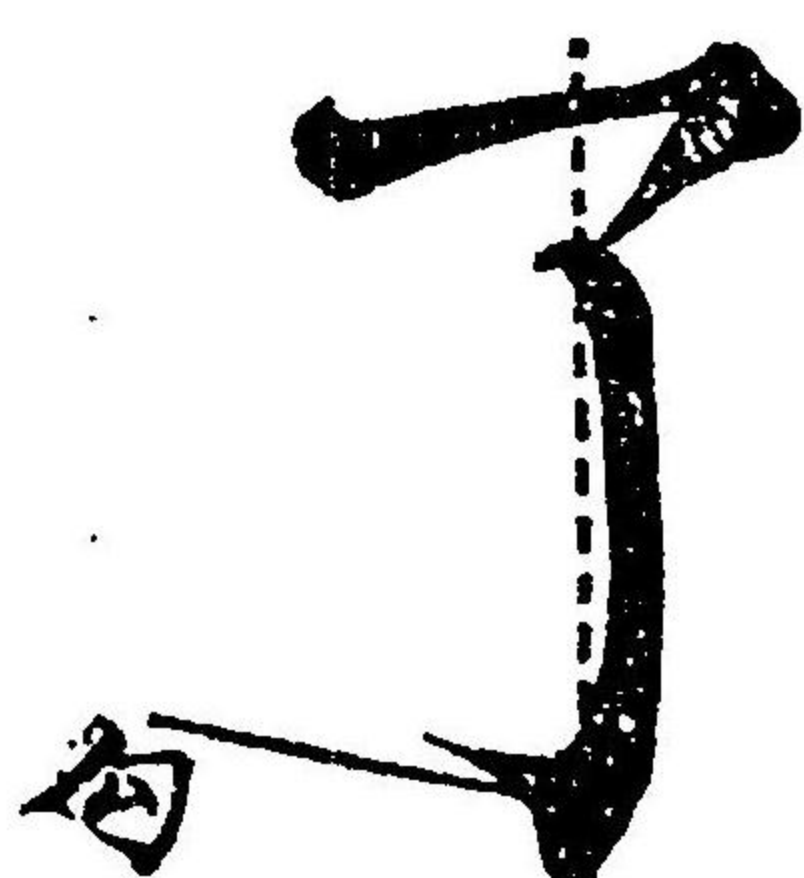
勾

波筆

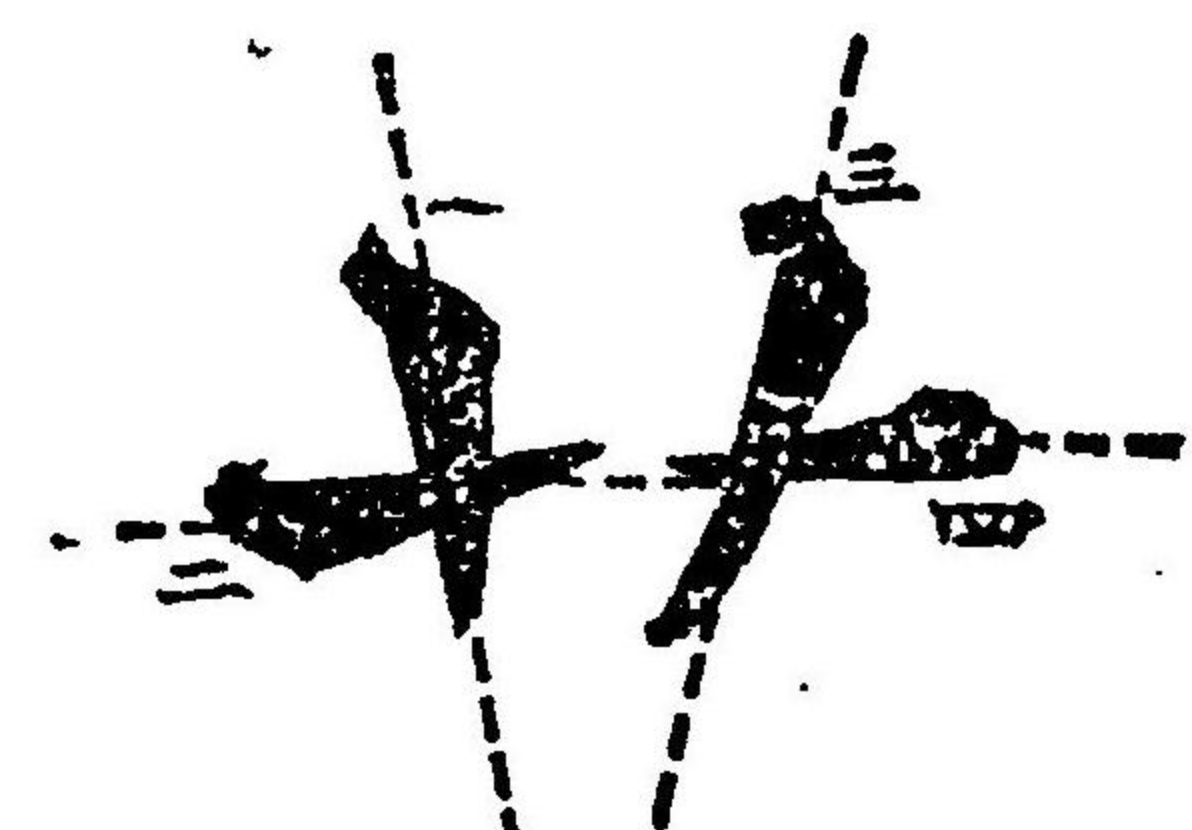


散水

集水



勾



中の小さい線は、筆の頭の運び方を示したものである。これらは、すべての字の基本(ホシ)となるものであるから、練習した上にも練習して、十分に熟達(ジュク)しておくがよい。すべての字は、しせんに、立派(リツ)に書けるであらう。

散水

右方に書く字、すなはち、つくりの劃少き字に用ふ

例 汽浴 泳 沖 治

集水

右方に書く字、すなはち、つくりの劃多き字に用ふ

例 海濱 漁港 滅

文字組  
立上の  
注意

一 横割(カク)の重なった文字は、その間のへだたりを等しうすることに注意せねばならぬ。

拜。勤。體。請。  
美。重。鳥。圓。  
軍。積。景。

二 中央の縦の線をもととしてこれを失はないよーに注意すること

學。高。業。當。會。  
宮。屋。參。子。勇。勞。  
糸。圓。重。廣。空。美。

三 全体の字の釣合(ツリ)をとる点に注意せよ

一本の長い横割によるもの  
千。子。義。集。重。  
宮。勞。空。學。家。  
ハハハによるもの  
鳥。魚。熊。煮。熱。  
ニニ波筆によるもの  
木。父。參。史。春。

文字組  
立上の  
注意

四 左右の釣合に注意すること

五、勾のこと

イ	口	イ	ホ	ニ	ハ	口	イ
頭をそろへる文字	下をそろへる文字	上下ともそろへる	肩をそろへる文字	上下をそろへぬ字	大なる勾をつくるべき文字	勾をはぶくべき文字	勾がならび、又は、重なる時は、終りの一つだけ勾を作り、その他ははぶく。
明。拜。門。唱。編。	他。物。細。松。板。	殿。縦。横。餘。救。	族。類。卵。枚。地。	殘。貯。術。形。順。	良。了。戈。于。力。	竹。村。林。禁。森。菱。	

文字組  
立上の  
注意

六

波筆に  
ついで

七

左右縦  
劃の  
かたむき

交。奈。炎。食。

七十

などの如く、波筆の重なるものは、必ず一つの波筆をばぶき、一つだけ波筆をつくるのである。波筆を重ねて書くことは、よろしくない

高商口雨

などの字に於て、左右の縦劃(がけ)は、等しいかたむきにせねばならぬ。左をまっすぐに引けば、右もまっすぐに引き、左をかたむけたらば、右も同じはごにかたむける。

高

これら  
はよし

商

雨

これは  
わるい

# 高等小學綴方

二學年前期

○綴方二學年上

七十一



時の区分

過去(カコ)もはや、すぎ去ってしまったこと。  
 現在(イマ)今、ありつゝあること。  
 未来(ミタ)これより後にあること。

時 間 法

過去をあらはす辭	現在をあらはす辭	未來をあらはす辭	文 語	口 語
たり けり り き ぬ	く、す、つ ぬ、ふ、む ゆ、る、う	ん、なん ならん	読みたり 読みたり 読みたり 読みたり 読みたり	居居 居居 居居 居居 居居
たり けり り き ぬ	く、す、つ ぬ、ふ、む ゆ、る、う	ん、なん ならん	読みたり 読みたり 読みたり 読みたり 読みたり	居居 居居 居居 居居 居居
たり けり り き ぬ	く、す、つ ぬ、ふ、む ゆ、る、う	ん、なん ならん	読みたり 読みたり 読みたり 読みたり 読みたり	居居 居居 居居 居居 居居
たり けり り き ぬ	く、す、つ ぬ、ふ、む ゆ、る、う	ん、なん ならん	読みたり 読みたり 読みたり 読みたり 読みたり	居居 居居 居居 居居 居居
たり けり り き ぬ	く、す、つ ぬ、ふ、む ゆ、る、う	ん、なん ならん	読みたり 読みたり 読みたり 読みたり 読みたり	居居 居居 居居 居居 居居
たり けり り き ぬ	く、す、つ ぬ、ふ、む ゆ、る、う	ん、なん ならん	読みたり 読みたり 読みたり 読みたり 読みたり	居居 居居 居居 居居 居居
たり けり り き ぬ	く、す、つ ぬ、ふ、む ゆ、る、う	ん、なん ならん	読みたり 読みたり 読みたり 読みたり 読みたり	居居 居居 居居 居居 居居
たり けり り き ぬ	く、す、つ ぬ、ふ、む ゆ、る、う	ん、なん ならん	読みたり 読みたり 読みたり 読みたり 読みたり	居居 居居 居居 居居 居居
たり けり り き ぬ	く、す、つ ぬ、ふ、む ゆ、る、う	ん、なん ならん	読みたり 読みたり 読みたり 読みたり 読みたり	居居 居居 居居 居居 居居
たり けり り き ぬ	く、す、つ ぬ、ふ、む ゆ、る、う	ん、なん ならん	読みたり 読みたり 読みたり 読みたり 読みたり	居居 居居 居居 居居 居居

模範文

以下、模範(マダナ)とすべき文章をかかげてある。  
 これを、何十度も読んで暗記(カシ)してをれば  
 文を綴る上において、大なる便益がある。

伊勢神宮

(普通文體)

伊勢神宮は、伊勢國度會郡五十鈴川のはとりにあり。内宮(ナイ)には、八咫の御鏡を御神體として、皇祖天照大神をまつり奉り、外宮(ウツ)には、豊受大神(トヨウケ)をまつり奉る。神殿は、すべて古風の建築にて、二十年ごとに改築(カキ)せらるれども、かつて、そのさまを改められたることなし。  
 境内(ナリ)には、古き杉の木しんしんとおひしげり、崇敬(ケイ)の念、おのづからおこる。じつに、天下第一の尊き社なり。ゆゑに、皇室の御崇敬あらせらるるは申すに及ばず、年年伊勢參宮とて、各地より參拜するものはなはだ多し。

楠木正行

(獨演體)

○綴方 二學年 上

楠木正行ハ、正成ノ子デアアル。櫻井驛デ父ノ遺訓(ツツ)ヲウケテ、河内へ歸ッタ  
ノハ、十一歳ノ時デアッタ。

正成ハ、湊川デ、尊氏直義ノ軍ト戦ッテ討死シタガ、尊氏ハ、ソノ首ヲ正成ノ家  
ニ送リトドケタ。正行ハ、カネテ、カウデアラウカトハ思ッテ非タガ、今、目ノ  
前ニカハリハテタルサマヲ見テ、胸モフサガリ、氣モ遠クナルホドデ、アマリ  
ノ悲シサニ、自殺(ツツ)セウトシタ。母ハ、大イニ驚イテ、ソノ刀ヲウバヒ取り、  
サテ、ネンゴロニ忠ト孝トノ道ヲ教ヘサトシタカラ、正行ハ、大ソノ感心シテ、  
ソノ後ハ、父ノ遺言ト、母ノ教訓トヲ守ッテ、ヘイゼイ遊ブ時ニモ、賊ヲホロボ  
スマネナドヲシテ、ユメニモ、ソノ事ヲスレナカタ。

## 天の橋立

(獨演體)

天の橋立は、丹後國宮津灣の内にある。海中につき出てをること二十七町四  
十間、幅は三十七間ばかりで、枝ぶりのおもしろい青々とした松が、その上  
におひしげつてゐて、下は、きれいな白砂である。これを成相山(ツツ)からながめ  
ると、海の中に、松がはえたよーにもあり、波の上に、長い橋をわたしたよーに  
も見えて、その景色のよいことは、筆にも口にもべられない。天の橋立と  
は、じつに、よくにあうた名で、日本三景の一にかぞへられてをるのも、もつと  
もである。

## わが家

(對話體)

私の家は、山中村の東にあります。前は、東西に通じてをる大道で、その前に  
は大石川があります。家の後には、小山がありまして、木がしんしんとおひし  
げつてゐます。家族は、祖父(ツツ)、父母、二人の兄、私と妹と八人です。  
祖父さんは、まだたっしやで、をりをり山の植木を見に行かれます。新聞を讀む  
時には、大きな眼鏡(ツツ)をかけられますが、杖(ツツ)は、ちやうとも用ひなさらぬ。  
祖母さんは、妹をつれて、お宮やお寺へまゐたり、摘草(ツツ)をしたりせられ  
ます。父上と上の兄さんとは農業で、母上は、内の事をしてをられます。次の  
兄さんは、會社につとめてをられます。又、三藏といふ下男がゐまして、大を  
ーおもしろい男で、時時、をかしいはなしをしてきかせます。歌も上手(ツツ)で  
朝早く牛を引いて、大きな聲で歌ひながら山へ行く時などは、じつにいさまし

うあります。又、角力(ツマ)も、大へん強いさうですが、私とさる時には、たまには、まけてくれますので、じつにをかしうあります。家内のものは、みな、よく祖父母、父母のいひつけをまもりまして、兄弟は、なかよく暮してゐますから、いつも樂しうあります。「笑ふ門には福きたる」といふこともありますから、私らは、この上にも、むつまじう暮しまして、一家の幸福をますことをつとめねばなりません。

## 奈良 (普通文體)

奈良は、奈良朝七代七十五年間、帝都のありし地にして、當時は、はなはだ盛なる都會なりしが、その後、しだいにさびれゆきて、都のあとも、今は、多く田畑とかはりたり。されど、名所舊蹟(ノイゼキ)の所所に残れるもの多く、そぞろに昔の盛況(セイキ)をしのばしむ。春日神社(カサガジ)は、奈良市の東にあり。境内ひろく、古き杉の木、晝も暗きばかりにおひしげりて、多くの鹿、その間に群れ遊べり。社殿の壯麗なること、燈籠(ロウ)の多きことなど、たぐひまれなり。

東大寺は、大佛ありて名高く、興福寺、西大寺、藥師寺、唐招提寺など、いづれも世にあらはれたり。正倉院は、奈良朝時代の遺物(ウツ)を多く藏して、美術、歴史の參考(カン)となるもの少からず、今は、帝室の御庫となれり。この外、嫩草山(ウカク)、猿澤池(サルサハ)など、名所舊蹟に富みたれば、遊覽(ユウ)の人四時たゆることなし。

## 農工業 (獨演體)

人ノ職業ハ、種種様様アルガ、ソノ中デモ、農業ト工業トハ、モットモ大切デアアル。ワレラノ日日食ッテアル米、麥、野菜ノ類ハ、ミナ、農業ニヨッテエタモノデアッテ、衣服、器具、家ナドハ、工業ニヨッテ得タモノデアアル。コノ外、養蠶(ヤシ)、牧畜(ボク)、製茶(チヤ)ナドハ、農業ニゾクシ、土木業、酒類ノ製造ハ、工業デアアル。カヨ一ニ、農業ト工業トハ、物ヲ製出スル元デアアルカラ、ワレ等ハ、マスマスコレヲ盛ニシテ、家ヲ富マシ、國ヲ富マスコトヲハカラネバナラヌ。コレ、國家ニタイシテ、一ツノ忠義トナルノデアアル。

○綴方ニ學年上

## 田植の手傳をたのむ

(候を用ひぬ手紙)

私方には、明後日田植にかかりたいと思ひますが、人手が足りませんので、大を困つてをります。貴家にも、定めて、おいそがしいなかばではありませうが、お一人だけ、お手傳下さることはできませんまいか。まことに申上げかねたことではありますが、あまり困つてゐますので、無理をお願い申します。

## 大坂

(獨演體)

大坂は、昔は浪速(ナニ)ととなへて、仁徳天皇の都せられた地であつて、後、豊臣秀吉が、城をこの地に築いて、天下の政治をとつてから、このかた、大いに盛になつたのである。今は、人口百二十萬にもおよんで、淀川は、市の北を流れ、その河口には、あらたに築港工事(チクゴ)を起してをる。たくさんの堀川は、市街を縦横につらぬいてゐる、鐵道は四方に通じてをるから、水陸の交通は、きはめて便利である。商業の盛なことは、わが國第一であつて、近頃、工業も、また、大を發達して來た。

市中には、橋の數がきはめて多いが、その中でも、天神橋と天満橋とは、もつと

も壯麗(ソレ)である。また、有名な社寺では、高津神社(コシヅ)生魂神社(シクマ)天満天神(テンマンテン)、四天王寺、東、西本願寺別院などである。砲兵工廠(チウヘイコ)造幣局(ソウヘイコ)、多くの紡績工場(ボウシキョ)鐵工所その他の工場が多いから、烟突(エンツ)は林の如く立つてゐて、煤烟(バイ)は、常に天にみなぎつてをる。

## 海水浴

(普通文體)

夏の遊は、海水浴にしくものなし。海水に浴すれば、身體を運動すること多く胃や腸のはたらきをよくし、皮膚(ヒ)をすこやかにし、また、けしきもよく、空氣も清潔なれば、ただに、愉快(イカ)多きのみならず、大いに、身體の健康(ケン)を助くるものなり。

海水浴について注意すべきことは、食事の後、三十分より一時間ばかりは、しづかに休息すべし。また、十一時ごろより三時ごろまでは、これをさくるをよしとす。身體のありさまをはかりて、一時に、あまり久しく海中にあるべからず。海水をあび終らば、海水にて身體をあらひ、かわきたる手拭(テグシ)にて、きれいに拭ふべし。

## 本能寺ノ戦 (對話體)

織田信長ハ、ソノ家來(イナ)ノ羽柴秀吉ニイヒツケテ、毛利氏ヲウタセマシタ。秀吉ハ、兵ヲヒキヰテ山陰道ニ入りコミ、毛利氏ノ諸城ヲ攻メ落イテ、備中ニ下ツテ、高松城ヲ攻メマシタガ、ヨローイニオトシイレルコトガデキマセンデシタ。時ニ、毛利氏ハ、大軍ヲダシテ、高松城ヲスクヒマシタカラ、秀吉モ、マタ援軍(ケン)ヲ信長ニコヒマシタ、ソコデ、信長ハ、自身デコレヲ助ケヤウト思ッテ兵ヲ率ヒテ京都ニ入り、本能寺ニヤドリマシテ、明智光秀ヲ先發トシテ出シマシタ。光秀ハ、カネテ信長ヲウランデアルコトガアリマシタカラ、ニハカニ反心ヲオコシマシテ。途中カラ引返シテ、本能寺ヲオソヒマシタ。信長ハ、森蘭丸(シモリ丸)等ト、カヲツクイテ防ギ戦ヒマシタケレドモ、ナニブンニモ、事ガ不意ニオコッタコトデ、兵モ少クアリマシタカラ。ササヘルコトガ、デキマセンデ、トートー、寺ニ火ヲカケテ自殺(ジツ)シマシタ。コノ時、信長ノ子信忠モ、マタ。二條城デ自殺シマシタ。

# 小學地理

二學年前期

# 近畿地方

位置 國 地

置

本州中部の西南。  
東——本州中部地方、伊勢海。  
西——中國地方、海を隔て、四國。  
南——太平洋。  
北——日本海。

京都府

兵庫縣

大坂府

山城 丹波 播磨 淡路 攝津 河内 和泉

三重縣

和歌山縣

滋賀縣

奈良縣

伊勢

伊賀

志摩

東西にわたれる山脈

南北にわたれる山脈

北部——中國山脈

南部——紀伊山脈

II の形

# 方

海 氣 産

岸

候

物

故に、北部と南部とは高地にて中部低し。

東西に平野あり  
東の平野——伊勢米の産地。  
西の平野——大坂平野。

東——志摩半島——伊勢海。 南——紀伊大半島——潮岬

西——大坂灣。 北——興謝半島——宮津灣

一般に、寒暑共に、やゝきびし。

雨——中部は少く、北部はやゝ多く、南部は最も多し。

攝津米。 伊勢米。 棉。 茶。 吉野杉。 檜。 松。

西陣織。 縮緬。 染物。 清水焼。 七寶焼。 河内木綿。

線ネル。 緞通。 紡績糸。 蜜柑。 酒。 鹽。 金。 銀。

# 字 解

近畿地方 連り 政行 上り 臨み 突き 伊勢海 大坂灣

○地理 二學年 上

# 滋賀縣

管轄 近江

位置 岐阜縣の西南につらなる。

地勢 四方に山をめぐらし、中央は低地 琵琶湖をたふふ。

平野 琵琶湖のぐるりに、少しの平地あるのみ 江州米(コメ)の産地

山 比叡山(延暦寺 天台宗の本山)、賤ヶ嶽(古戰場)、比良嶽、伊吹山

琵琶湖 (東西五里、南北十五里 周圍六十餘里 日本第一の大湖 鯉、鮒の名産がある 汽船往來 運輸の便、沿岸に近江八景あり)

湖、川

勢多川 湖水の出口 宇治川 淀川となる。

疏水 京都に湖水を引くもの 六千七百七間。

都會

大津市(三万八千) 縣廳の所在地 交通の要地 彦根(彦根公園) 長濱 濱縮緬の産地 草津、米原(鐵道のわかれ所)

鐵道

東海道線 岐阜より米原に來り、京都に入る。  
北陸線 米原より北に、敦賀に通ず。  
關西線 三重縣より來り、草津に達す。  
近江線 彦根より南に走り、關西線に連る。

産物

江州米。長濱縮緬(普通に濱縮緬と  
いふ)。蚊帳(カ)。菜種。鯉。鮒。  
麻。伊吹山の艾(モグ)。

名所

近江八景(勢多、石山寺、三井寺、粟津、  
堅田、八橋、唐崎、比良岳) 延暦寺、園城  
寺(三井寺)、彦根の公園、賤ヶ嶽  
(豊臣秀吉の軍と柴田勝家の軍と戦ひし所)

彦根公園

# 字解

滋賀 四境(シキヨ)の 中央(チュウオウ) 琵琶湖(ヒヤハコ)

魚類(イシナ) 運輸(ウンユ) 附近(フキン) 肥沃(ヒヨク)

麻(アサ) 西南岸(セイヤンガン) 所在地(シヨザイチ) 湖東(コト)

途中(トチュウ) 米原(マイハラ) 彦根(ヒコネ) 長濱(ナガハマ)

縮緬(チリメン) 古戰場(コセンバウ) のあつたところ

○地理 二學年 上



# 京都府

管轄 山城、丹波の大部、丹後。

位置 滋賀縣の西に連る。

地勢 西北部は中國山脈、南部に平野あり、山城平野。山比叡山(延暦寺)、鞍馬山、愛宕山(山)、笠置山古戰場。

海岸 西北に與謝半島突出して、宮津灣をいづく。

河 南に流るるもの加茂川、桂川、保津川、みな宇治川に入る。北に流るるもの木津川(宇治川に入る)、山良川、宮津灣(入る)。

都會 京都市(四十萬) 第十六師團司令部あり。御所、二條離宮、帝國大學、博物館、平安神宮、八坂神社、北野神社、本願寺、知恩院、清水寺、金閣寺、疏水工事、琵琶湖の水を引、長さ五里餘の大事。

鐵道 伏見(京都より三里、舞鶴(軍港))。宮津、開港場。福知山(旅團あり)。宇治茶の名産地(平等院あり)。峰山(縮細の産地)。

東海道線(滋賀縣より來り京都を経て大阪に通ず。京都線(福知山に通ず)。關西線(大阪より奈良を経て京都に來るもの、木津より名古屋に通ずるものとの二線)。

産物 西陣織、染物、清水焼、粟田焼、漆器、七寶焼、白粉、紅、京人形、宇治茶(一年五十五萬貫、峰山の縮緬)

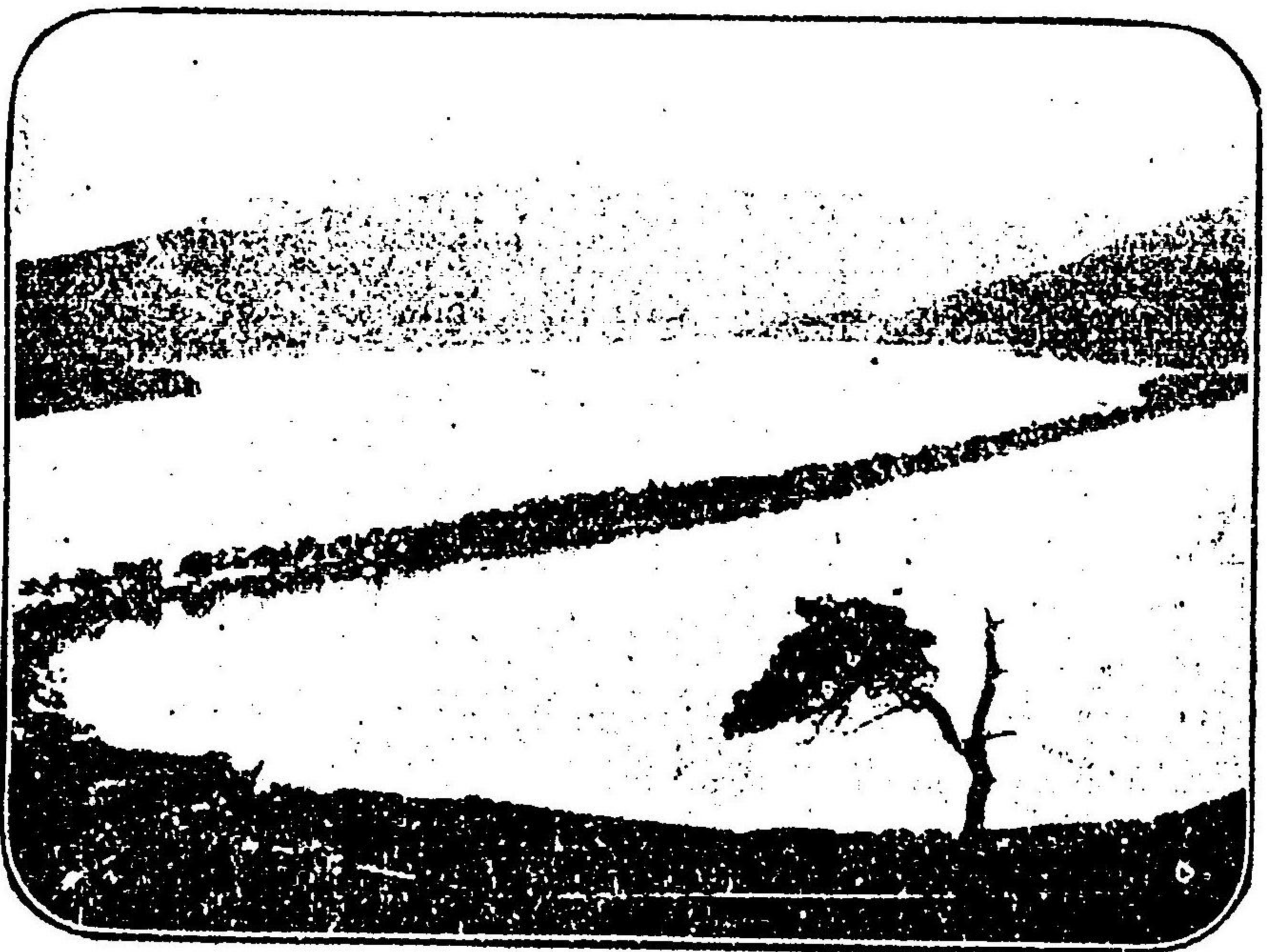
名所 京都の神社佛閣、圓山公園、平等院(宇治)、嵐山の櫻、笠置山、天橋立(日本三景の一、宮津灣内にあり、海につき出ること二十七町四十間)

諸水 府廳 桓武天皇 帝都の1 立橋の天

## 字解

所 設け 陶器 漆器 行在

地理 二學年 上





# 奈良 良 縣

管轄 大和。位置 京都府の東南に連る。

地勢 東の境 鈴鹿山脈。南 紀伊山脈。西の境 金剛山脈。北 笠置山脈。

山 南部はここに山深く。北部に少しく平地あり。大臺原山。金峰山。釋迦ヶ岳。金剛山。葛城山。

河 多武峰。山上岳。大日岳。西に流るるもの 大和川。吉野川。南に流るるもの 北山川。熊野川となる。

都會 奈良市(三萬三千) 縣廳のある所。七十五年間の帝都。春日神社。東大寺。興福寺。正倉院。博物館。郡山。五條。櫻井。

鐵道 奈良を中心として 京都に通ずるもの。名古屋に通ずるもの。和歌山に通ずるもの。櫻井に通ずるもの。

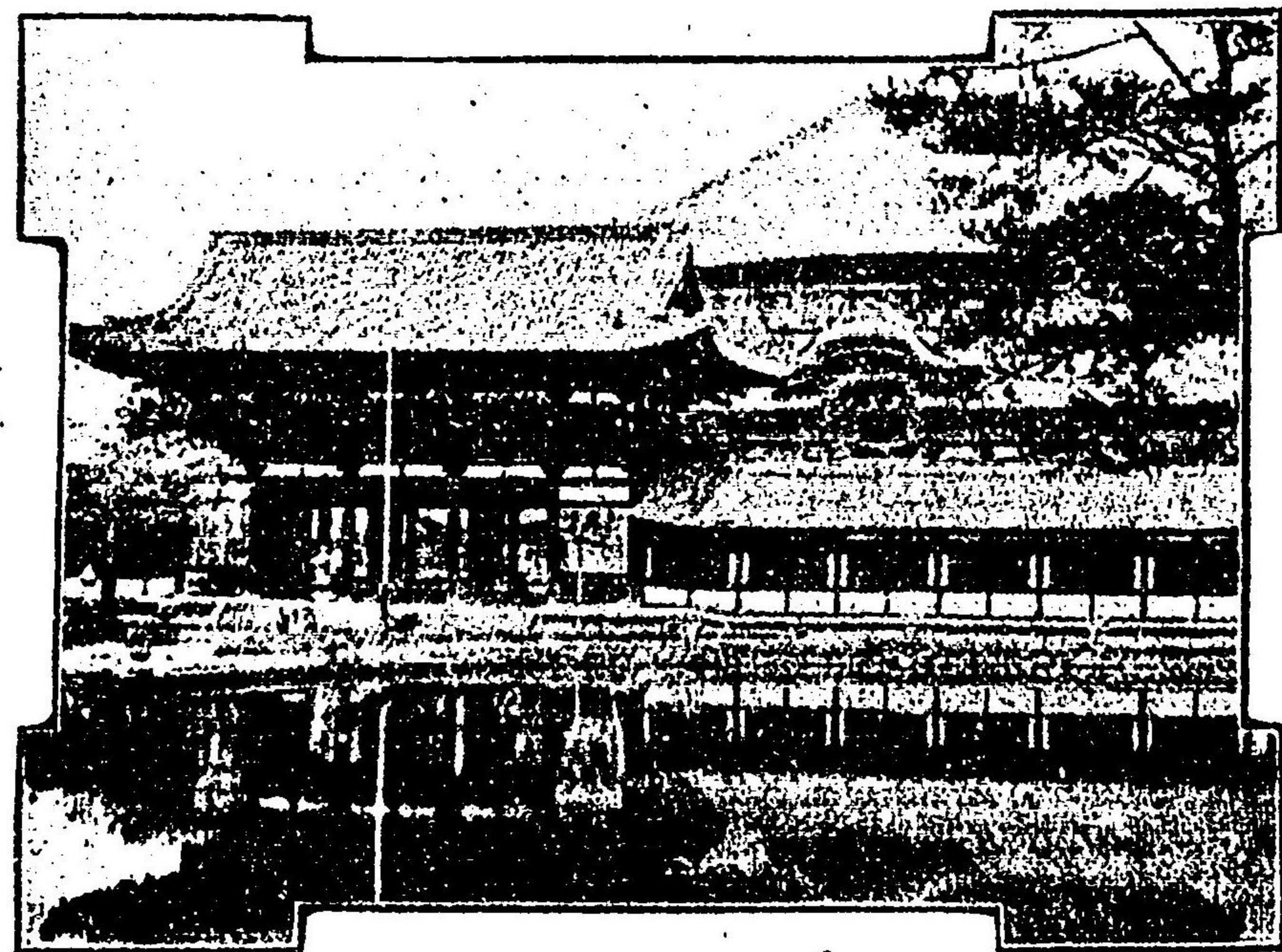
産物 吉野杉。吉野紙。奈良晒(サラ)。筆。墨。奈良漬。人形。漆器。茶。鹿の角細工。

名所 奈良の神社佛閣。吉野山 行在所のあと 櫻。談山神社 (多武峯) 藤原鎌足をまつる。畝傍山 神武天皇御陵。法隆寺。月ヶ瀬の梅。

森林 おほきなさのしげ 良材 いもぐ 北境 さかた 奈良朝 七十ねんばか 遺品 をるしな 藏す おさめ

繁華 ショートクスイシ 同名 ヒナ 陵 ミサギ 藤 原鎌足 コーキヨ 皇居 おらのの

東大寺大佛殿



## 字 解

○地理 二學年 上

三 重 縣

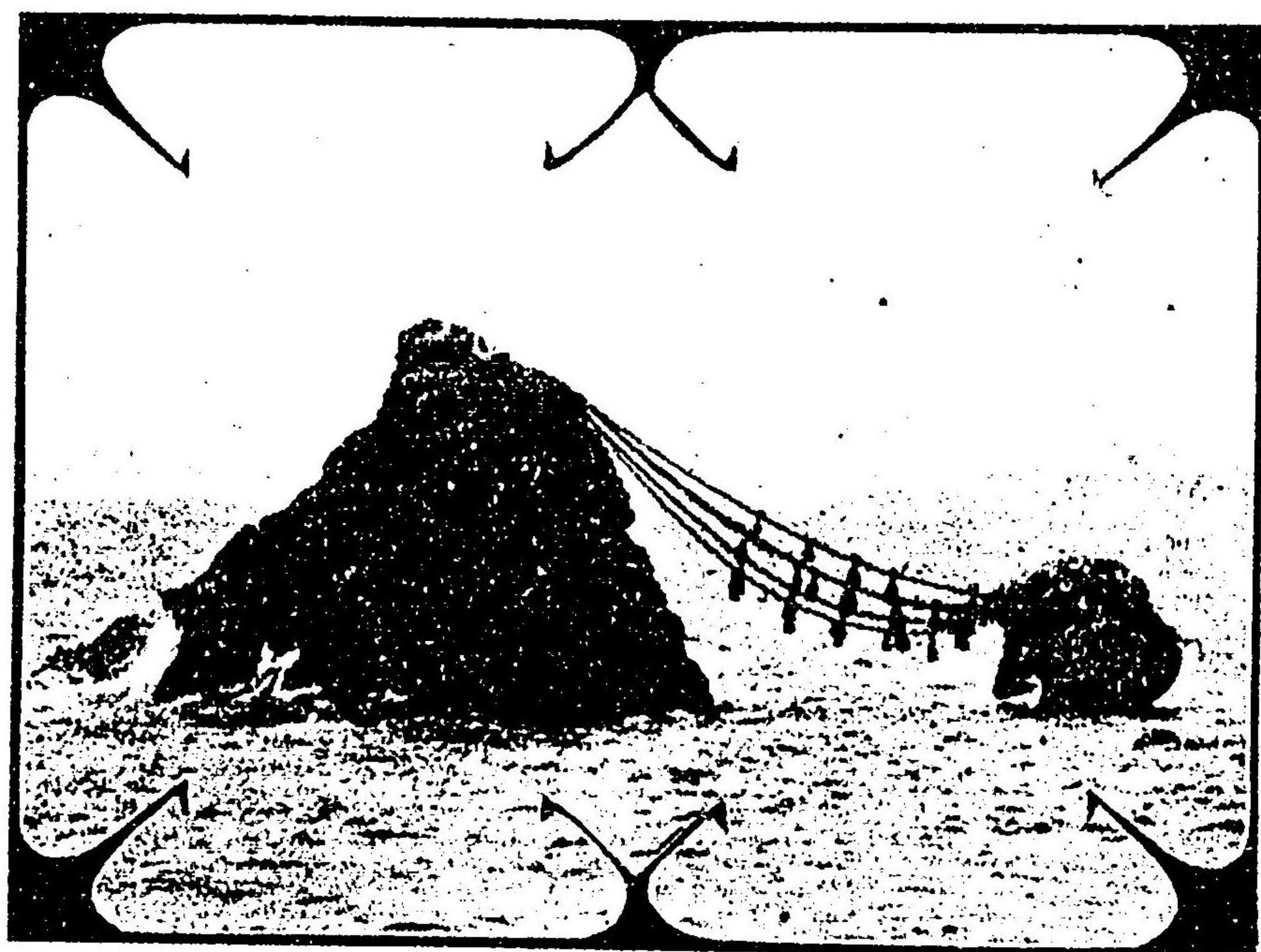
管轄 伊勢。伊賀。志摩。紀伊の一部。  
 位置 奈良縣の東にあり。東 伊勢の海。南 熊野浦。  
 地勢 西に鈴鹿山脈あり、南に紀伊山脈あり。西南に高く、東北にかたむきて低くなる。地形メの字の如し。  
 平野 伊勢の海の沿岸—伊勢米の産地。  
 海岸 伊勢の海に沿へる海岸は灣形をなしてよき港あり。志摩半島より南は小出入多けれどよき港なし。志摩の大王崎より南を熊野灘といふ。  
 山 鈴鹿山。大臺原山。東宮山。朝熊山。  
 河 揖斐川。雲出川。宮川。熊野川。名張川(木津川)。  
 都會 津市(三萬六千) 縣廳のある所—伊勢の中央。四日市市(三萬) 開港場—萬古燒—綿糸の産地。宇治山田市(三萬二千) 伊勢神宮のある地。桑名(米の取引盛なり)。上野。鳥羽。

字 解

臨 海産物 良米 取引  
 綿糸 近傍 良港 景色  
カイサンブツ、ニミにきん、リヨマイ、トリヒキ、メンシ、キンボ、リョコー、ケシキ

○地理 二學年 上

鐵道 關西線 大坂より奈良を経て、名古屋に至るもの。支線 龜山より津迄。  
 産物 參宮鐵道 津より宇治山田迄。米、綿糸、茶、萬古燒、伊勢燒、阿漕燒(ヤコギ)、眞珠(ジュ)、鰯(ヒエ) 見  
 名所 伊勢神宮 (内宮 天照大神。外宮 豊受大神) 浦の



# 和歌山縣

管轄 紀伊の大部。 位置 奈良縣の西南。

地勢 紀伊山脈わだかまり、山深くして、平地少し。内地より、急に海岸に向てかたむく。

平野 紀川の下流に小平地あるのみ。

海岸 屈曲多けれども、斷崖絶壁にて、良港なし。南の端潮岬、波ごとに荒し船行危険。

山 高野山、金剛峰寺。大塔峰。大雲取山。

河、瀑 紀川 吉野川の下流。熊野川。有田川 沿岸は蜜柑の産地。那智瀑 日本第一 高さ八十四丈 横十丈八尺。

都會 和歌山市(六萬八千) 縣廳のある所。綿ネルの産地。新宮。湯淺。田邊。黑江 黑江塗の産地。

鐵道 關西鐵道線 奈良より和歌山に通ず。南海鐵道線 大阪より和歌山に通ず。

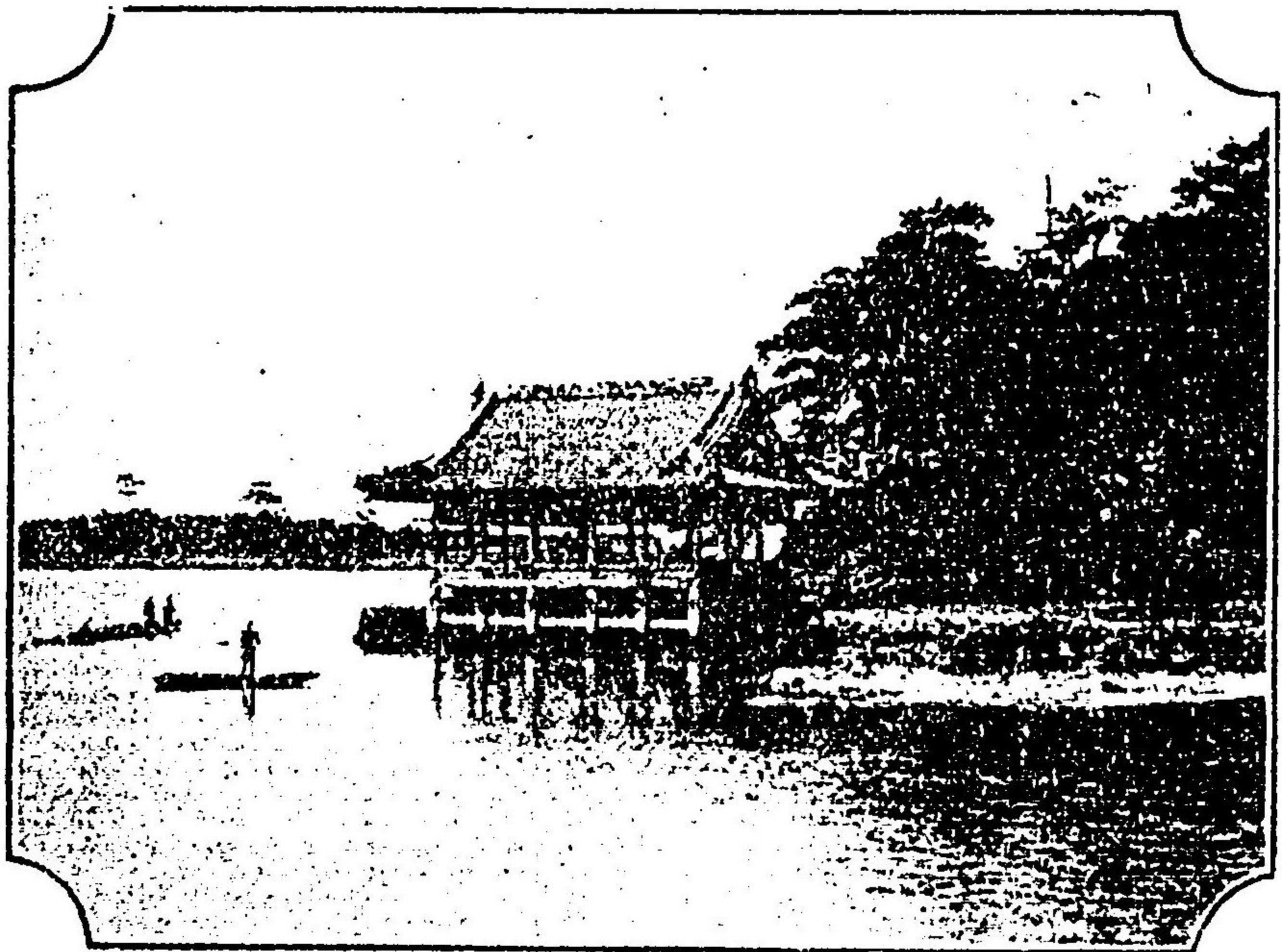
産物 綿ネル。木綿織。紋羽織。蜜柑。黑江塗。木材。

名所 和歌の浦 明光浦 (日本三景につげる勝地) 高野山 (金剛峯寺、眞言宗、本山) 紀三井寺 和歌の浦

## 字解

山地 山 木材 紀川 附近地方 蜜柑 和歌山 金剛峰 寺

○地理 二學年 上



# 大坂府

管轄 河内、和泉、攝津の東部。位置 和歌山縣の北、西は大阪灣。地勢 東、北、南の三方に山をめぐらし、中央は大平野 大阪平野。山 金剛山、生駒山。川 淀川（琵琶湖より出づ）。大和川。

九十四

## 都會

大阪市（百十二萬）  
（東京より百五十里）

日本第二の都會——日本第一の商業工業地。東西三里、南北一里半 東區、西區、南區、北區。縱横に堀河を通ず。川口と築港 開港場。鐵道四方に通じ、水陸とも交通運輸の便よし。大阪府廳、第四師團司令部、造幣局、高津神社、生魂神社、天滿宮、天王寺。紡績糸、まっちの大産地。

堺市（五萬四千） 昔よりの貿易港。緞通（ツシ）、刃物（ハモ）の名産。

岸和田 池田 酒、池田炭の名産。南海鐵道線（大阪と和歌山間）。高野鐵道線（大阪と長野間）。

## 鐵道

關西線 奈良を経て名古屋に通ずるもの。河内の北部山城の南に通ずるもの。市の北、東南をめぐるもの。

## 產物

綿糸、まっち、綿、河内木綿、茶種、硝子、堺の緞通と刃物、池田の炭と酒。

## 名所

大阪城、四天王寺、高津神社、生魂神社、天滿宮、住吉、妙國寺、堺、四條躰 四條躰神社 楠木正行、千早の城など。

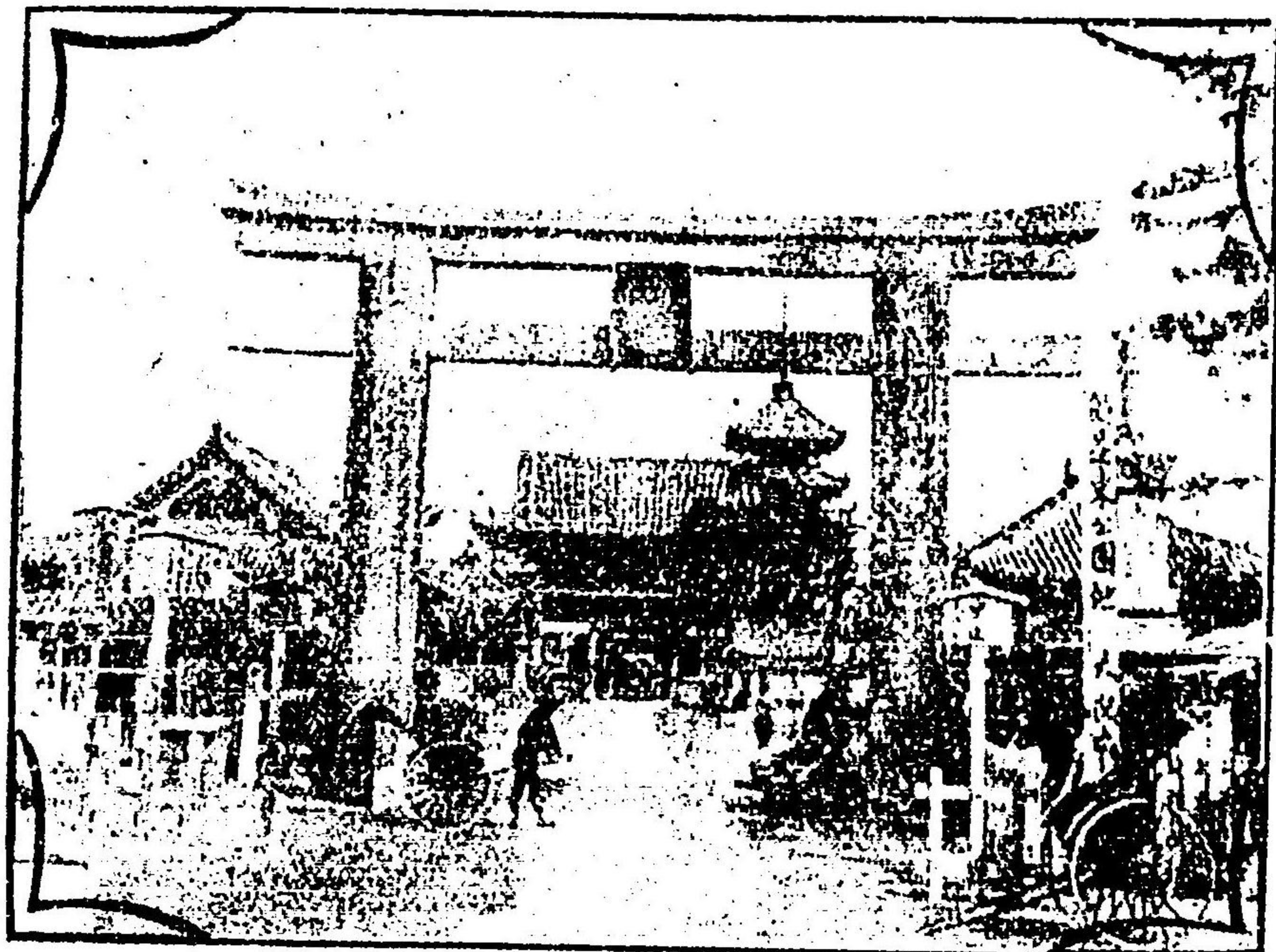
河内木綿 製造 淀川 開港場  
工事 中心 水陸の交通

寺 王 天 四

## 字解

近傍 造幣局 室町幕府  
東北境のさかえ 關係

○地理 二學年 上



# 兵 庫 縣

管轄 攝津の一部、丹波の一部、但馬、播磨、淡路。

位置 京都府、大阪府の西、南 内海、北 日本海。

地勢 中部に中國山脈ありて高く、それより南北にかたむく。平野 攝津の東南部と加古川の下流地方にあり。

山川 六甲山(武庫山)、書寫山(マサシ)、加古川、市川、朝來川。

淡路島 周圍三十九里。洲本町あり。由良海峡 紀伊と相對す 大阪灣の入口 砲臺あり。

瀬戸内海 淡路より西、中國と四國との間 雨少く製鹽盛なり。

都會 神戸市(三十萬) 縣廳所在地。紡績糸、まわちの大産地。

姫路市(三萬三千) 第十師團司令部あり。革細工の名産。明石(人丸神社)、尼ヶ崎、西の宮(日本一の酒産地)、生野(銀山)、豊岡 柳行李の産地、城崎(温泉場)、龍野(醬油の産地)、赤穂(四十七士、鹽の産地)。

鐵道 東海道線(東京より神戸まで)、山陽線(神戸より馬關に通ずるもの)、播但線(姫路より和田山に通ず)。

## 産物 名所

灘の酒、綿糸、燐寸、鹽(アガ)、銀と金(イク)、柳行李(チカ)、醬油(タツ)、姫路の革細工、攝津米、播州米、須磨、舞子、明石、人丸神社、港川神社、布引瀧、有馬の温泉、城崎の温泉、一の谷(源平の古戰場)。

内海 うちうみ、せとな 西端 福知山

産額 神戸、兵庫の二部、こしはかう

景色 近傍 古戰場

明石海峡 淡路島 有名

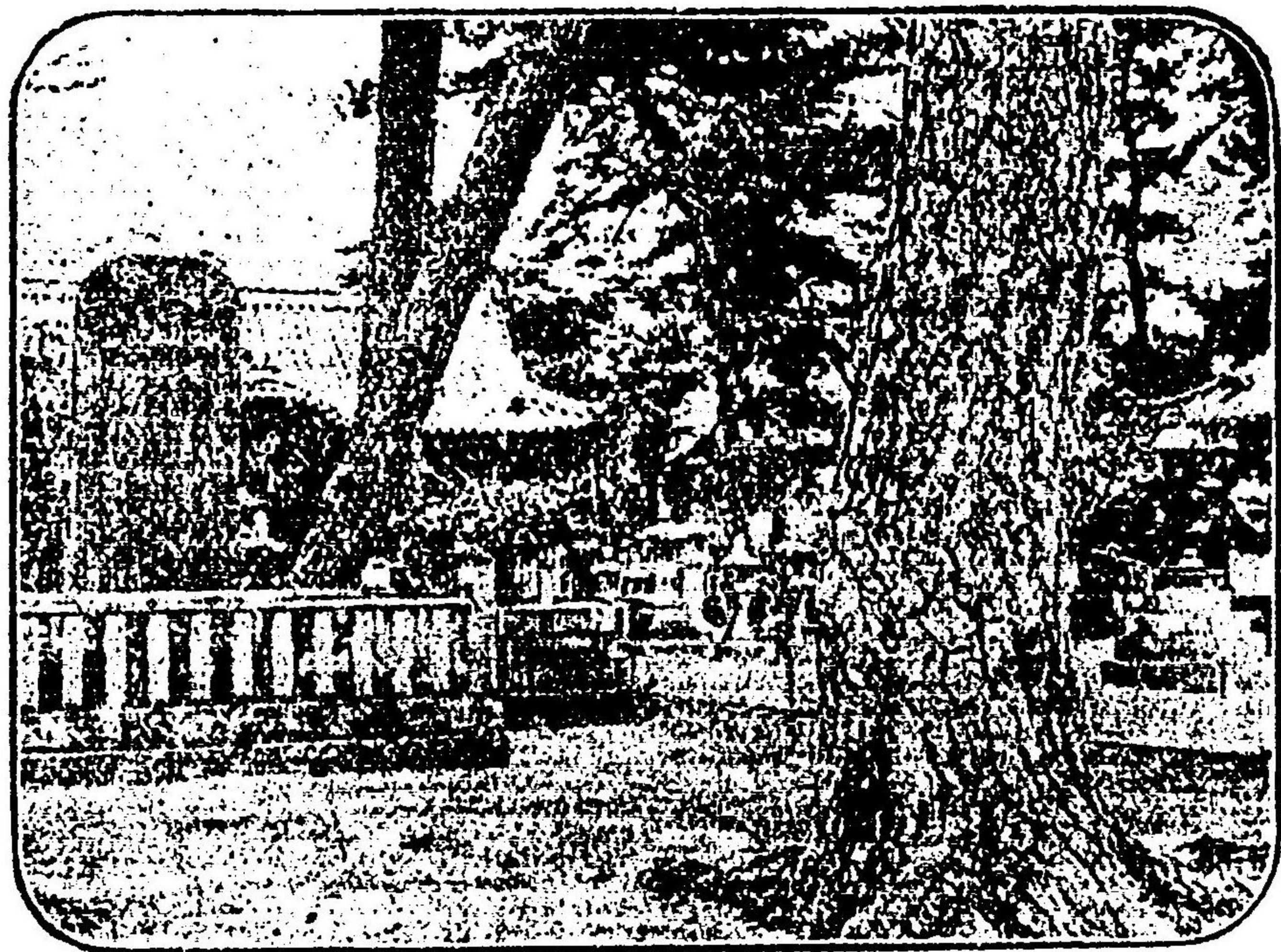
鑛山 北流 川筋 温泉 砲臺

製鹽 塩

## 字 解

〇地理 二學年 上

人丸神社



中國

位置

本州の西端—近畿地方の西。  
東—近畿地方。南—瀬戸内海をへだて、四國。  
西南—日本海、九州。北—日本海。

國

岡山縣

備前 備中 備後

鳥取縣

因幡 伯耆

廣島縣

島根縣

出雲 石見 隱岐

山口縣

備前 備中 備後 備前 備中 備後

中央に、東西にわたれる中國山脈—地勢を南北に分つ。

地勢

瀬戸内海斜面

山陽道の地—北高く南低し。  
川は南に急流—洪水の害多し。

日本海斜面

山陰道の地—南高く北に低し。  
川は北に流れ、大河少し。  
大なる平野なし。

地方

海岸

瀬戸内海々岸

出入極めて多く、良港多し。島嶼多し。  
東の口—明石海峡。西の口—馬關海峡。  
兒島半島—兒島灣。廣島灣。室津半島。

日本海々岸

島根半島 夜見ヶ濱 中海をいただく。良港に乏し。

氣候

瀬戸内海斜面

一般に温暖なれども、冬は風寒し。  
雨もとも少く、海岸は製鹽業盛なり。

日本海斜面

北風を受けて寒く、雪多し。  
雨量多き地方なり。

産物

瀬戸内海斜面

米。麥。烟草。棉。鹽。鹽表(オホミ)。花筵(ハナシロ)。  
木綿織物。麥桿真田(ムギワラ)。魚類。

日本海斜面

米。牛。砂鐵。人參。紙。  
魚類。生糸。

岡山縣

管轄 美作、備前、備中。

位置 兵庫縣の西、北 鳥取縣と背中合せ、南 瀬戸内海。

地勢 北部に中國山脈ありて土地一般に高し。東と西の境にも高山ありて、中央南部に低し。

平野 岡山近傍に小平野あるのみ。

海岸 出入多く、良港少からず。水島灘。中央に兒島半島突出して、兒島灣をいづく。

氣候 北部は寒く、雪多し。南部は温暖。

山 那岐山、三國山、大佐山。

河 東大川(吉井川)、西大川(旭川)。

縣廳のある所。中國第二の都會。

岡山市(八萬)

第十七師團司令部あり。後樂園(コエノラ) 日本三公園の一。

都會

玉島 四國への渡船地。津山、笠岡。

倉敷 麥稈真田の取引地。高粱(ハシカ) 麥稈真田の産地。

鐵道	産物	名所
山陽線 中国線 岡山より津山に通ず。	米。麥。鯛。花蕙(ハナム)。紡績。糸。疊表。麥稈真田(ムギワラ)。津山の雲齋織(ウヅオリ)。煙草。弓部。	院の庄 津山の西、兒島高德が詩を書いたといふ所。後樂園 日本三公園の一。吉備津神社 備前と備中にあり。

字解

背中 兒島半島 抱く 花蕙  
 海岸 汽船 往來  
 産額

地理 二學年 上



管轄 備後、安藝。 位置 岡山縣の西、島根縣の南。

地勢 中國山脈、縣内を東西に走り、地勢を南北に分つ。縣内山岳のみ多くして、平野少し。

海岸 屈曲多く、よき港に富む。島嶼多し。西に廣島灣、嚴島、江田島、倉梯島。

氣候 中國山脈の北は寒くして、雪ことに深し。中國山脈の南は、南によるに従ひ、温暖なり。

山 美古登山(ヤマト)。鬼城山。

河 太田川。蘆田川。江川の上流。

都會 廣島市(十三萬) 中國第一の大都會。廣島縣廳。第五師團司令部。東京より二百三十餘里。

吳市(六萬三千) 第二軍港。大造船所あり。

尾道市(三萬) 良港。糸崎開港場。福山、宇品 大築港をなせり。

### 廣 島 縣

#### 鐵道

山陽線 岡山線より來り、廣島を經、馬關に通ず。  
支線 海田市より吳までの間。廣島より宇品までの間。

#### 產物

備後の疊表。保命酒。安藝の山繭。牡蠣。鹽。蚊帳。麻。宮殿。島細工。

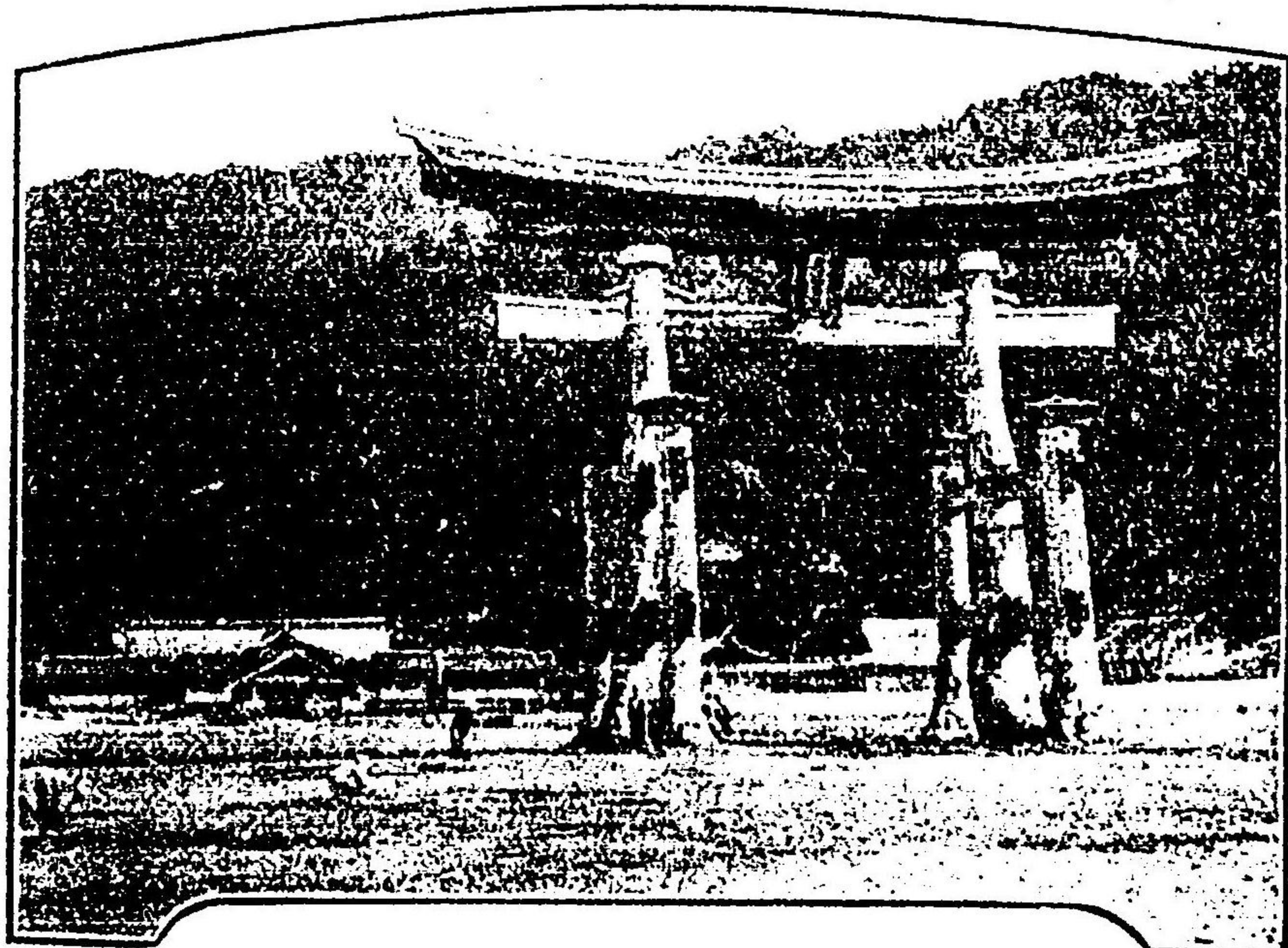
#### 名所 嚴島(宮島)

嚴島神社。平清盛の建立。日本三景の一。島

### 字 解

前面 海への 沿海の地方をさす。豊  
表 備後表 軍隊 近海をさす。嚴  
島神社

○地理 二學年 上





# 山口縣

管轄 周防、長門。 位置 本州のもっとも西端。

地勢 中國山脈、西北を東西に走り、地勢を南面と北面とに分つ。  
〔南面は廣くして平地をなす―防長米（ポーチヨイ）の産地。〕

海岸 出入極めて多し  
〔南の海 周防灘 〔東―室津半島、西―下關海峡。〕〕  
〔西の海 響灘 〔東―下關海峡、西―下關海峡。〕〕

河 岩國川。佐渡川（以上南流）。阿武川（北流）。

山口町（二萬八千） 縣廳のある所。高等學校あり。

東京より二百九十里。

神戸より西にて、第一の要港。

瀬戸内海の西口 早瀬瀬戸。

都會 下關市（四萬五千）

對岸、門司との間五町。

堅固なる砲臺あり。

東に、壇の浦の古戰場あり。

萩 夏蜜柑の産地。岩國 岩國縮、錦帶橋。

鐵道 廣島より來り、下關に達す。

産物 長防米。鹽。魚類。夏蜜柑。  
岩國縮。硯。煙草。萩燒。

名所 岩國の錦帶橋。  
壇浦 平氏の亡びし所。

西端 海産の利 沿へ 帶 錦

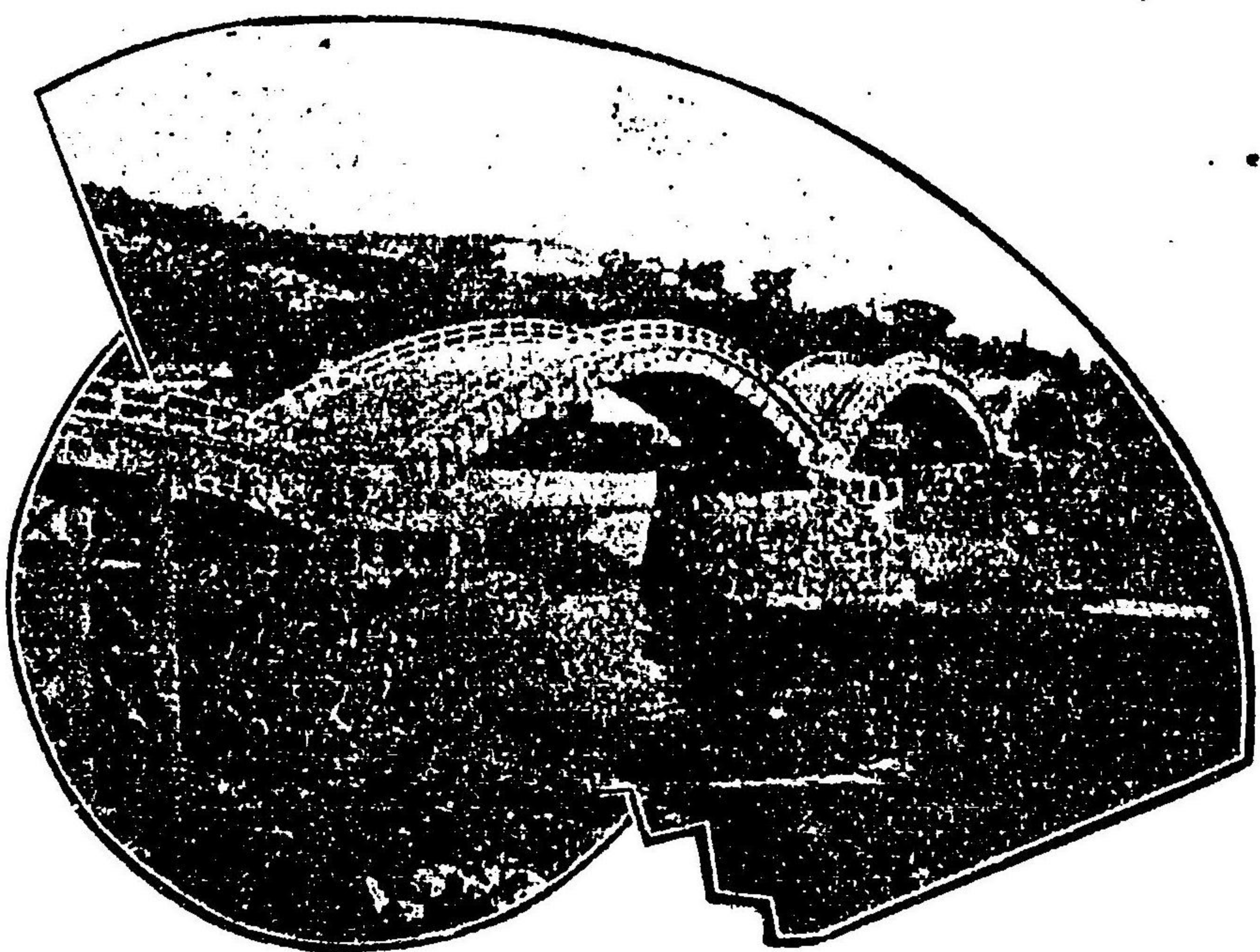
製糖 夏蜜柑 下關海 橋

## 字解

名産 古戰場 砲臺

設 硯 煙草

○地理 二學年 上



百五

管轄 因幡、伯耆。

位置 兵庫縣の西、南 岡山縣と背中あはせ、北 日本海。

地勢 南の境に中國山脈ありて土地高く、北にかたむき、直に海岸にせま  
る故、大なる平野なし。

海岸 西北に夜見濱(長さ五里)の突出あるのみ。  
出入少く、良港なし。

山 大山(五千六百尺) 中國第一の高山。  
船上山 名和長年が、後醍醐天皇を奉せし山。

河、湖 日野川。天神川。千代川。

東郷池 池中に温泉あり 鰻の名産。

都會 鳥取市(三萬一千) 縣廳のある所。  
米子。倉吉。

境 開港場 山陰第一の良港。

### 鳥 取 縣

東 鳥取へ。

西 松江へ 工事

鐵道 山陰線 (境より 米子)

産物 生糸、鐵、牛、因伯米(クインバ)、  
紙、海松細工(ウイマツ)、白珊瑚(ソ  
コサン)、倉吉濟(カスリ)。綿、

名所 大山寺、名和神社(名和長年を祭る)

安德天皇の御陵(鳥取の東南にあり)

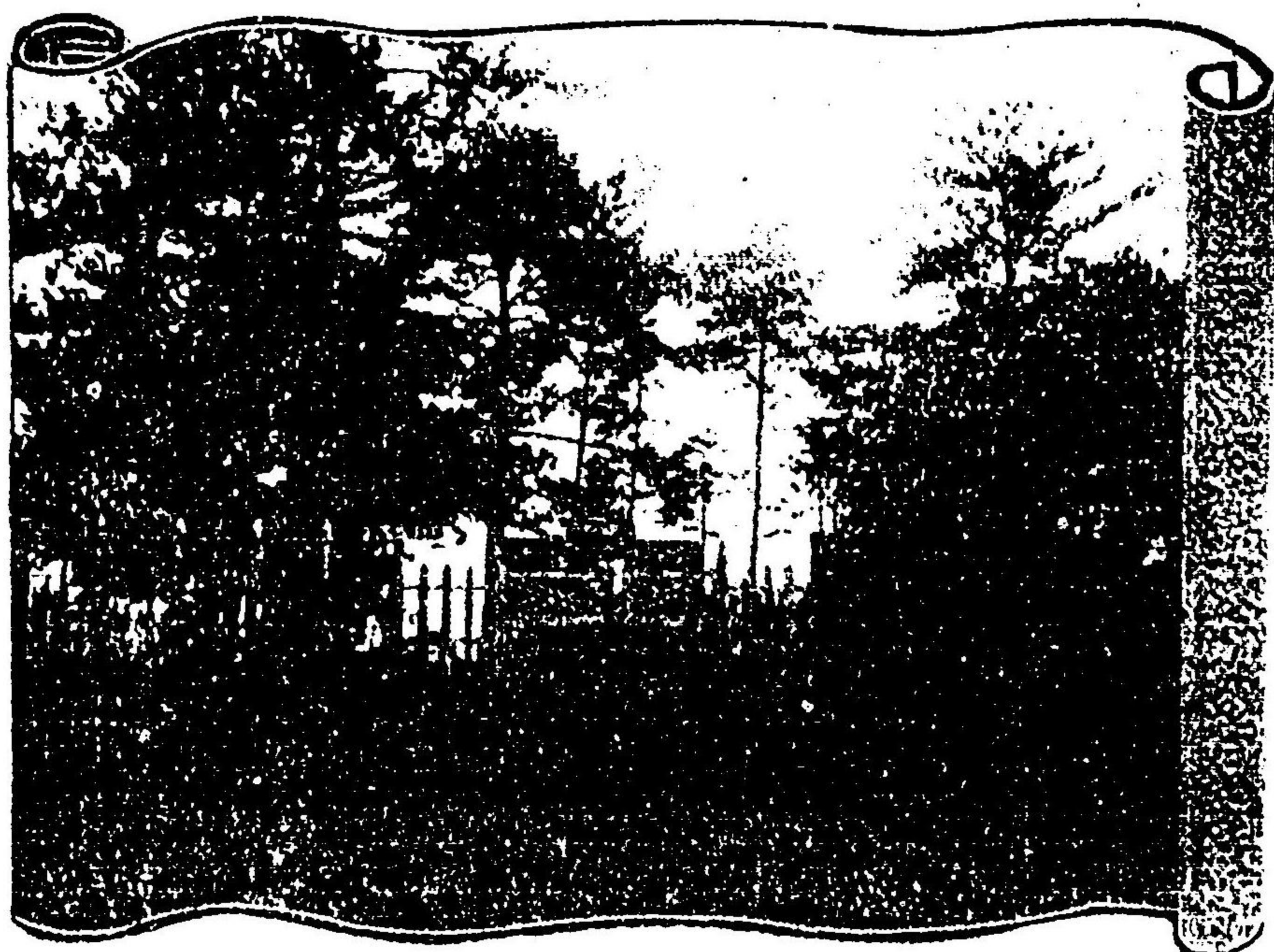
安徳天皇の御陵

西北隅のすみ 突き 限る 下流(川)

### 字 解

名和長年 後醍醐天皇 義  
兵衛ののちのあんな 北端(はし)

○地理 二學年 上



管轄 出雲、石見、隱岐。

位置 鳥取縣の西。南 廣島縣と背中合せ。北 日本海。

地勢

南部に中國山脈ありて、一帶の高地をなす。石見には、ことに山岳多く、土地西北にかたむく。

平野

出雲 斐伊川 の下流地方に小平野あり。石見 江の川

海岸

出雲の北部に島根半島 宍道湖 中の海 をいただく。石見の海岸は出入少し。島前、島後(西郷港)境より二十里。

隱岐

中の島 後鳥羽上皇の宮趾。知夫里 後醍醐天皇の宮趾。

### 島根縣

山、川、湖 三瓶山、江の川(山陰第一の大河)、斐伊川、宍道湖。

都會

松江市(三萬五千)

縣廳の所在地。山陰第一都會 景色きはめてよろし。

濱田 開港場。杵築(大社)。今市。津和野。

產物

人參(藥)、鐵、出雲燒、瑪瑙、鰯(隱岐)、半紙。

名所

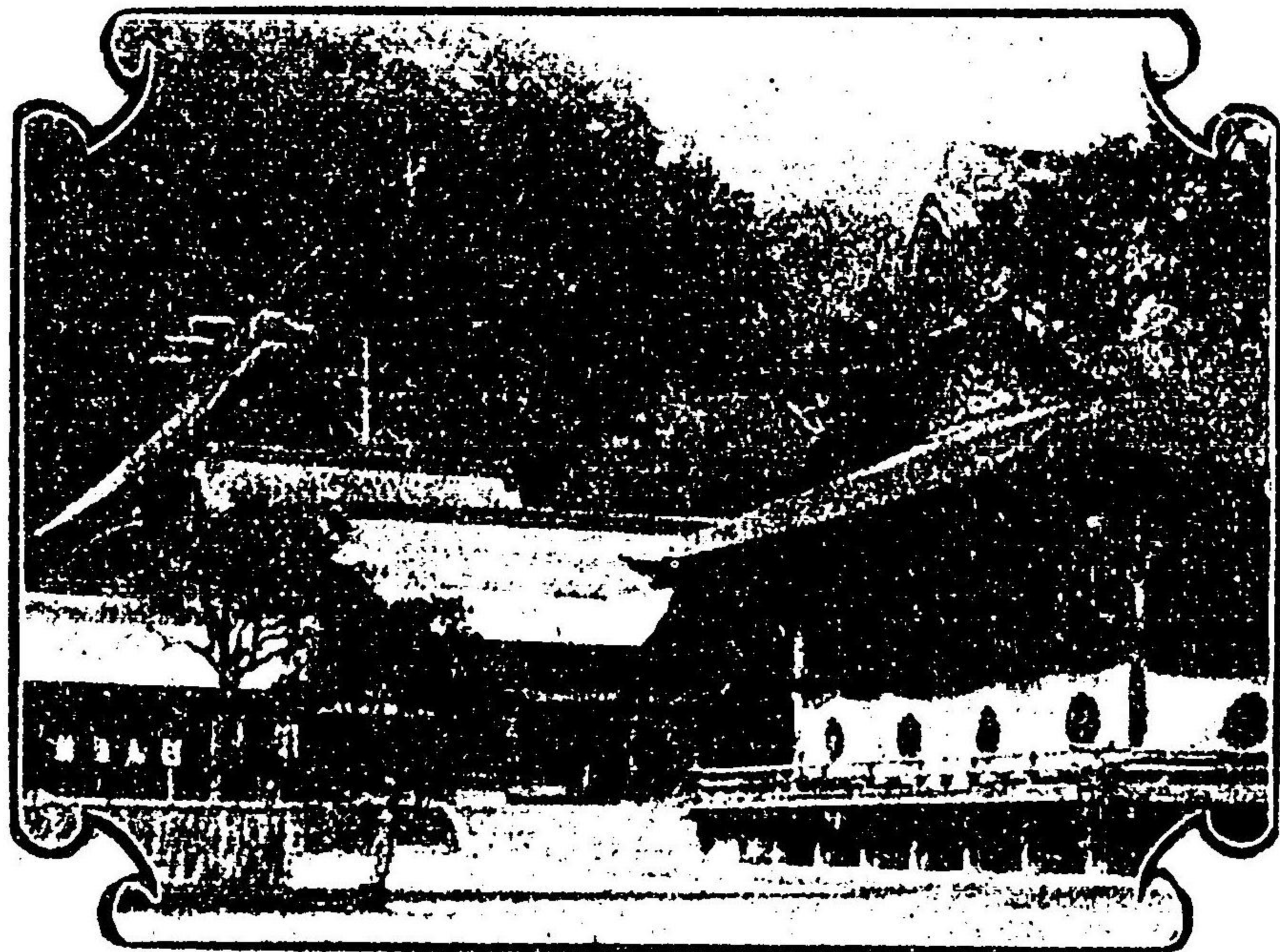
出雲大社(大國主命をまつる)。松江の風景。

### 字解

島根半島 抱く 西岸 近傍 出雲燒 長流 良港

○地理 二學年 上

出雲大社



四國

位置

中國地方の南方。近畿地方と九州との間。

百十

東ホトケイ紀伊水道。南ホトケイ太平洋—土佐灣。

西ホトケイ豊豫海峽。北ホトケイ瀬戸内海。伊豫灘。

國

德島縣—阿波。愛媛縣—伊豫。

香川縣—讚岐。高知縣—土佐。

阿波の中央。讚岐の南境。

地勢

四國山脈—西南より—中央—東北

東方の斜面—阿波。

土地のかたむき

北方の斜面—伊豫、讚岐。

南方の斜面—土佐。

東部海岸—鳴門海峽。

北部海岸—良港多し—伊豫灘。

地方

海岸—すべて出入多し

西部海岸—佐田岬—豊豫海峽。

南部海岸

東—室戸岬。西—足摺岬。土佐灣。

氣候

四國山脈より南の地方

温暖—雪の降ることまれなり。雨—我國にて雨多き地方。

四國山脈より北の地方

寒暑の差や、強し。雨—我國にて少き地方—製鹽。

産物

農産—阿波の藍。阿波、讚岐の砂糖。

水産—東北海岸の鹽。南海岸の鯉節。鯨。珊瑚。

鑛産—別子の銅。市川のアンチモニー。

工業品—阿波縮。伊豫織。伊豫。土佐の紙。

字解

行政上 中央 兩面 汽船 往來

○地理 二學年 上

百十一

管轄 阿波。 位置 四國島の東部。

地勢 四國山脈は、西境にて二脈に分る。南—國の中部。北—讃岐山脈。土地西北に高く東南にかたむく。

海岸 東北—鳴門海峡。幅一里—大鳴門、小鳴門。一時間に七八湮の速力にて流る。船行すこぶるあぶなし。

平野 吉野川流域地方—徳島近傍。

山 劔山(七千四百尺)。

河 吉野川(四國三郎) 那賀川。長さ四十一里—河口多くに分る。流域の平野—藍—日本一。

### 徳島縣

都會 徳島市(六萬二千) 縣廳のある所。四國第一の大都會。撫養(ヤム)—齋田(サイ)鹽の賣買場。

#### 鐵道

徳島市より、西の方。船戸まで。

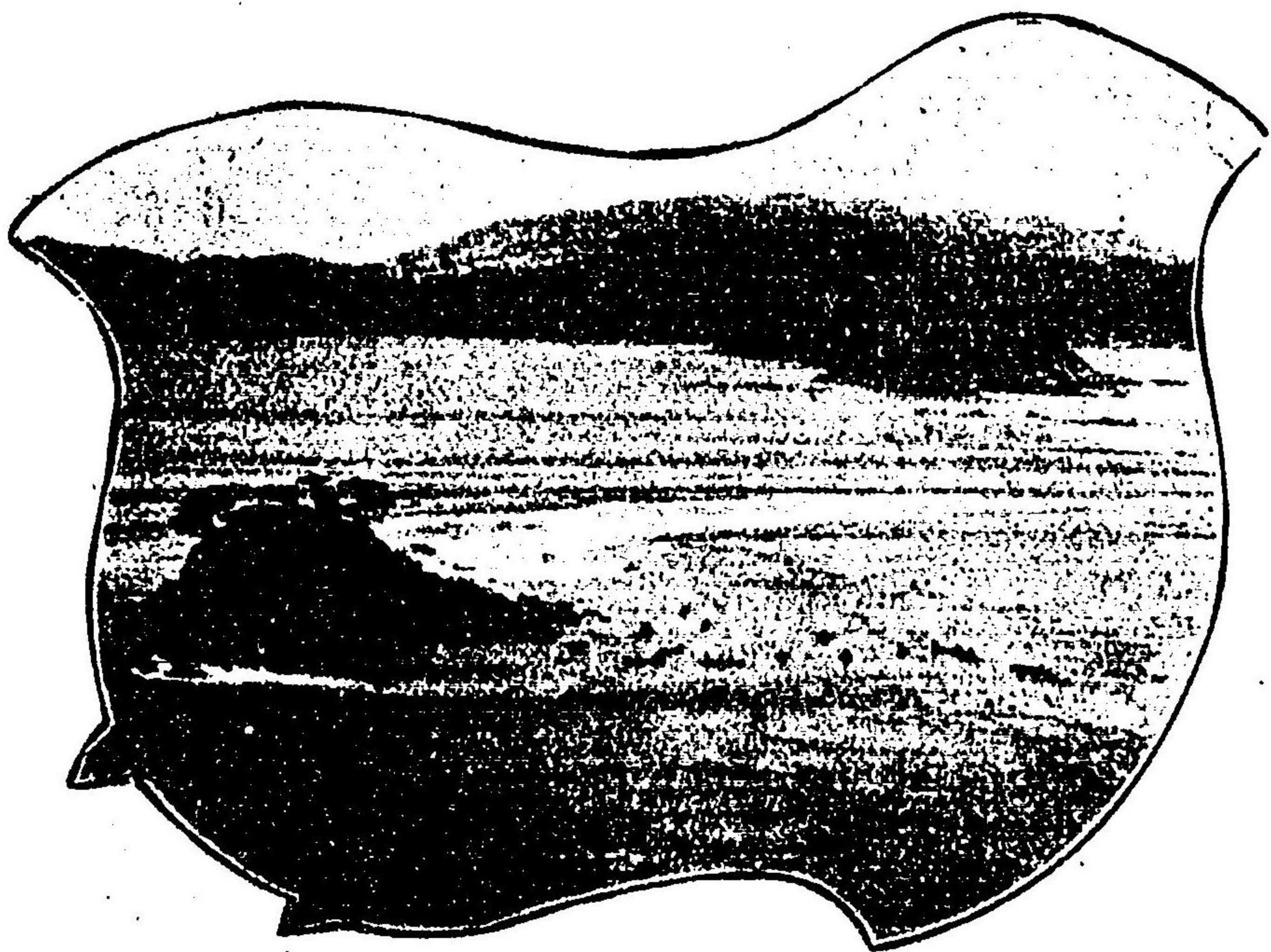
#### 産物

齋田鹽、藍(日本第一の産地)、煙草、阿波縮、絨織(オリラ)、魚類多し。

#### 名所

祖谷の蔓橋 長さ三十三間 幅四尺 高さ三十間  
鳴門海峡のうすまき。

鳴門海峡



### 字解

長流(チヨリユ) 川筋(カハスヂ) 水源(スイゲン) 地(チ) 潮流(チヨリユ) 奇観(キカン) 交通(コウツウ) 潮流(チヨリユ) 地理(チ) 二學年 上

# 香川縣

管轄 讃岐。 位置 德島縣の北—四國の東北。

地勢 南境—四國山脈の支派—讃岐山脈。

北に向つてかたむき、海岸にせまき平地あり。

小出入多く、よき港に富む。

海岸 東北—播磨灘。

西—三崎—燧灘をいづく。

山 雲邊寺山。 矢筈山。 象頭山—金刀比羅宮。

高松市 (三萬七千) — 縣廳のある所—栗林公園。

丸龜市 (二萬七千)

都會 善通寺 第十一師團司令部。

多度津—金刀比羅宮參拜者の上陸地。

琴平—金刀比羅神社 大己貴命

を祀る。

崇徳天皇。

鐵道 高松—丸龜—多度津—琴平間。

産物

甘蔗—砂糖の製造。

鹽。 藍。 石材。

名所

栗林公園

日本三公園におとらぬ公園。

金刀比羅宮。

屋島—源平の古戰場。

金刀比羅宮

# 字解

狹

住民

製鹽

砂糖

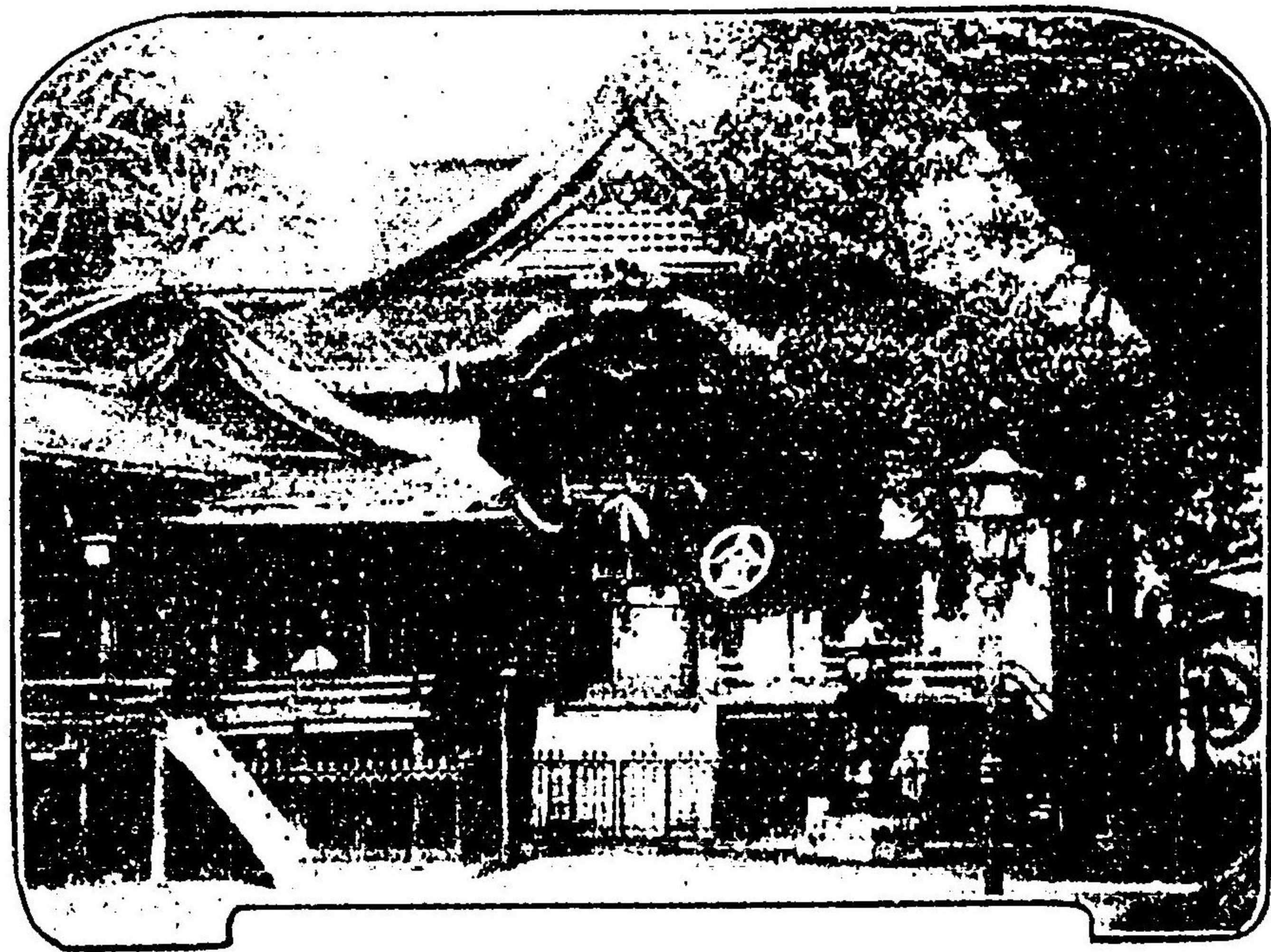
源平

古戰場

要津

近傍

地理 二學年 上



# 愛媛縣

管轄 伊豫。 位置 香川縣の西南 四國の西北。

百十六

地勢 西南より東北に、四國山脈わたりて一帯の高地。中央に支脈を出して、高繩半島をつくる。

東部地方 北にかたむく。西部地方 西北にかたむく。

## 海岸

高繩半島 梶取岬 東 燧灘 西 伊豫海峽

西南 佐田岬 十里 豊豫海峽

## 山

石槌山 四國第一の高山 七千八百尺。高繩山。鬼ヶ城山。吉森山。

松山市 (三萬六千)

縣廳のある所。伊豫鐵道の中心。

## 都會

今治 良港。宇和島。

三津濱 東西船舶の寄港する所。新居濱 別子銅山の工場あり。

## 鐵道

伊豫鐵道 松山を中心として、高濱、三津濱、古町、道後、横河原、郡中、などの間に通ず。

## 物産

砂糖、紙、別子の銅 (日本第二の銅山)、アンチモニー、伊豫紵、蠟、

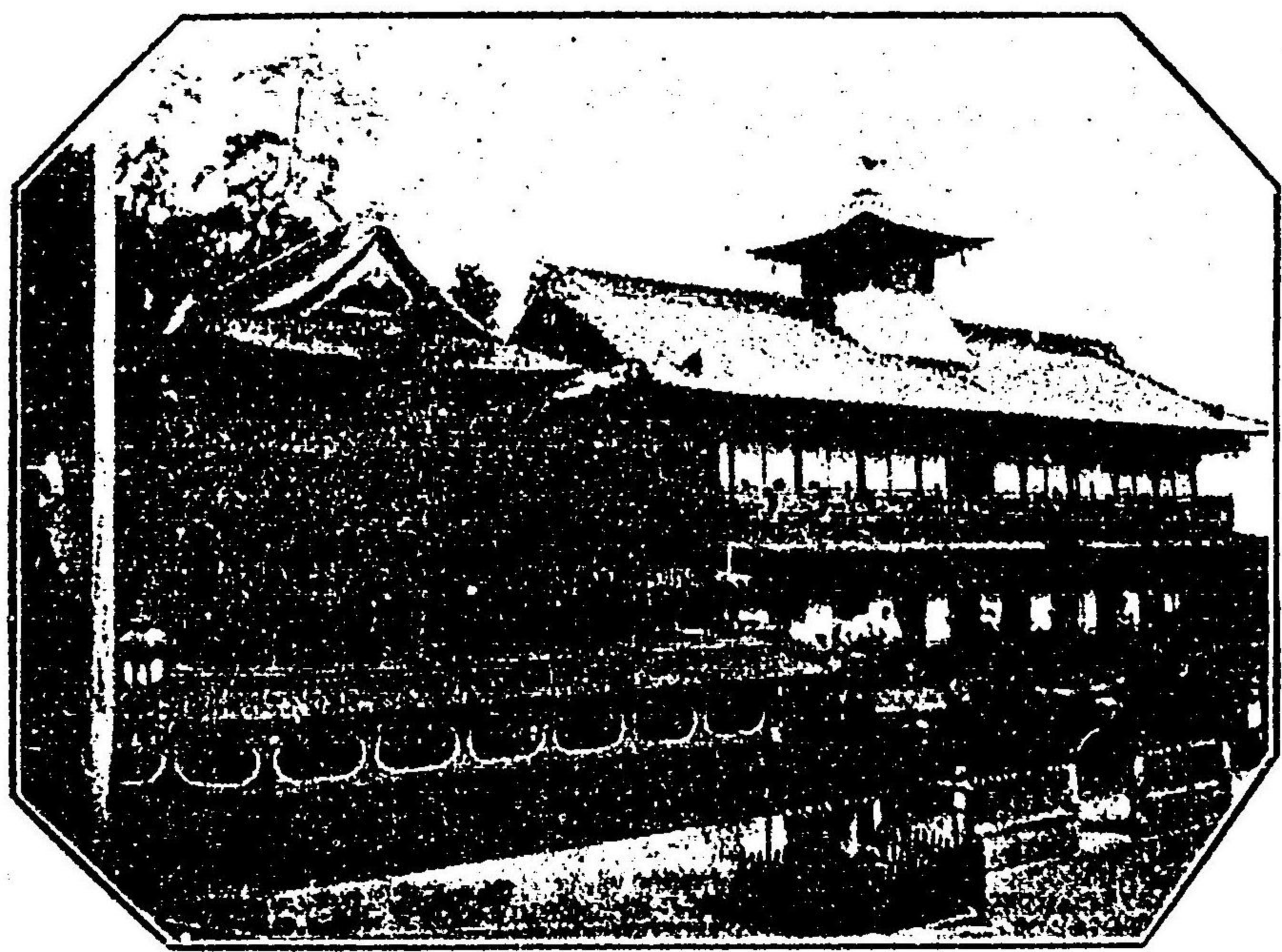
名所 道後の温泉 松山の北半里。

道後の温泉

## 字解

脈 ミヤクチユー 中 ナカ 豊豫海峽 トヨヨヘカイ 近傍 キンボウ 有名 ユウメイ 温泉 オンセン 銅山 ドウザン

○地理 二學年 上



百十七

管轄 土佐。

位置 愛媛縣の東南—四國の南部。

地勢

四國山脈は、西南より、北、東の境一帯につらなる。南方に向つて急に傾斜し、平野なし。

海岸

東 室戸岬  
西 足摺岬  
一大灣 土佐灣

小出入あり、良港なし。地震のため陥没した處。

山 御在所山。矢筈山。白髮山。瓶ヶ森山。

三大河

仁淀川。物部川。  
渡川(四萬十川ともいふ)。

### 高知縣

都會

高知市 (三萬五千) 縣廳のある所  
土地大に低し  
浦戸—高知灣の入口にある港。  
高岡。中村。

産物

土佐半紙。材木。鯨。鰹節。  
珊瑚。その他の海産物。

名所 高知城の公園。龍串の奇景。

龍串の奇景

### 字解

抱く 海陸の交通の便  
海産物 鰹節 土佐紙

○地理 二學年 上





# 九州

## 位置

本州の西南方、四國島の西方。  
 東に豊後海峡をへたて、四國、及び太平洋。  
 北に北東に周防灘をへたて、本州、西北に日本海、玄海灘。  
 西に東支那海、南に太平洋。

## 國

福岡縣 筑前 熊本縣 肥後  
 大分縣 豊前 宮崎縣 日向  
 佐賀縣 肥前 鹿兒島縣 大隅  
 長崎縣 壹岐 薩摩  
 對馬 沖繩縣 琉球

## 地勢

三大山脈 北部山脈 五島、平戸島より入り、東北に走り中國に入る。  
 南部山脈 天草島より肥後の南東、日向の北、四國に入る。  
 火山脈 南北に走る。開聞岳、櫻島、霧島山、阿蘇山。  
 土地の最高部 中央部 肥後、日向の國境。  
 高低 中央部より四方に低くなり、西北部は少しく高し。  
 平野 筑紫平野 筑紫川の下流地方。  
 肥後平野 白川の下流地方 肥後米の産地。

# 地方

## 海岸

東北部 國東半島 南に別府灣  
 西北部 博多灣 唐津灣 伊萬里灣。  
 西部 彼杵半島 東に大村灣。南に野母半島。  
 島原半島 東に有明海 海底淺し。  
 宇土半島 北に有明海 南は八代海。  
 天草島 東に八代海。  
 南部 東 大隅半島 鹿兒島灣 櫻島。  
 西 薩摩半島  
 東南に志布志灣 日向、大隅の間。  
 東部 大なる出入なく、良港乏し。

## 氣候

一般に大に溫暖なり 北の海岸地方 二三寸の雪降ることあり  
 沖繩縣 寒暑の二季あるのみ 南部の地方 雪降らず、夏は暑し。  
 雨量 南部は多雨 北部はやゝ少し

## 産物

農産 筑紫平野の米、肥後平野の米、粟、大豆、甘藷(南部に多し)。砂糖。國分煙草。  
 (薩摩)長崎煙草。薩摩馬。日向の材木、椎茸。  
 水産 五島附近の鯨、その他の漁獵。(肥前、薩摩の海は漁業に多し)。  
 礦産 石炭 日本第一の産地(豊前、筑前、筑後、肥後)。金 薩摩、豊後の磯黃。  
 工藥品 博多織。小倉織。久留米絨。薩摩上布。薩摩絨。  
 芭蕉布。疊表。花鞋。石田燐燐燐。

○地理 二學年 上

管轄 筑前、筑後、豊前の西北部。  
位置 九州の北部。西北 玄海灘。東北 内海。西南 有明海。

地 勢 中部高く、四地方に分る

- 一 玄海灘斜面
- 二 遠賀川流域
- 三 周防灘斜面
- 四 筑紫平野

平野 筑紫大平野 有名の豊産物 筑後米。  
遠賀川 北に流る 上流地方は石炭の産地。  
筑後川 (筑紫一郎) 南に流る 三十五里 幅五町。

福岡市 (七萬) 縣廳。醫科大學。開港場。

門司市 (三萬八千) 九州の最北端 下關海峡の口 砲臺。

小倉市 (三萬三千) 九州鐵道起點 開港場 石炭の輸出地。

久留米市 (三萬三千) 筑紫平野の要地 第十八師團

大牟田 若松 石炭の輸出港。近傍に大製鐵所あり

九州線 門司より小倉、福岡 久留米を経て、熊本に通ず

豊州線 小倉より宇佐に通ず。  
筑豊線 若松より南方石炭産地の各地に通ず。

### 福 岡 縣

都 會  
鐵 道

#### 產 物

石炭 日本全産額の五分の三。  
筑後米、博多織、小倉織、  
久留米緋、蠟、博多人形、  
茶、酒、國東半島の疊表、

#### 名 所

太宰府天滿宮、香推宮 (神功皇后)  
箱崎八幡宮、芥屋の大門 (オヤト)  
米島半島 (福岡の西、元の兵と戦ひし地)

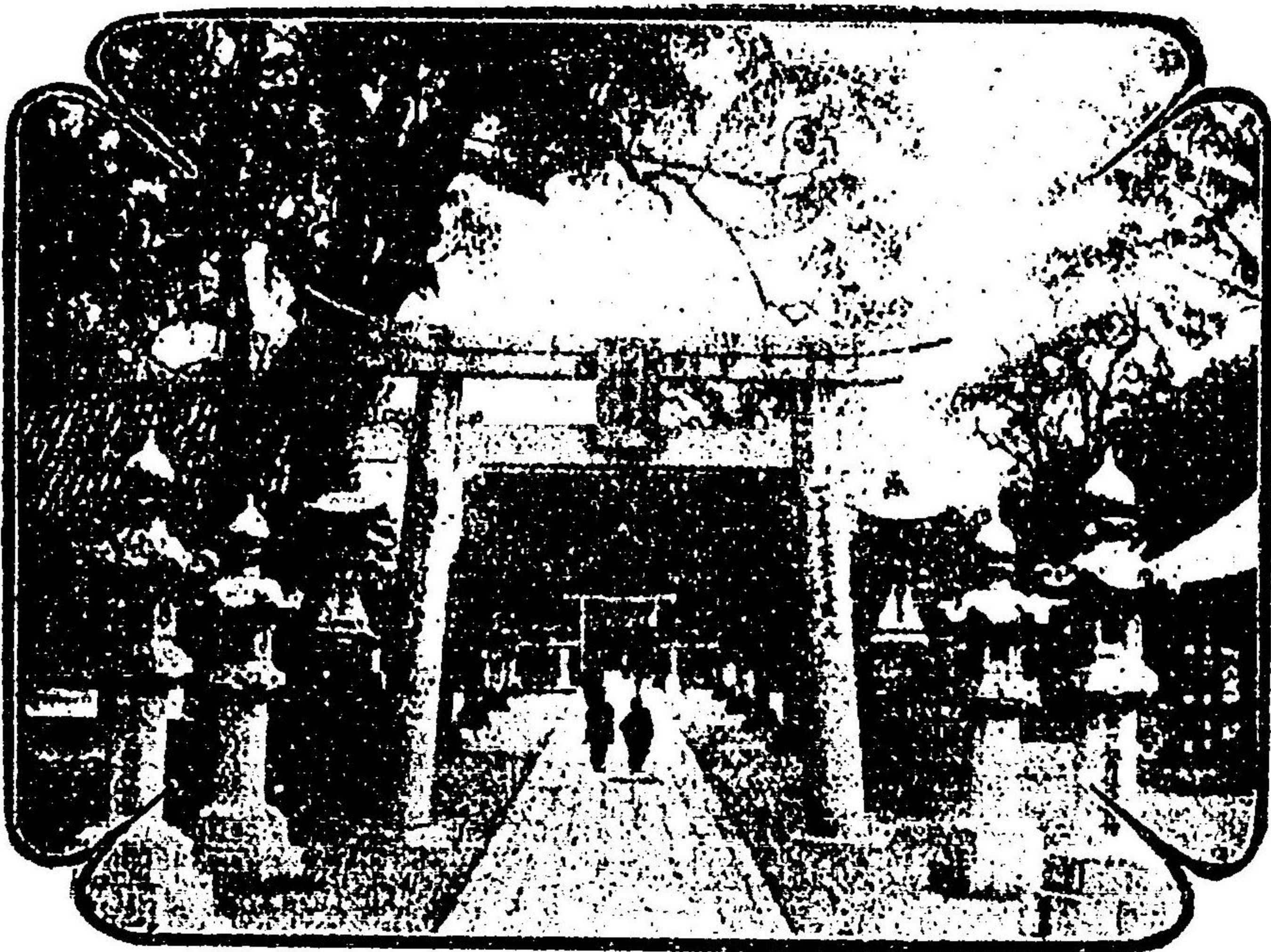
太宰府天滿宮

#### 字 解

大分縣 下流 有明海 兩岸 繁昌  
連絡 諸市 沿海 地方  
積み 製鐵所 醫科

大學 古來 史上 役所

○地理 二學年 上



管轄 豊前の東南部、豊後。

位置 福岡縣の東南、瀬戸内海に面す。

地勢

火山脈、中央を南北に貫く。西部、山國川、筑後川の上流

縣内山岳多くして平野少し。

國東半島、火山脈の末端。

海岸

地藏崎

佐田岬と對して速吸海峡

南、豊後海峡。北、別府灣

大分縣

山

祖母岳、九州第一の高山、六千五百尺。英彦山。火山、鶴見山、由布岳(豊後富士)。

河

大野川。山國川の上流數里間。耶馬溪(ヤバ) 大分町(二萬二千) 縣廳のある所。

都會

中津、別府 有名の温泉場。臼杵、佐伯。

鐵道

豊州線 小倉市より宇佐に通ずるもの。

產物

疊表。蘭蓆(井ム)。硫黄。九州第一。推茸。漁獵。

名所

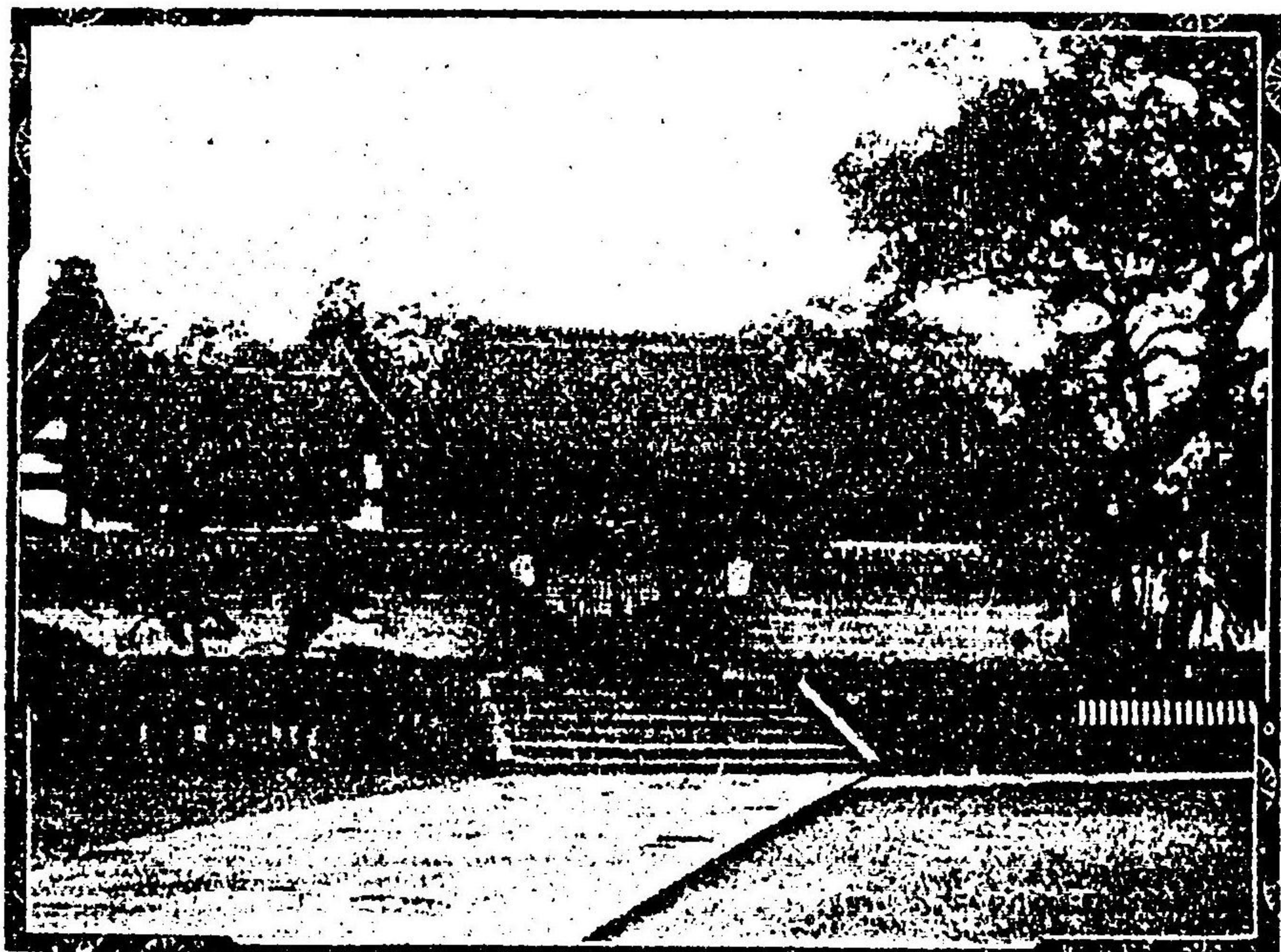
耶馬溪、山國川の上流數里の間。日本三奇景の一。宇佐八幡宮。和氣清磨の使せし宮。別府温泉

宇佐八幡宮

字解

接して 限る 疊表 山水の景  
ハチマングー トユ  
のけしきは 八幡宮 都邑

○地理 二學年 上



## 卷 之 二

樺太	臺灣	北海道	九州	四國	中國	近畿	七地方
樺太廳	總督府	十一道廳	八十二縣	四ヶ國	五十二縣	二府九縣	縣廳の所在地
九春古丹	臺北	札幌	福岡、大分、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿島、那霸	德島、高松、松山、高知	岡山、廣島、山口、鳥取、松江	大津、京都、奈良、津、和歌山、大坂、神戸	
		七師團 旭川	六師團 熊本、久留米	十一師團 善通寺	五十七師團 岡山、廣島	十四師團 京都、大坂、姫路	師團司令部
		室蘭 未開設	第三軍港 佐七保		第二軍港 吳	第四軍港 舞鶴	軍港
	基隆、淡水、安平、打狗	室蘭、釧路、小樽、函館	長崎、門司、博多、若松、口津、唐津、三角、那霸、佐須奈、殿原、鹿見		糸崎、下關、濱田、境、宮津	神戸、大坂、四日市	開港場

# 小學日本歷史

二學年前期

# 建武の中興

## 中興の政治

光嚴天皇を廢す。

記録所—天皇の政治を決し給ふ役所。  
雑訴決斷所—裁判する役所。

年號を建武と改む。

親王を諸方に分ち遣す。

功臣を賞す  
〔護良親王、征夷大將軍、尊氏、義貞、正成、長年。〕

宮城をつくりたまふ。

朝廷の賞罰、公平を失ふ—不平の者多し。

源義家の子孫。北條氏に従ふ。

六波羅を滅し、功第一となる。

大望—幕府をおこさんとす。

尊氏の反逆—北條時行、鎌倉を攻む。

## 中興の政破

直義、護良親王を弑して走る。

尊氏、時行を征伐す。

自ら征夷大將軍と稱す

源義家の子孫。

鎌倉をうちて、北條氏を亡す。

尊氏を除かんとはかる。

尊氏を征伐に向ふ

天下ふたたび大亂となる。

後醍醐天皇 擁立 私立したりし 朝廷 威光

建武 護良親王 征夷大將軍 賞賜 六波羅 捕へ 勤王 大

望 抱き 賞罰 公平 不平 捕へ 勤王

勅 征伐 忠勤 再興

○歴史 二學年 上

百二十九

## 字解

# 南

尊氏反逆ハンギヤク

西上

足柄、箱根の戦—義貞の軍やぶる。  
尊氏、直義、京都に攻め上る。  
北畠顯家アキイ—あとを追ふ。

天皇、比叡山に避けたまふ

京都の戦—尊氏やぶれて、九州に走る、

後深草—持明院統—北朝。

龜山—大覺寺統—南朝。

皇統二分—後嵯峨天皇

持明院統なる光嚴天皇の勅をうく。  
尊氏、九州にて大いに勢を得。

博多を發す—兵船七千—陸路—直義

湊川の戦—正成戦死—義貞破れ歸る。

尊氏京都に入る。天皇、比叡山に幸す。  
名和長年等戦死。

東上

# 北朝

南北朝に分る

尊氏、光明天皇を立つ。  
尊氏、いつはり降る—天皇をおしこめ奉る。  
天皇、三種の神器を奉じて吉野に行幸。(五百七十年前)

義貞戦死—皇太子を奉じて越前に行く。  
足利高經と戦ひて討死す。

顯家戦死—親王を奉じて伊勢に行く。  
高師直と和泉に戦ひて死す。

後醍醐天皇崩御—後村上天皇立つ。

北畠親房、菊池武光、楠木正行の勤王。  
正行戦死—高師直と四條畷に戦ひて死す。

足利氏内部の亂—師直と直義、直義と尊氏。  
南朝—官軍戦死—勢、日にちぢまる。

南北朝の合一

北朝—尊氏—義詮—義満益々盛なり  
大内義弘南朝に使用して和を請ふ。  
神器を後小松天皇に傳へ給ふ(南朝五十七年間)。

### 字解

陸奥守ムツノカミ 退きシリゾ 會しカイ 逃れノガ 皇統コウトウ 仰を請ひオホセ 味方ミカド 吉野ヨシノ  
 南朝ナンチョウ 北朝ホクチョウ 宮方ミヤガタ 武家方ブケガタ 討死ウチジニ 行宮アンキョウ 王事オウジ 迎へムカ 軍敗グンバク  
 衰へオトロ 内部ナイブ の亂ラン 絶えタ 和合ワゴウ 神器シンキ

將軍シロ 尊氏ノブナリ 義詮ヨシツネ 義滿ヨシツル

細川頼之ホソカワヨシタカ これを助く。

南北兩朝ナンホクニョウ の和合。

ろろくの法律リョロクノリツ を定む。

命イミ に従はざる諸將シロウ を誅す。

足利幕府アジノマク 全くとのふ。

### 足

政治セイジ を整ふ

### 利義滿

おごりに長ず

室町ムロツチ の家ノ 花ハナ の御所ミヤド といふ。

太政大臣タイセイテイジン となる。

北山キタヤマ の別莊ベツソウ 鹿苑院ロクオンイン 金閣寺キンカクジ。

北山殿キタヤマノミヤ 公方キョウヘ と稱す。

行列ケツレツ 上皇カミミカド の御幸ミヨキ にならふ。

親王シンノウ、公卿キョウケイ を従はしむ。

明國メイコク に通じて錢ゼン を得。

國體クニタマ をはづかしむ 日本國王ニッポンノミカド の稱號シヨウガウ をうく。

不法フホウ の行

### 字解

一致イツチ たまつて 多年タネン の兵亂ヘイラン のせんそい 邸宅テイタク やしまの 太政大臣タイセイテイジン 三層サンソウ 關白カンパウ 以イ  
 下カ かんじくよ 交通コウツウ よか 不法フホウ

○ 歴史 二學年 上

# 應仁の

原 因

幕府の権力衰ふ

大内義弘—南朝の遺臣なごそむく。  
將軍義教弒せらる。

將軍義政の失政

政治をかへりみず。  
遊樂にのみふける。  
租税を重く取りたてる。

相續の争

將軍家 || 義視—義尙  
畠山家 || 政長—義就  
斯波家 || 義敏—義廉

細川勝元 山名宗全

政長—義就、兵をかまへたるに始る(應仁元年)  
(四百四十年前)

戦

争

東軍—勝元—十六萬人  
西軍—宗全—十一萬人  
天下の武士二つに分る。  
戰爭十一年—皇居、社寺、市街、圖書の焼失。  
宗全死す、勝元、亦死す—諸大名兵を引てかへる。

# 亂

結 果

右京、大半焼け失せ野となる。  
政長管領となる—義政、義視と和睦す。  
幕府の権勢全く地におつ。  
諸國の武士幕府の命を用ひず、租税を納めず。  
天下大亂のもととなる。

義政のおごり

東山の別荘—銀閣寺—東山殿とよぶ。  
遊びにふける—茶の湯。  
財政大に困難となる—錢を明國に求む。  
皇室の御費用にさへ、ことかくに至る。

# 字 解

威勢イセイ いこい いほひ たたひおついの ひどにもさるこぞ  
遊樂ユウラク あそび たの しむこと  
費用ヒヨウ ヒヨウ リョウケ カトクツツク いへのあ 還俗ゲンゾク はしやになつて  
肩カミ カミ ダク マカ ミカ ニブン ふたつに 戦場センジョウ いく 内裏ウラ てこの 社寺シヤジ おみや  
邸宅テイタク やしき 兵火ヘイカ せんそいのため 焼野ヤクノ 寶物ホウモツ たから 記録キロク もの 各地カクチ はし 困難コンナン ぎ 御費ゴヒ

○ 歴史 二學年 上



將軍家

義尚將軍となる—義植—義晴。  
政權臣下に歸す—三好—松永。

基氏—尊氏の子。

勢、幕府をしのぐ。

鎌倉管領

しだいに幕府と疎遠になる—公方と稱す

兩上杉氏—山ノ内家—管領となる。

持氏幕府にそむきて亡さる。

關東地方

伊勢より起る。

北條早雲

關東地方を占領す—小田原に居る

氏綱—氏康。みな智勇あり

英 雄 の 割

中國地方

上杉謙信—越後

武田信玄—甲斐

戰術に長ず—川中島の戰。

據

今川義元—駿河に起る。

織田信長—尾張に起る。

中國地方—毛利元就

安藝に居る—大内義隆の臣下。  
義隆、陶晴賢に殺さる。  
晴賢を嚴島に亡して自立—領地十餘國

四國地方—長曾我部元親(土佐)。

九州地方—島津義久(薩摩)。

奥羽地方—伊達政宗。

大は小を呑み、強は弱を併す—百餘年間。

字 解

命令

領地

租稅

強大

勢力

鎌倉管領

疎遠

威勢

智勇

大半

勝敗

大志

抱き

甲越

近傍

英雄

○ 歴史 二學年 上

桶狭間の戦い今川義元を斬る一威名大にあがる。

幕府 將軍の権力全く衰ふ。  
三好長慶、松永久秀の専横(せんごう)義昭、信長にたよる。

信長の奉公

朝廷の御衰微

幕府より費用を奉らず。  
御即位の禮 行はれず。  
御葬式の禮 宮城の破壊。  
兒童、宮殿の上に遊び戯る。  
諸大名よりの献上(けんじ)金。

天下平定の勅を受く一正親町天皇。

京都に入る

義昭を將軍とす。  
近畿地方を平定す。  
宮城を修繕(しゆせん)し、御料を奉る。  
伊勢神宮を改築(かいかい)す。

# 織田 信

# 長

諸方を定む

足利氏亡ぶ

義昭、信長をねたみ兵を擧ぐ。  
義昭、信長に追はれて毛利元就による。  
足利氏一、二百四十年間にて全く亡ぶ。

淺倉義景を越前に亡す。  
淺井長政を近江に亡す。  
武田勝頼を甲斐に亡す。

家康これを助く。

秀吉を山陰、山陽に下す。  
元就の軍大舉して來る。

本能寺の變

秀吉を助けんとす。  
明智光秀の反逆(はんぎ)一信長自殺。

# 字 解

大勢(だいせい) 大なるい  
風雨(ふうう) 風あはれあふ  
権力(けんりく) 権力  
勢力(せきりき) 勢力  
兒童(じゆう) 兒童  
宮殿(きゆうてん) 宮殿  
興復(きやうふく) 興復  
決心(けつしん) 決心  
岐阜(ぎふ) 岐阜にあり  
逃れ(のがれ) 逃れ  
修理(しゆり) 修理す  
二條城(にじょうじやう) 二條城にあり  
戦亂(せんらん) 戦亂  
對せしめ(たいせしめ) 對せしめ  
轉(てん) 轉

○ 歴史 二學年 上

# 豊臣秀吉

尾張國愛知郡中村木下彌右衛門の子—藤吉郎。  
織田信長に仕ふ—足輕(フツ)より次第に立身(リツ)す。  
名を羽柴秀吉と改む。

## 戦功

中國に向ふ  
備中の輝元の大軍いたる。  
高松城 本能寺の變。  
毛利氏と和睦。

山崎合戦—一戦にして光秀を滅す。  
織田信孝、勝家、一益等のねたみ。

柴田勝家等を亡す  
賤ヶ岳の戦—秀吉、盛政を破る。  
信孝殺さる。一益降参。

大坂城を築く—天下第一の堅城—大坂の繁昌(ハンジ)  
長曾我部元親降参—四國平定。

## 諸國平定

北條氏政滅さる—關東平定。  
伊達政宗降参—奥羽平定。  
全國平定(紀元二千二百五十年)

政權、秀吉に歸す

## 朝鮮征伐

### 第一回

〔關白太政大臣となる—豊臣—太閤。〕  
目的—明國を征服せん。とす。  
使を朝鮮に遣す—應せず。  
陸軍十三萬—水軍一萬の大軍を出す。  
我軍しきりに勝つ。明の大軍を破る。  
和議を許し。諸將凱旋(セン)す。  
和議破る—秀吉を日本國王に封す。  
再び征伐の軍をやる。  
秀吉薨す—諸將召しかへさる。

### 第二回

## 身分

改め 中國 對陣 報知 山崎 諸

將(シヨウ) 威勢(イセイ) 遺業(イギヨウ) 長曾我部 奥州 伊達氏

死後(シゴ) 關白 養子 總大將 和議 約束 國書 趣意

遺命(イメイ)

## 字解

○ 歴史 二學年 上

幼時||廣忠の子||三河におこる||今川義元の許に人質となる。  
信長と和睦||信長を助け、諸方を伐つ||次第に領地をひろむ。  
秀吉と和睦||織田信雄を助けて、秀吉の軍を破る||和睦す。  
北條氏を伐つを助く、功により關東を得||江戸に入る。

前田利家と共に秀頼を助く。

### 徳川家

政權家康に歸す

關ヶ原の戰

原因 家康の威望ひとり盛。  
石田三成等の心配。  
三成、景勝、輝元、等兵をあぐ。  
天下の形勢二つに分る。  
兩軍大いに關ヶ原に戰ふ。  
小早川秀秋の反應(カシ)。  
西軍大に破る。

戰爭

結果 家康大坂に入る。  
大に賞罰を行ふ。  
天下家康に服す。

征夷大將軍となり、幕府を江戸に開く。(三百六年前)

### 康

大坂の役

冬の陣

原因 秀吉の恩を思ふもの多し。  
家康安心することあたはず。  
鐘のことより難題(カシ)をもつらこむ。

戰爭

大坂兵をあぐ、兵士多く集る。

夏の陣

原因

東軍勝つことあたはず||和睦となる。  
家康、ことさらに内堀をうづむ。  
大坂ふたたび兵をあぐ。  
治長事を用ふ||將士よろこばず。  
秀頼、淀君自殺||豊臣氏滅ぶ。

政治

規則を定む||百ヶ條||武家法度(フツケ)||公家法度(コウケ)  
學問を盛にす||學者をあげ用ふ。  
御三家を置く||水戸、尾張、紀伊

### 字解

人質(ヒトジチ) 威名(イメイ) 舊領地(キウリョウチ) 幼子(ヨウシ) 有様(アリサマ) 不  
 利(リ) 忌み(イ) 味方(ミカタ) 賞罰(ショウバツ) 有功(ユウコウ) 舊恩(キウオン) 翌年(ヨクネン) 不  
 利(リ) 忌み(イ) 味方(ミカタ) 賞罰(ショウバツ) 有功(ユウコウ) 舊恩(キウオン) 翌年(ヨクネン) 不

○歴史 二學年 上

# 徳川家光

内政

三代將軍—家康の孫—秀忠の子。

諸大名の心をためす—非望のものを挫ぐ。

幕府を整ふ

參勤交代の制を定む—人質。

武家法度、公家法度を勵行す。

幕府の威權、甚だ盛になる。

鐵砲の傳來

ポルトガル人、種子島に來り、鐵砲を傳ふ。  
(天文十二年、三百六十八年前)  
鐵砲大にひろまる—戰爭の法一變す。

ポルトガル人—きたる—南蠻人—貿易。

基督教(キリシタン宗)を傳ふ。

基督教の傳來

ポルトガルの宣教師サビエー等來る

九州にひろまる—中國を経て京都に傳ふ。

信長、京都に南蠻寺を建つ。

外交

キリシタン宗を禁ず

秀吉、宣教師を追ひ、信者を殺す。  
家康の外交—通商貿易を盛にす。  
伊達政宗、使をローマに遣す。  
家光厳しくキリシタン宗を禁ず。  
外國交通を禁ず(オランダのみ許す)。  
キリシタン信者を殺す。

島原の亂—松平信綱やうやく平定す。

宗門改めを行ふ。

外國の事情にうとくなり、世界の進歩におくる。

## 字解

屋敷 妻子 參勤交代 大隅 鐵砲 歡迎 物  
 品物の一派 南蠻寺 禁じる 信者 海外 肥前 抵抗 西  
 洋人 證明 進步

○歴史 二學年 上

年しせ死の人き高名

人名	年齢紀元	人名	年齢紀元	人名	年齢紀元
楠木正成	四一九九六	德川家康	五三三三六	松平定信	七二四八九
新田義貞	三一九九六	中江藤樹	四二二〇八	頼山陽	五二四九二
楠木正行	三二〇〇八	德川光圀	七三三六〇	二宮尊徳	七〇二五六
足利尊氏	五二〇〇八	具原益軒	八五三七四	井伊直弼	四六二五〇
毛利元就	五二二三三	新井白石	六二二八五	西郷隆盛	五二二五七
武田信玄	五二二三三	大岡忠相	七二四二二	大久保利通	四七二五八
上杉謙信	四九三三六	加茂真淵	七二四一九	木戸孝允	四二二五八
織田信長	四九三三六	本居宣長	七二四六一	岩倉具視	五九二五三
豊臣秀吉	六三三五九	伊能忠敬	七二四六七	三條實美	五三二五二

高等小學算術

二學年前期

### 數倍

倍數  $\parallel$  ある數で割り切れる數を、その數の倍數といふ。

偶數

2で割り切れる數  $\parallel$  2の倍數。  
例 4, 6, 8, 10. 二桁以上の數では、その數の終りが偶數であるか、又は零であれば、みな偶數である。

奇數

2で割り切れない數  $\parallel$  2の倍數でない數。  
例 1, 3, 5, 7, 9. 二桁以上の數では、その數の終りが奇數であつたらば、その數は、みな奇數である。

倍三の

その文字の和が、三で割り切れる數は、三の倍數である。  
例 2520. この數字を加へて見れば十五となる、十五は三の倍數であるから二千五百二十六は三の倍數である。  
例 12321. この數は、數字の和が二十八となつて、二十八は三の倍數でないから、この數は三の倍數でない。

倍五の

數の終りが5か零である數は五の倍數である。  
例 5の倍數  $\parallel$  3285, 160, 1115, 7900.  
5の倍數でない  $\parallel$  38, 2057, 55503.

### 公倍數

二つ以上の數の、どれでも割り切ることのできる數を、それらの數の公倍數と名づける。

例 80は、2, 4, 5, 8, 10, 20, 40. のどれでも割り切れるから、これらの數の公倍數である。  
例 23は(23)と(1)より外に割ることができないから、そんな數の公倍數でもない。

### 約數

ある數を、割り切ることのできる數を、その數の約數と名づける。

例 80は、2, 4, 5, 8, 10, 20, 40. で割り切ることができるから、この七つの數は、80の約數である。

### 公約數

二つ以上の數の、どちらも割り切ることができる數を、それらの數の公約數と名づける。

例 18, 12. この二つの數は、6でも3でも2でも割り切れるから、2, 3, 6. は、18と12との公約數である。  
例 15, 16. この二つの數には、一方は割り切れても、他の一方は割り切れない數ばかりであるから、公約數はないのである。

# 分數の 意義及 書き方

二分の一	二分の一
三分の一	三分の一
四分之ー	四分之ー

**書き方**  
 二分の一  $\frac{1}{2}$       三分の一  $\frac{1}{3}$   
 四分之ー  $\frac{1}{4}$       百分の五  $\frac{5}{100}$

**読み方**  
 横線を書き、下の数字を書き、後に上の字を書く。  
 下から先きに読んで、何分の幾つといふ。  
 下に書いてある数字を分母といふ。………  
 上に書いてある数字を分子といふ。………  
 分母は、ある単位を等分した数を示し、分子は、その等分  
 したものを幾つ集めたといふことを表す。  
**意義**  
 〇は、ある単位を八分したものを五つ集めたといふ意。

# 字 解

分數 ブンスイ    總て ソウテ    或數 アルスイ    倍數 バイスイ    稱す シヨウス    偶數 グスイ    奇數 キスイ    擇 ヨク  
 り リ    選 セン    公倍數 コバイスイ    諸數 シヨスイ    約數 ヤクスイ    意義 イギ    値 チ  
 幾分 イツブン    唱ふ トウブ    等分 トウブン    横線 オウゼン    分子 ブンシ    分母 ブンボ    計算 ケイサン  
 爲す ナ    缺 カク

# 簡易 なる 計算

○算術 二學年 上

**加法**  
 分母の同じい分數を加へるには、分子の和を分子とし、もとの分母を分母とすればよい。  
 例  $\frac{5}{8} + \frac{6}{8} = \frac{11}{8}$

**減法**  
 分母の同じい分數を引くには、分子の差を分子とし、もとの分母を分母とすればよい。  
 例  $\frac{28}{23} - \frac{19}{23} = \frac{9}{23}$

**乘法**  
 分數を何倍(整数)かするには、分子を倍した積を分子とし、もとの分母を分母とすればよい。



### 分數の種類

除法

例  $\frac{2}{7} \times \frac{3}{7} = \frac{6}{49}$ ,  $\frac{7}{18} \times \frac{6}{18} = \frac{42}{324}$

分數を幾つ(整数)かに割るには、分子を割った商を分子とし、もとの分母を分母とすればよい。

例  $\frac{2}{15} + \frac{4}{15} = \frac{6}{15}$ ,  $\frac{7}{18} + \frac{7}{18} = \frac{14}{18}$

真分數 || 分子が、分母より小さいもの || 1より小さい。  
 假分數 || 分子と分母とが等しいもの || 1に等しい。  
 帶分數(混分數) || 整数と真分數とからできたもの。

一分母と分子とに、同じ數を掛けても、その値は變らない。

$$\frac{5}{7} = \frac{5 \times 3}{7 \times 3} = \frac{15}{21}, \quad \frac{7}{12} = \frac{7 \times 8}{12 \times 8} = \frac{56}{96}$$

二分母と分子とを、同じ數で割っても、その値は變らない。

$$\frac{8}{12} = \frac{8 \div 4}{12 \div 4} = \frac{2}{3}, \quad \frac{21}{36} = \frac{21 \div 7}{36 \div 7} = \frac{3}{5}$$

### 分數の變化

三約分

分母と分子とを同じ數、すなはち、分母と分子との公約數で割って、もっとも簡單な形にすることである。

注意 分母と分子との公約數で、二度でも三度でも公約數のある限り割って、簡單な形にする。

四 整数を分數の形に直すこと

(イ) 1は、思ふまゝの分母をつけ、分母と分子と同數にすればよい。

(ロ) その他の數は1を分母として、その整数を分子とすればよい。

他の分母をもった分數がある時には、1を分母とした分數の分母と分子に、思ふ數を掛ければよい

例  $1 = \frac{3}{3} = \frac{5}{5} = \frac{10}{10} = \frac{100}{100} = \frac{150}{150} = \frac{75}{75}$

$\frac{5}{5} = \frac{5 \times 7}{5 \times 7} = \frac{35}{35}$  又は  $\frac{1}{1} = \frac{1 \times 12}{1 \times 12} = \frac{12}{12}$

五 帶分數を假分數とするには、整数と分母とを掛けた積に、分子を加へたものを分子とし、もとの分母を分母とする。

$$\frac{2}{5} = \frac{2}{5}, \quad \frac{7}{10} = \frac{7}{10}, \quad \frac{6}{15} = \frac{4}{15}$$

六 假分數を帯分數に直さうとするには、分母で分子を割る。

イ 割り切れた時には  $12 \parallel 9, 13 \parallel 7,$   
 整数ばかりとなる  $12 \parallel 9, 13 \parallel 7,$   
 割り切れぬ時には、商だけが整数で残  
 ロ りを分子とし、元の分母を分母とする  $12 \parallel 9, 13 \parallel 7,$

### 字解

簡易カンイ種類シュレイ 眞分數シンブンスウ 假分數カブンスウ 帯分數タイブンスウ 混分數コンブンスウ  
 例へ 就ツき 見ミ分け 約ヤクす 簡單カンダン 出デ来る 順ジュン化カ  
 .....  
 6 ページより  
 9 ページまで

### 同分母の分數の加法

- 一 眞分數ばかりの場合  
分子の和を分子とし、元の分母を分母とすればよい。
- 二 整数と眞分數との場合  
これらの場合には、整数の部分と分
- 三 整数と帯分數との場合  
數の部分とをばなして、別々に加へ
- 四 帯分數と眞分數との場合  
合せ、整数の和に、分數の和を書きそ
- 五 帯分數ばかりの場合  
へて、その合計を求める。
- 六 假分數のある場合には

帯分數(整数のみとなることもある)に直しておいてから後に計算する。

注意 ① 子割る場合でも、加へた結果が假分數となれば、分母で分子を割って帯分數に直し、又、約分しておく。

一 眞分數より眞分數を引く場合

分子の差を分子とし、元の分母を分母とする。

二 帯分數より引く場合(被減數の分數部が大きな場合)

イ 帯分數より眞分數を引く場合 ① 分數部のみで引き算をなし、その残りの分數を、被減數の整数に附け加へる

ロ 帯分數より帯分數を引く場合 ① 整数部と分數部とを別々に計算し、後、その残りをよせる。

三 整数より分數を引く場合

整数の中の1を取り、引くべき分數と同分母の分數に直して、から減數を引き、その残りを、残つてをる整数に附け加へる。

### 同分母の分數の減法

○算術 二學年 上

**四 帶分數より引く場合** (被減數の分數部が小さい場合)  
 被減數の整數の中から1を取り、これを假分數に直して、被減數の分數部に加へ、後、減數を引いて、残りの分數と、残つてをる整數とをよせる。

**五 假分數の場合**  
 イ そのまゝ計算してよい。残りか、なほ假分數とならば、帶分數に直しておかねばならぬ。  
 ロ 減數が假分數である時には、帶分數に直してから後に計算するが便利なきともある。

ハ はじめに、帶分數に直しておいてから、計算してもよい。  
 ハ はじめに、帶分數に直してをる分數を、その値をかへないで、同じ分母をもつた分數に直すことである。

**通分**

公分母 || 通分して、その分數にも通じて同じくならぬ分母のこと。

**通分**

**通分法**

まづ、おの／＼の分數の分母の公倍數を考へ出さねばならぬ。この公倍數を公分母とする。  
 次に、第一の分數の分子をこしらへねばならぬ。それは、公分母は、第一の分數の分母の何倍であるかを見て、分子も、同じほゞ倍したものを分子とする。第二以下の分數についても、かよ／＼にして分子をさだめる。

例  
 $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{2}{5}$ 、 $\frac{3}{7}$  の三分數を通分する。  
 三十といふものがある。これを公分母に取る。次にこの三十は、第一の分數の分母3の十倍であるから、分子も十倍して10といふ分數とする。第二の分數の分母の六倍であるから、分子も六倍して12といふ分數とする。第三の分數の分母の三倍であるから、分子も三倍して9といふ分數とする。故に

### 分母の異なる分数の加減法

すべて、通分法をやつて、同分母の分数に直してから後に計算する。分数の異つたまゝでは、加法も減法も行ふことはできない。

$$\frac{2}{3} + \frac{4}{5} + \frac{7}{10} = \frac{20}{30} + \frac{24}{30} + \frac{21}{30} = \frac{65}{30}$$

となる。

### 字解

異分母 イブンボ 異なる分母 イブンボ 場合 バヤヒ 結果 ケツカ 添へ ソフ 離し カチ 別々 ベツベツ 被減 ヒゲン  
 必要 ヒツヨク 旅行 リョウコウ 汽車 キョウシャ 通分 ツウブン 共通 キョウツウ 分配 フンバイ 公分母 コウブンボ  
 次子 ジシ 末子 マシ 全財産 ゼンザイサン 財産 ザイサン 職人 シヨクニン 職工 シヨクコ 馬車 バシャ 先方 センポウ 幾時 イツジ 幾時間 イツジカン  
 満てる ミク 桶 オケ 汲み ク

10 ページより  
17 ページまで

一 眞分数に整数を掛ける場合  
分子に整数を掛けたものを分子とし、元の分母を分母とする。

$$\frac{12}{17} \times 3 = \frac{12 \times 3}{17} = \frac{36}{17} = 2 \frac{2}{17}$$

二 帯分数に整数を掛ける場合  
整数部と分数部とを別々にして乗法を行ひ、後、一つによせる

$$3 \frac{3}{8} \times 4 = (3 \times 4) + \left( \frac{3 \times 4}{8} = \frac{12}{8} = 1 \frac{1}{2} \right) = 13 \frac{1}{2}$$

三 分数を整数で割る場合  
左の二法どれでもよし。  
イ 分子が割り切れる時には、分子を割る、分母は元のまゝ。

$$\frac{15}{23} \div 3 = \frac{15 \div 3}{23} = \frac{5}{23}$$

ロ その整数を分母に掛けたものを分母とし、分子は元のまゝ。

$$\frac{12}{7} \div 4 = \frac{12}{7 \times 4} = \frac{12}{28}$$

四 帯分数を整数で割る場合

假分数に直しておいてから後に割り算を行ふ。

$$\frac{4}{13} \div 3 = \frac{4}{13} \div 3 = \frac{4}{13 \times 3} = \frac{4}{39}$$

# 分 数 の 乗 除 法

五 整数を整数で割ること

その商は、被除数を分子とし、除数を分母とした分数に等しい。

$$6 \div 3 = \frac{6}{3}, \quad 15 \div 4 = \frac{15}{4} = 3 \frac{3}{4}$$

六 分数に分数を掛ける場合

分子の積を分子とし分母の積を分母とする。

$$\frac{2}{3} \times \frac{4}{7} = \frac{2 \times 4}{3 \times 7} = \frac{8}{21}, \quad \frac{3}{5} \times \frac{5}{9} = \frac{3 \times 5}{5 \times 9} = \frac{15}{45} = \frac{1}{3}$$

七 帯分数に分数を掛ける場合

帯分数を假分数に直しておいて、後、掛け算を行ふ。

帯分数を掛ける時には、こちらも假分数に直しておく。

八 整数に分数を掛ける場合

整数を、1を分母とした分数に直しておいて、後、掛け算を行ふ

$$6 \times \frac{3}{5} = \frac{6}{1} \times \frac{3}{5} = \frac{6 \times 3}{1 \times 5} = \frac{18}{5} = 3 \frac{3}{5}$$

九

ある数の幾分の幾つといふは、その數に、その分数をかけたものである。

$$8 \text{ の六分の五とは } 8 \times \frac{5}{6} = \frac{8}{1} \times \frac{5}{6} = \frac{8 \times 5}{1 \times 6} = 6 \frac{4}{6}$$

$$\frac{4}{9} \text{ の七分の三とは } \frac{4}{9} \times \frac{3}{7} = \frac{4 \times 3}{9 \times 7} = \frac{12}{63}$$

一〇 眞分数を眞分数で割る場合

除數の方の分母と分子とを入れかへ、被除數に掛ける

$$\frac{4}{7} \div \frac{5}{6} = \frac{4}{7} \times \frac{6}{5} = \frac{4 \times 6}{7 \times 5} = \frac{24}{35}$$

一一 帯分数を分数で割る場合

假分数の形に直しておいてから(一〇)の通りに行ふ。

除數が帯分数である時も、また、假分数に直しておく。

一二 整数を分数で割る場合

整数を、1を分母とした分数に直しておいて、後、(一〇)の通りに行ふ。

$$8 \div \frac{7}{12} = \frac{8}{1} \div \frac{7}{12} = \frac{8}{1} \times \frac{12}{7} = \frac{96}{7} = 13 \frac{5}{7}$$

帯分数は、もちろん假分数としておく



### 歩合

歩合 || 甲の数が、乙数の幾部分に當るかを表す数である (割合ともいふ)

歩合の求め方  
 甲数が、乙数に對する歩合を見るには、甲数を乙数で割る。  
 三十が、五百に對する歩合  $\parallel 30 \div 500 \parallel 0.06$   
 三十五圓が、百圓に對する歩合  $\parallel 35 \div 100 \parallel 0.35$

分數、小數の比較	分數	小數	歩合	分數	小數	歩合
	$\frac{1}{10}$	0.1	一割	$\frac{1}{100}$	0.01	一分
	$\frac{1}{1000}$	0.001	一厘	$\frac{1}{10000}$	0.0001	一毫

注意  
 小數 一分 一厘 一毛 一糸  
 分數 一割 一分 一厘 一毛

### 字解

歩合算 アヒゼン 關係 カンケイ 書換へ カキカ 化し カ 出來る デキ 簡單 カンタン 比 ヒ

順序 ジュンジヨ 繰返す クリカヘ 循環 ジュンカン 小數 シヨウ 第四位 ダイシイ 四捨五 シツゴ

入 ニユル 五より上へはあける イツパン 一般 ワリアヒ 割合 レイキン 禮金 シュツゼイ 出征將卒 シツク

32 ページより  
37 ページまで

### 歩算の合

元高、歩合高 || 甲数が、乙数に對する歩合を見る時

例  
 三十八圓……は……百圓……の……三割八分……にあたる

歩合高 元高 歩合

歩算は、元高、歩合高、歩合の三つの内の二つがわかつてゐて他の一つを求める法である。

一元高と歩合高を知って、歩合を求める法  
 (イ) 一斗五升は、一石の何割に當るか  
 $15 \div 100 \parallel 0.15 \parallel$  一割五分

二元高と歩合とを知って、歩合高を求める法  
 (ロ) 二圓五拾錢は、百圓の何割に當るか  
 $250 \div 10000 \parallel 0.025 \parallel$  二分五厘

一元高と歩合とを知って、歩合高を求める法  
 (ハ) 二千五百人の三割五分は何人か

例

1500 × 0.35 = 525 A  
(口)三百七十圓の七分五厘は何圓か  
370 × 0.075 = 277.5 錢

三步合高と歩合とを知って、元高を求むる法

(歩合) ÷ (元高) = (元高)

(イ)七貫目は、何貫目の三割五分に當るか。  
7 ÷ 0.35 = 20 貫

例

(ロ)何圓の八分三厘が、百二十四圓五拾錢となるか  
12450 ÷ 0.083 = 1500 圓

### 字解

元高	モトダカ	歩合高	フヤヒダカ	商家	シヨウカ	春さ	ツ	耗る	ヘ	春耗高	ツキベリダカ	入	ニユイ
學試験	ガクシケン	及第者	キユウダイシヤ	志願者	シガンシヤ	某校	カクゴウ	總數	ソウスイ	收	シユイ		
稜	カク	比較	ヒカク	增收	ゾウシユイ	腐れ	カサ	陶器	トウキ	破損	ハソン		
相州	ソウシュウ	乗車賃	ジョウシヤチン	往復切符	オウフクキツプ	林檎	リンゴ	梨	ナシ	柿	カキ		
果實	カシツ	許可	キヨカ	部別人員	ブベツジンイン	移住者	イジュシヤ	増加	ゾウカ				

38 ページより  
41 ページまで

# 高等小學理科

二學年前期



ポポンタ

形態

根||主根と多くの細かい根。莖||大そ一短かく地上に出ず。  
葉||單葉—深いきれこみあり。元の方小さく、先の方ひろし。

蒲公英

花  
一本の軸に一花。  
一つの花と見るは、じつは、多くの花の集り。  
一つの瓣の如きものが一つの花。  
瓣五、雄蕊五(合着)  
雌蕊の頭二分す。

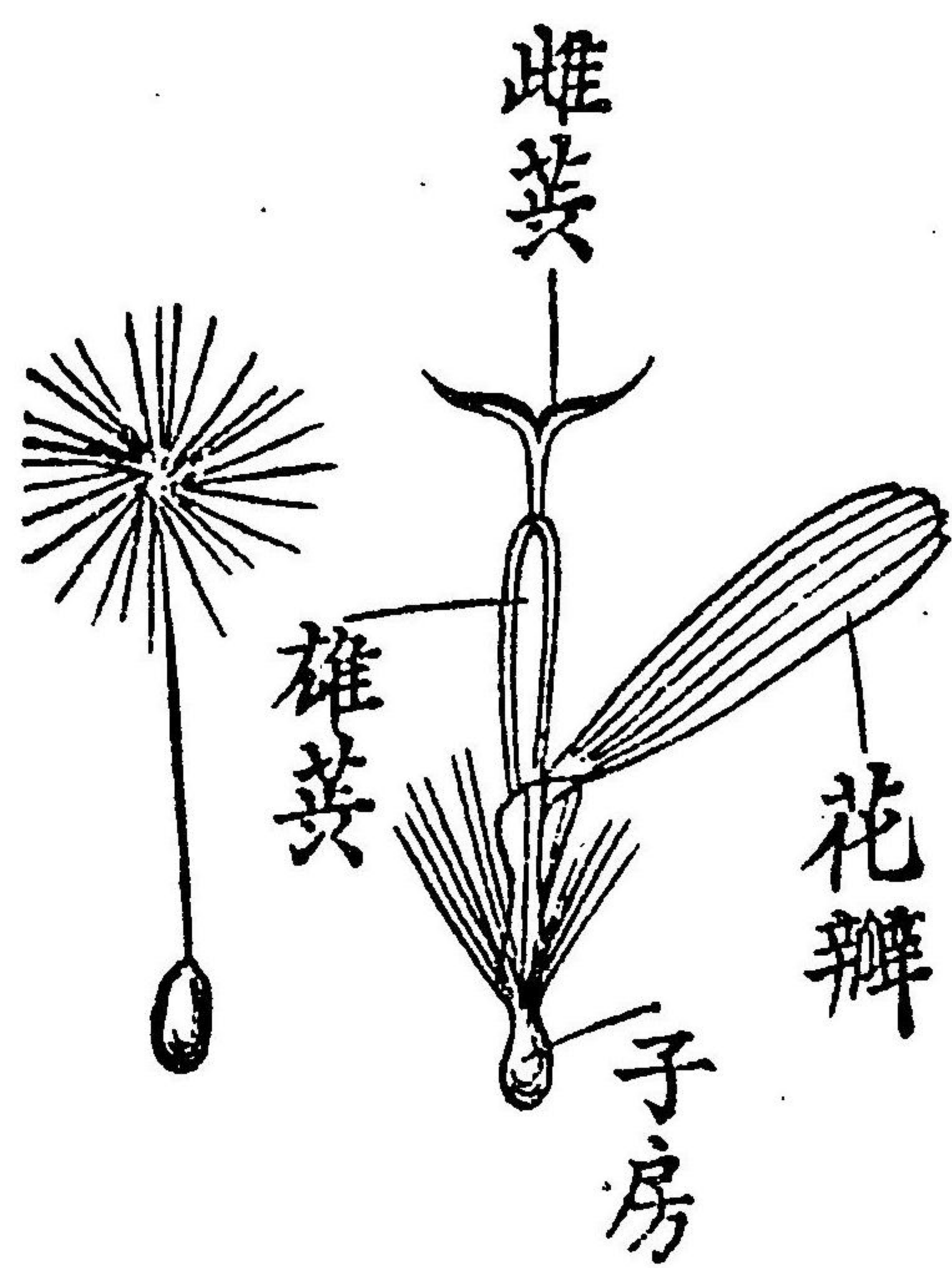
果實  
長い柄の先に毛をつけ、風にとぶ。

花の運動

日中には十分に開き、夜間又は雨天には閉つ

實

花



桃

形態

幹||喬木となる。多くの脂(ワ)をもつ。  
葉||葉身長く、一種の香氣あり。托葉(ト)あれども、早く落つ。

花  
春咲く。うすい紅色。萼||五片の合着したもの。  
花瓣||五。雄蕊多く、雌蕊は一。

果實

肉あつく、水氣多く、すこぶるうまい。  
中に、かたい核(カ)がある||核果(ガイ)。

花  
うす紅色(桃色)のもの多く、白、深紅色のものもある。  
花瓣一重のもの多く、まれに八重咲のものもある。

種類

果實  
上海水蜜桃(シヤンハイヌ)、天津水蜜桃。  
この他、西洋種もたくさんにある。

効用

花を賞するために、庭園に栽培せられる。  
果實は、人人に賞味(シ)せられる。

注意

木は接木(キギ)してそだて、肥料を施さない。  
古い枝は、ほごよく切りすてて、新しい枝をたてること。  
果實を取るには、早朝か、又は夕方にするこ

## 蜂 蜜

### 形態

体は、頭、胸、腹の三部にわかる昆虫。全体に毛を被る。  
 頭部 圓形、一對の觸角、一對の複眼(カク) 三箇の單眼(ガン)  
 胸部 二對のうすい翅(ハ)。三對の脚。  
 腹部 胸との間はきはめて細し。雌蜂は針をもつ。

### 蜂の三種

雌蜂 一群中に一匹(女王、王蜂なごといふ)一卵を産む。  
 雄蜂 一群中に數匹。雌蜂に子をうますのみ。秋に死す。  
 職蜂 一萬より三四萬の大群。巢を造り、食物を集め、子を育て、針をもって敵をふせぐ。

### 巢

人に飼はれ、箱の中につくる。六角形の小室の集ったもの。職蜂が、腹の下面から蠟を出し、口にふくみ、糸のよーにして築く。

### 食物

花蜜と花粉―職蜂が、春から秋まで、日日怠らず集めて来る。蜜は口中にふくみ、花粉は脚につけて運んで来る。

### 効用

蜂の食用として餘りの蜜を取る―食物調理、醫用、菓子。  
 蠟―巢よりしぼり取る―蠟燭、蠟引紙用。  
 飼ふに手数がいらぬから、農家の副業(ソウキ)として有利である。

## 封分の蜂蜜

一群中に、二匹の雌蜂ができること、争をはじめ、もとの雌蜂は、一部の職蜂をつれて分れて出る。これを分封と名づける。たいてい、四月より六月ごろまでの間に行ふもので、この時、他の箱にとらへ入れて、新しい巢をいとなませる。

○理科 二學年 上

蜜蜂の頭

同脚



ルヘガマサノト

形態

体ははだか―常に粘液を出す―皮膚の乾くを防ぎ、呼吸するため。  
背||縦縞(ジマ)のもよりあり。腹||白し。

頭部

兩側に、とび出た大きい目。耳には耳殻(クガ)がない。  
口||すこぶる大きく、舌は前方につき、内の方にまがる。

四肢

前肢は短くて小さく、四趾(シシ、四本)がある。  
後肢は長くて大きく、五趾(ゴシ、五本)をはる。

性すばやく、陸上では、よくはね飛び、水中ではよく泳ぐ。

食物

小さい虫類、魚の子などを捕へ食ふ。食物に近づけば、急に  
飛んで、舌を前へ折返して出し、その先に小虫を粘着させ、  
すぐに口に入れる。あまり早くて、なかなか見えぬ。

習性

繁殖

卵 春、水の中に産む。ごろごろしたものである。黒い  
卵ものは、蛙の卵で、どろどろは、卵を保護するもの。  
オタマジャクシ||卵がかへって、尾のあるものとなつたもので

食物

オタマジャクシ||卵がかへって、尾のあるものとなつたもので  
鰓(エラ)で呼吸する。次第に尾を失ひ、後肢を生じ、前肢を生  
じ、鰓がなくなって肺(ハ)ができてくる。

蛙の解剖

心臓(シン) || 少し、赤色の囊 || 全身に血をめぐらす機關(キカ)。

肺臓(ハイ) || 心臓の下、左右一對ある―うすい紅色をおぶ―空氣を呼吸す  
る囊―硝子管で口から吹けばふくれる。

肝臓(カン) || 肺臓の前にある大  
形のもの―胆汁(シヤ)  
(ジュ)といふ消化液  
を出すもの。

膽囊(タン) || 胆汁を貯へる囊。

胃 || 食物の消化所。

腸 || 食物を消化す、その末  
端は肛門(コウモン)。

脾臓(ヒ) || 血をつくる所。

膀胱(ハシラ) || 小便を貯ふる所。

脂肪 || 黄色のあぶら。

○理科 二學年 上

蛙の解剖



### 春の毒草

- 一 クサノオー  
長い花軸に、四瓣の小さい黄色の花が咲く。葉は羽状複葉で深い切込がある。莖、葉から、黄色の汁を出す。
- 二 ドクウツギ  
莖は四角で緑色、ふしがある。葉は南天の葉に似て、三條の大葉脈がある。花瓣は、久しく落ちないで、後に、赤色の肉の厚いものとなり、果實をつみ、大そー美し。
- 三 シキミ  
常緑木(トコ)で、葉の肉は厚い。佛に手向けるもので、一種の香氣があるため抹香(マツ)線香の材料とする。
- 四 ドクゼリ  
食用のせりに似て、高さ三四尺となる。地下莖太く、多くの節がある。この根に多くの毒をふくむ。
- 五 水仙  
一月頃に、香の高い花を咲くので、多く盆栽(ポット)花園などに栽培する。地下の球莖に毒あり薬となる。
- 六 アセビ  
常緑木―山野に自生する灌木。葉は、肉が厚くしてかたい。葉をたゞきつぶした汁に毒がある。
- その他  
キツツジ。ハシリドコロ。オニシバリ。  
コシヨノキ。トイダイグサ。ウバコロシ。

### 蟻と蚜

**蟻**

**形態**  
体は、頭、胸、腹の三部にわかる。六本の脚。昆虫。力强し。頭部。二本の觸角。口は、かむとなめるとに適す。

**習性**  
多く相集りて巢を造り、規律(ツリ)正しき生活をいとなむ。

三種の蟻  
雌蟻。數匹居る。常に巢の中にて、卵を産む。  
雄蟻。翅があつて、雌蟻に卵を産ませる外に仕事なし。  
働蟻。職蟻ともいふ。巢を造り、食を集め、敵を防ぐ。

他の群と大戦争を開き、勝ちたる方は、敵の食物をうばひ、卵、幼虫を捕へて歸つて、それが成長してから、下男として使ふ。

**蚜虫**  
ごく細かい昆虫。種類。緑色、黒色、その他なほ多し。雄虫は、速に繁殖す。多く草木のやわらかい芽に集り、その汁を吸うて、つひに枯らしてしまふ。翅なきもの多し。

**動物の共生**

動物が、相互に助けあうて生活してをることはいふ。

例 蚜虫は、体から甘い汁を出して蟻になめさせる。蟻は、その汁をもらふために、蚜虫の敵を防いでやり、又、蚜虫の食がなくなれば、他の軟い草木にうつしてやる。

○理科 二學年 上

變態 幼虫(桑を食ふ時代)。蛹(繭の中の時代)。成虫(蛾)。卵。昆虫。

毛蠶(カ)

卵からかへた當分—全体に毛を被てゐて、黒い。數日の後、毛はぬけおちてしまふ。

幼虫の時代

成長

卵からかへて一週間の後、第一回の脱皮(脱皮)をする(脱皮とは、皮をぬぐこと)。この時は、桑を食はず、頭をもたげて、丁度眠つてをるよしであるから、これを第一眠といふ。その後、大てい六日目ごとに脱皮して、四回脱皮した後、二寸ばかりの大きとなり、三十四五日目に繭を造る。

形態

全体灰白色、十二の環節(セツ)よりなる。頭は、口の如く見える小さい部分。胸は、頭のようにまるくふくれた部分—三對の脚がある。腹部には、前後五對の脚がある—兩側に氣門がある。

蠶

蛹の時代

繭—体内の透明な液は、口に出て糸となり、繭を造る。蛹—繭の中で蛹となり、十日許りの後、蛾に化して出る。

蛾の時代

頭、胸、腹の三部。一對の觸角と眼。一對の翅と三對の脚。食物を取らず。卵を産めば直に死す。

卵の時代

蠶卵紙—卵を産みつけさせた紙。あくる年の春までたくはへおく。

飼育法

温暖育—火力をひ温度を一定す。清涼育—自然の温度にまかす。折衷育—寒い日にのみ火を用ふ。

種類—春蠶。夏蠶。秋蠶。

効用

繭より糸を取る—生糸(絹糸)。我國第一の輸出品—一億圓以上。眞綿(マワ)—糸に取りし残りの糸。糞はよき肥料となる。

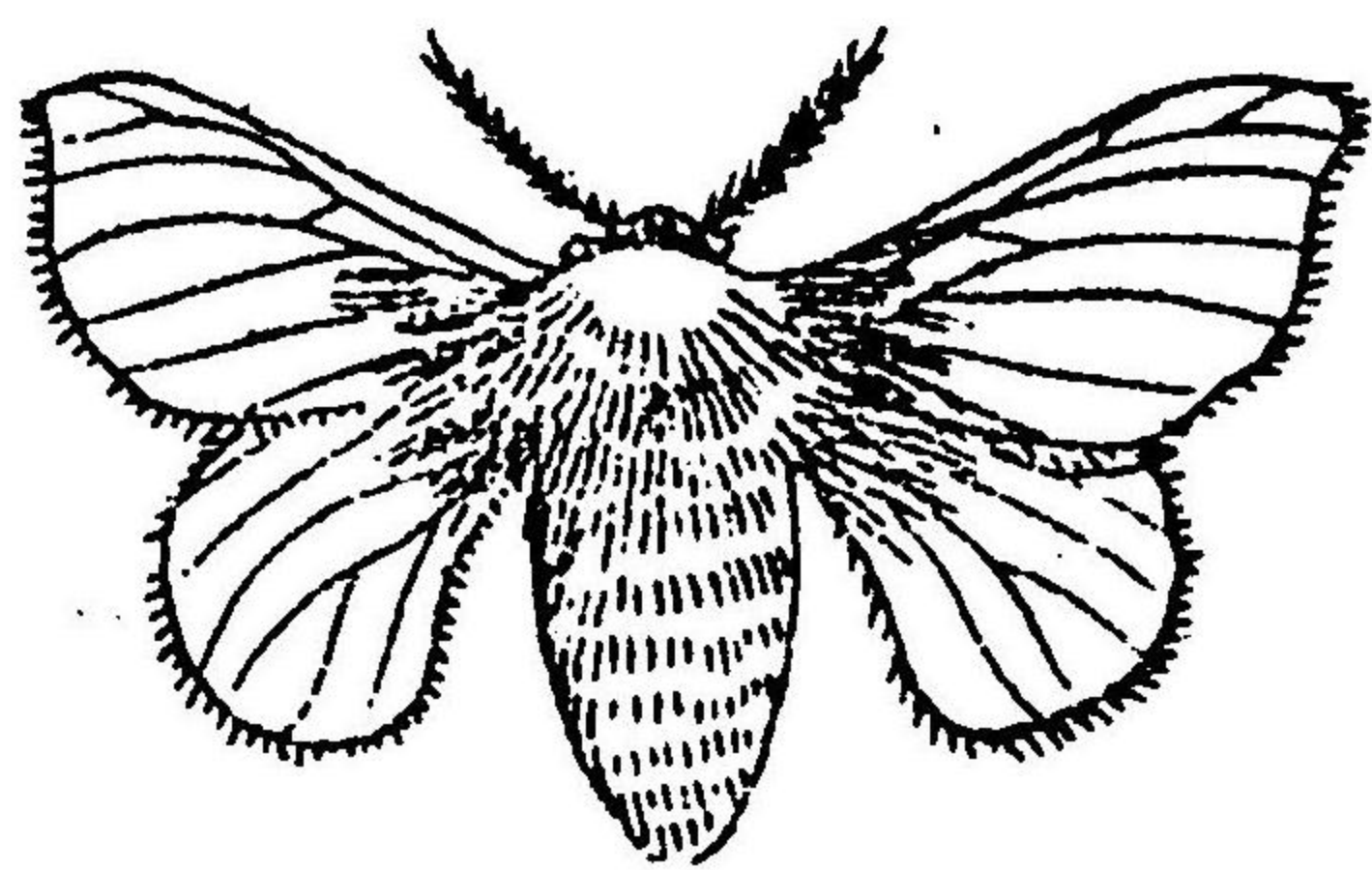
産地

長野、福島、群馬、山梨、岐阜の諸縣に多く、全國いたる所に産す。

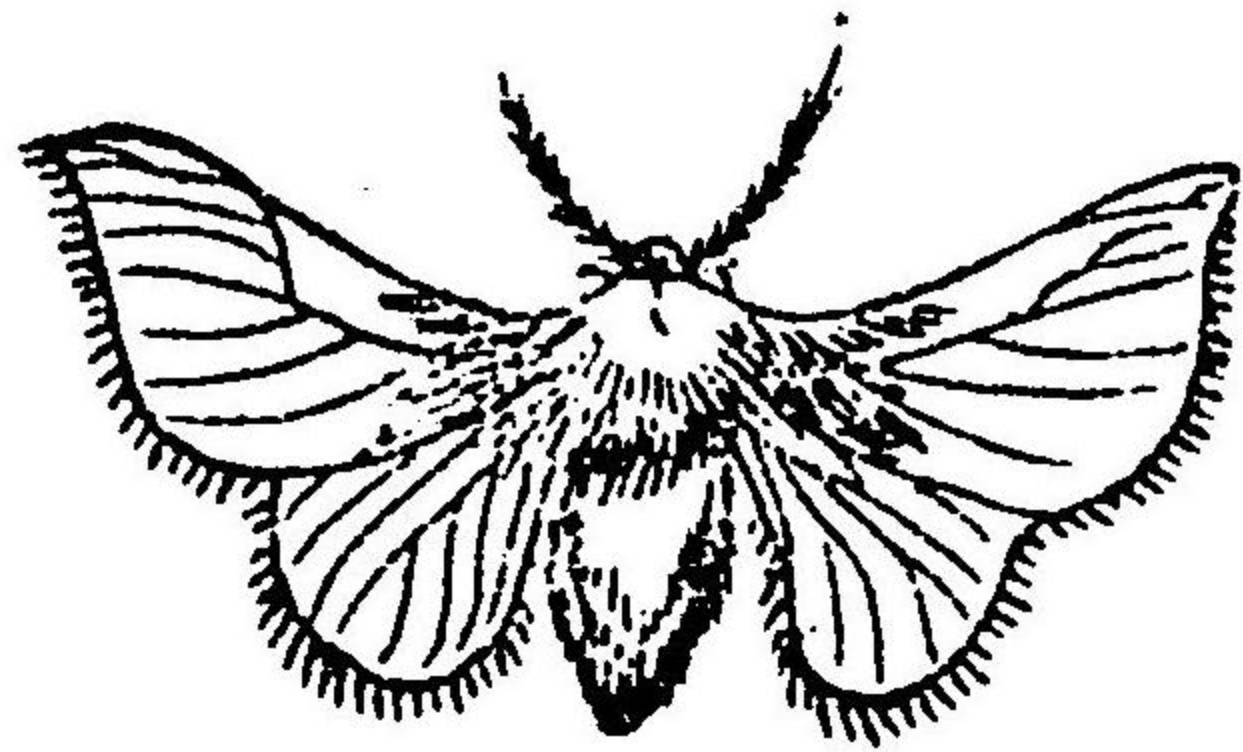
○理科 二學年 上

蛾の蚕

雌



雄



# 桑

形態

幹||喬木—強靱(キョウキ)な皮を破る—材質も堅固。  
葉||形いろいろあり。切こみも、深いものと浅いものがある。

花 { 雄花ばかり咲く木と、雌花ばかり咲く木とにわかる。  
多くの小さい花が集って、短い軸にむらがつて咲く。

果實 { 一つの果實と見えるのは、多くの小さい果實の集ったもの。

種類

{ 葉の形により丸葉種と切葉種。  
葉の出る時により早種、中種、晩種

効用||蠶の食料は桑の外にない。

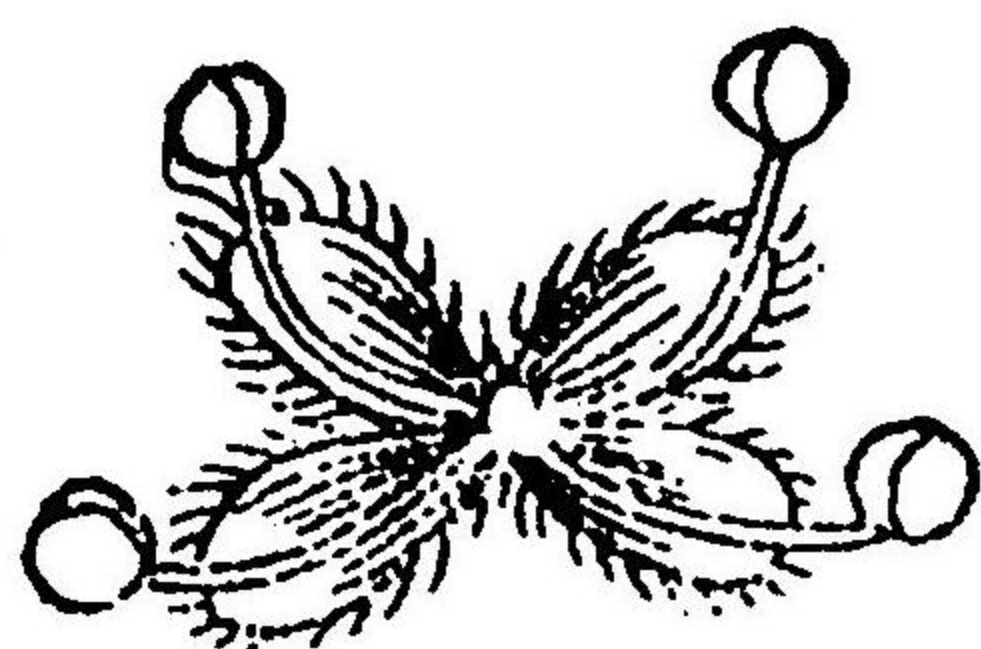
收穫法

根蒔法||年々新しい枝を蒔り取る  
中蒔法||二三尺の高さに成長させ、新しい枝だけを蒔取る。  
高木作||自然のままに成長させ、葉ばかりを摘み取る。

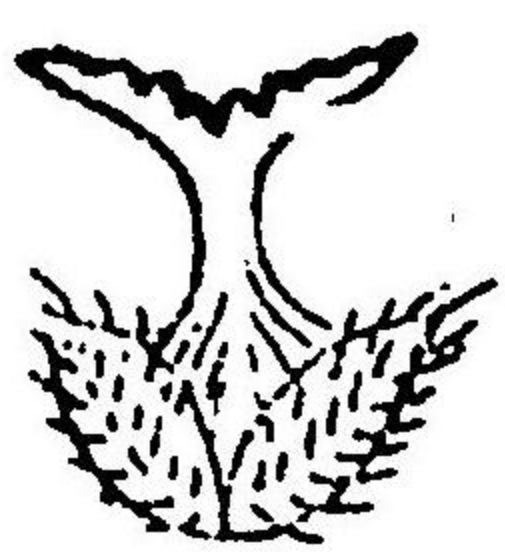
## 桑の

花

雄



雌



# 動物の保護色

身体の色が、居る所の周囲の色と同じよーになってゐて、他の動物の目をくらましてをることである。

例

エダシヤクトリ虫||桑の木の小枝と少しもちがはぬ。  
イナゴ、バッタ、アマガヘル||緑色で、草木の色と見わけ難い。  
兎||枯葉と同色。雪の多い地方のものは白色となる。  
カレイ、ヒラメ||半身は、海底の砂と同じ色。  
コノハチョー||木にとまるとは、枯葉と見わけ難い。  
イカ||居る所によつて、種々に色をかへることが出来る。

# 蝶と蛾の別

(蝶)

觸 || 角||棍棒(コン)の状。

翅 || 表の方が美しい。

出る時刻 || 晝の間にかざる。

とまると || 兩翅を合せ、背の

羽の状、又は糸の如し。  
裏の方が美しい。  
夕方、又は、夜間ばかり。  
翅を兩方に開いて、  
地につけてをる。

(蛾)

### ボント

形態

体||頭、胸、腹の三部にわかる||昆虫。

頭部||大きな一對の複眼と三個の單眼。一對の觸角。左右に動き、物をかむ。

胸部||大きくふくれ、三對の脚と、大なる二對の翅とがある。腹部||多くの環節(セグ)あり、細長し。

習性

性、活潑(シツ)勇壯(ユウ)早く飛ぶ。

小虫をとらへて食す。卵を水の中につみおとす。

幼虫

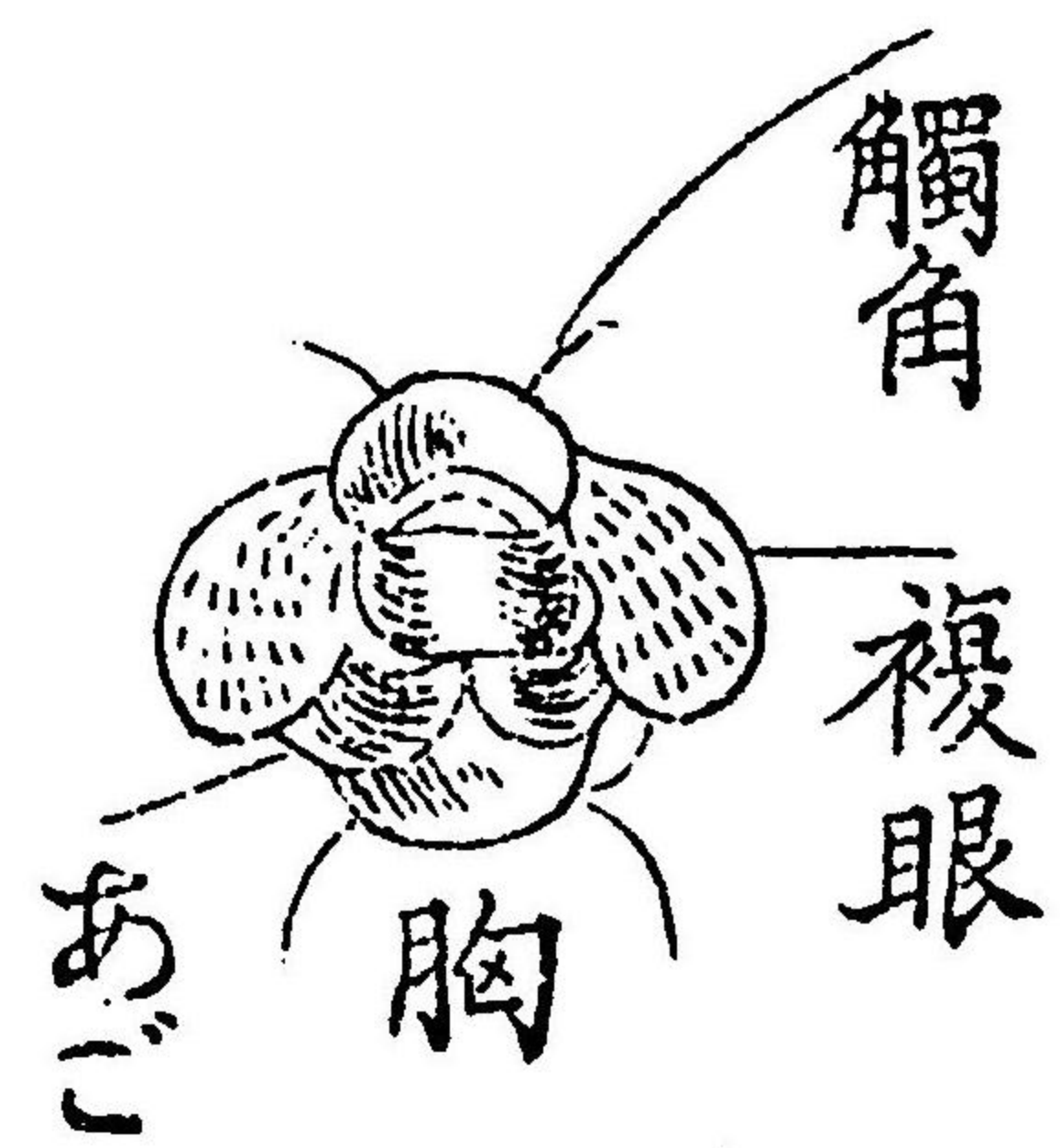
タイコムシ||卵のかへったもの。十ヶ月ばかりの間、水中に生活す。

下唇は缺(カサ)の状となり、他の小虫をとらへて食物とする。幼虫と蛹との區別が明かでない。

効用

害虫を捕へて食ふから農業上の利益となることが多い。みだりに殺すな。

### 蜻蛉の頭



### 棉

形態

莖は木の如く堅く、二尺内外に成長する。葉は三尖又は五尖。

花||夏、葉の根から花梗(カゴ)を出して、白色又は黄色の花咲く。花弁||五。總苞(サシ)三。萼は總苞の内にある。

果實||桃に似た實ができる。熟すれば、三つに裂けて棉花をふく。棉花は、種子についてをる細い長い多くの白い毛である。

効用

棉花を取り、器械にかけて種子を去り、綿とする。種子から油をしぼり取る||綿種油。かすは肥料となる。

### 麻

形態

莖||まっすぐで四角||高さ一丈。葉||掌狀複葉(シヨウシヨ)。鋸齒狀あり

花||雄花の株と、雌花の株とに分る。形は、下の圖について知れ。

果實||小さい圓い粒||アサノミ。

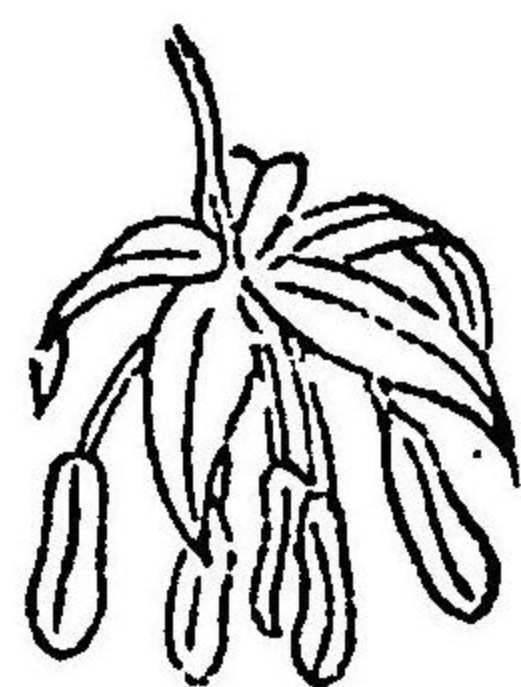
効用

皮をはぎ、苧(チ)をつくる。麻稈(カサ)は屋根、垣、火藥製造。實は香料とし、又、油をしぼる。

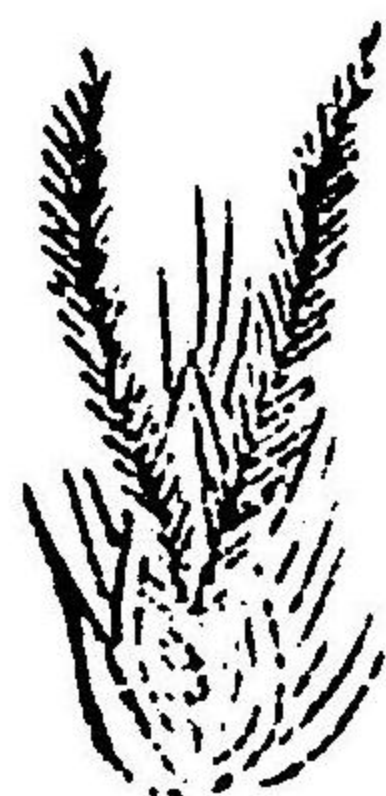
○理科 二學年 上

### 麻の花

雄



雌







鳶

形態

毛色 || 背は暗褐色(アンカク) || 鳶色。腹は淡褐色(タンカク)。  
嘴 || 強大 || 上嘴の先端(セン)は下にまがる || 肉を割く便利。  
眼 || 眼力するごく、高い空中からでも、地上の食物を見つける。  
翼 || 長大 || 飛びかける力きはめて強く、ゆるゆるとかける。

脚 || すこぶる強大 || 三趾は前に、一趾は後にむかふ。  
|| するごい爪がある || 物をつかむに便利である。

習性

肉の類ばかり食って、穀物の類は一つも食はぬ。  
あたらしい肉よりも、少しく古い肉の方をこのむ。  
動物をつかんで空中に上り、これをおさして殺し、又、つかみ去る。  
奥山の喬木の上に巣をつくり、たいてい二つの卵をうむ。

効用

人里をかけりまはり、腐った肉をさらへ、清潔法をやてくれる。  
田畑に有益な小動物も捕へるが、又、害のあるものも捕へる。

猛禽類

鳶(ワ)。鷲(シ)。鵟(ワホ)。鷹(カ)。蒼鷹(オカ)。鴟(ワウ)。木菟(ツミ)。  
鴉(ミス)。  
いづれも、肉類をくって、穀物をたべない。

染料植物

藍

形態

莖 || 二尺内外となる || 大きな節(ツ)がある。  
葉 || 楕圓形(タマシ)。托葉は鞘(ヤ)となって莖をつつむ。

花 || 夏の末ごろ、莖の頭に穂(ホ)の如き様をなして、小さい紅色の花が咲く。下部は白色、上部は紅色で五裂。

果實 || ごく細かい三角形のもの。

効用 || 藍玉(アサ)にこしらへて、紺色(コ)淺黄(キヤ)を染める。

藍玉

花の咲く前に苳り取り、葉をこき落とし、十分に乾かす。乾かした葉に水をそそぎ、むしろでおほひ、数日の後かきまはし、水をそそいで、数日間むしろでおほうておく。かよーにして、七八十日の後、ゆるのよーになったのを臼でつき、玉とする。

産地 || 阿波。琉球(近來、印度より買ひ入れるものが多い)。

その他の染料植物

紅花(紅色を染め、又、化粧(ケシ)用の紅をつくる)アカチ(赤色)カリヤス(黄色染料)。クチナシ(黄色)西洋から来るアニリン染料のために、おしたふされた。

○理科 二學年 上

# 烟草

## 形態

莖 高さ四五尺—一年生の草。

葉 大きくぶる大形—形はいろいろあり。葉柄なし。

全面に粘り気ある汁を分泌(ビツ)する。

花 九月の末ごろ、淡紅色の花が咲く。下部は筒の如くなる。

葉をとって、刻烟草(キザタバコ)、巻烟草(マキタバコ)とする。

## 効用

烟草の中には、ニコチンといふ大毒をふくむ。

## 毒分

幼年者には、かくべつに害が甚しい。  
二十歳にならぬものが烟草をすへば割せられる。

葉が少しく黄色を帯びたところにかぎ取る。

## 收穫

かぎ取った葉を積み重ね、一二日間むしろでおほうておく。後、二三枚づゝ繩にさし、日光のあたらぬ所で乾かす。それより、いろいろの方法をほどこいて、烟草とする。

# 高等小學圖畫

二學年前期

心の修養

「圖書を學ぶのは、手本にむかうて、筆を持った時にはかりするものであると思つてゐるのは、大なるこころえちがひである。圖書を學ぶには、手の練習も必要であるが、それよりも、第一ばんに必要なことは、書についての心である。この心の修養は、一時にできるものでないから、平生の心がけがかんじんである。その心がけは、次の三つのことである。

一 書を讀むこと

一學年の前期にいたつたよゝに、圖書は、世界のことばであるから、これを讀むといふことを練習せねばならぬ。書を讀むとは、その書にあらはれてゐるすべてのことを、こまかく知ることである。よく注意して見、ふかく想像(イメ)をめぐらして、その書によって、あからさまに書いてないところまでも知るよゝにすることである。「早く上手(ジツ)にならうとするには、多く書くといふこ

の生評

得心

二 多くまねること

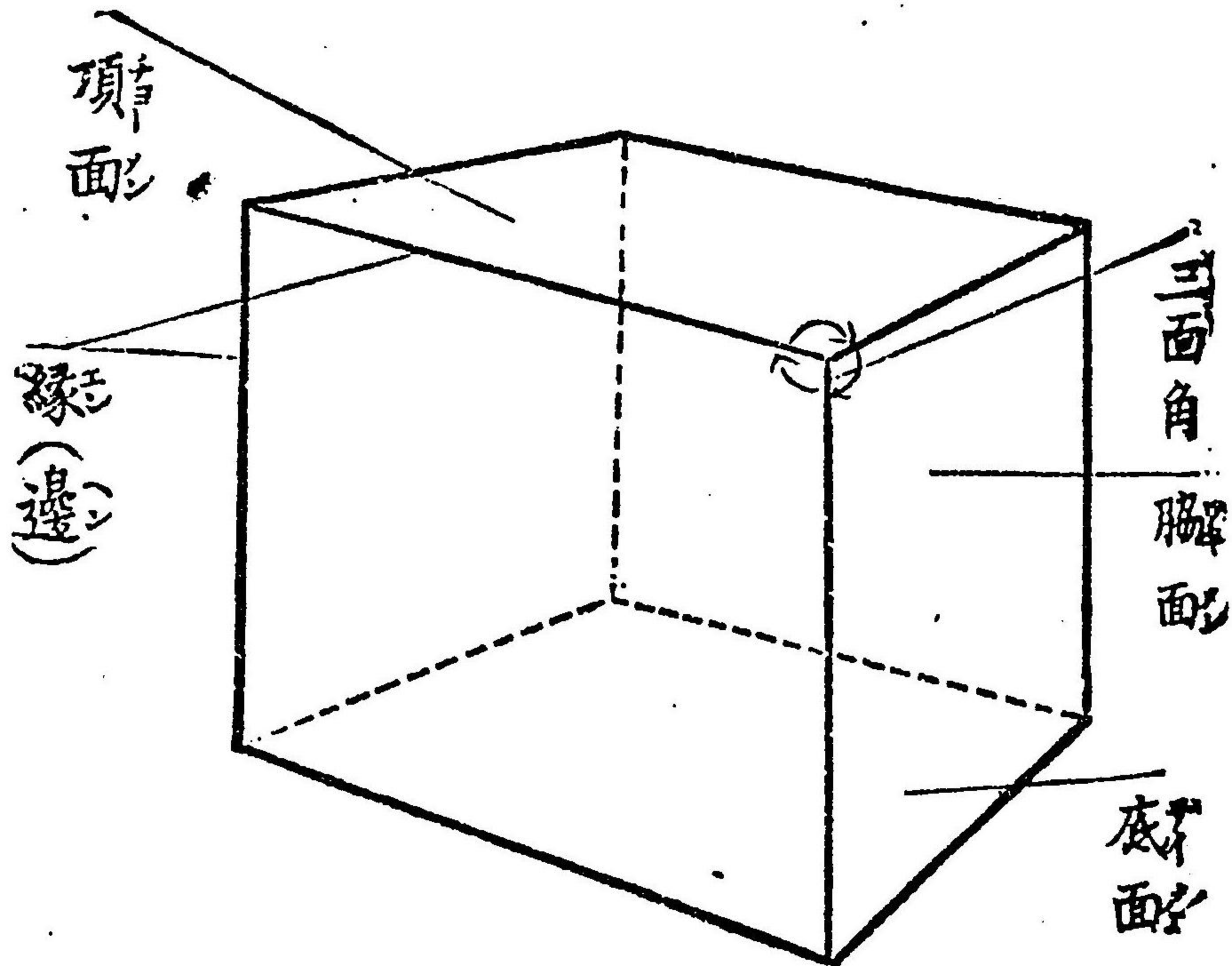
とが。必要であることは、一學年のときにも述べたが、よいと感じたことは、實物でも、畫手本でも、早速(ヤツ)まねて見ねばならぬ。一枚かけば、一枚だけ進歩してくるのである。

三 目の學問

朝、ねむい目をこすりつつ、かどへ出た時、日の出の天のけしきも、野のけしきも、畫といふ心をもつて見たならば、大なる稽古(ツギ)となる。犬がねてをるのを見ても、これを書くといふ心で、足のまげ方、頭のぐわい、尾のおきごころ、せなのかこゝまで注意して見たならば、大なる練習となる。であるから、目でする稽古は、あるいてゐても、すわつてゐても、野でも家でもできるのだ、ただ、これを記憶(キョク)してゐて、書く時に應用せねばならぬ。又、ある一つ一つのことには注意したらば、次に、かれこれとくらべて見ることをわすれるな。

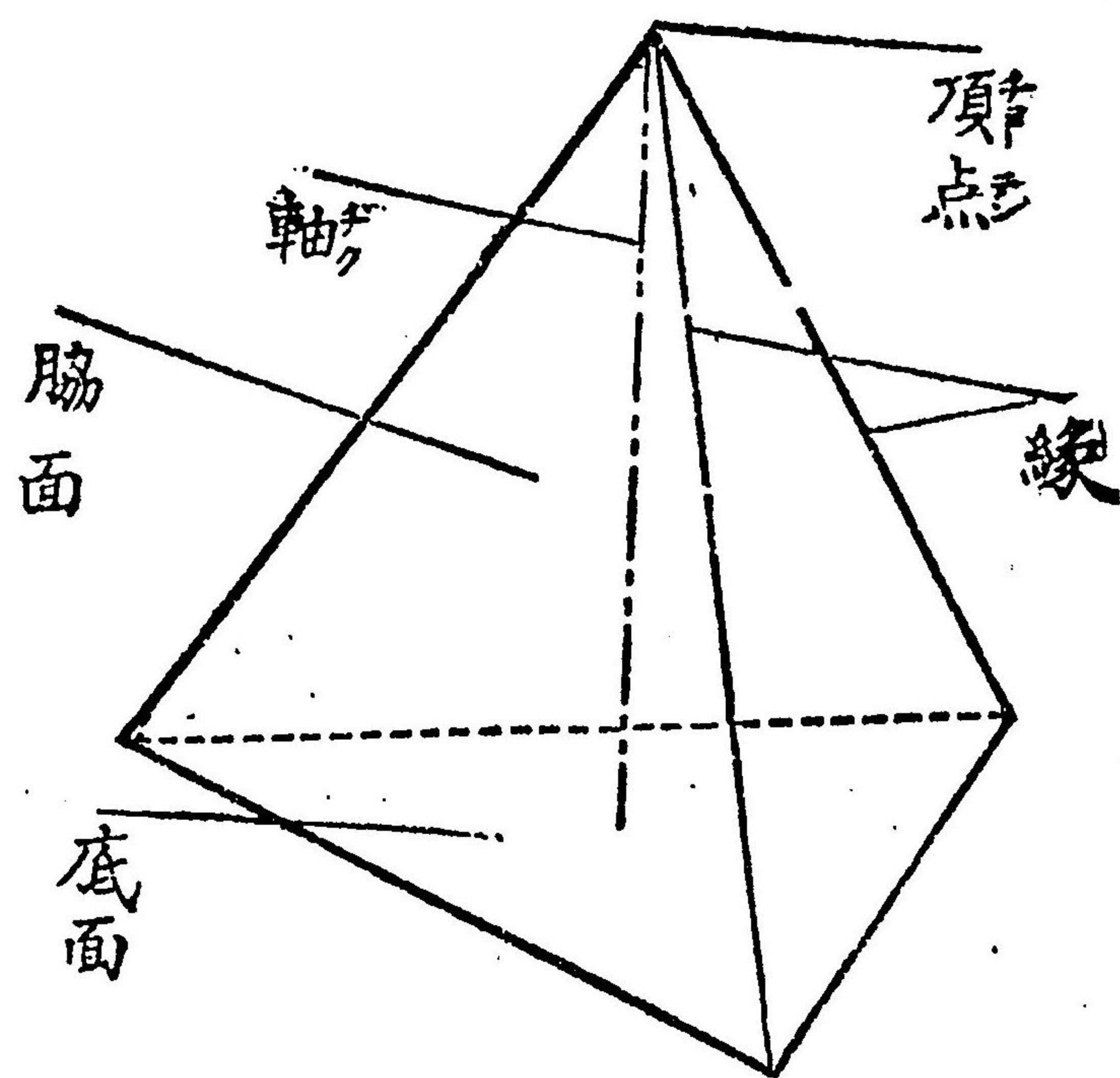
體

(稱名の部各体方立)



○圖畫 二學年上

(稱名の部各体錐)



百九十一

立

面

面とは、線でかこまれた一つの形である。四本の直線がかこんだ面は四角な形となり、三本の直線では三角な面となり、五本の直線では五角な面となり、弧線(コシ)でかこんだ面は、まるい面ができる。

立体

立体とは、面がよりあつまった長さ、はばと、あつさのあるものとなつたものをいふ。  
箱は、平面ばかりあつまった立体で、ゴム球は、曲面(キョク)ばかりあつまった立体である。

立体の種類

- 方柱形ホウチキョウケイ || 四角な柱の形のもの。
- 圓柱形エンチキョウケイ || まるい柱のよなもの。
- 三角柱サンカクチキョウ || 三角な柱のよなもの。
- 方錐体ホウスイタイ || 底の面が四角なもの。
- 圓錐体エンスイタイ || 底の面がまるいもの。
- 三角錐サンカクスイ || 底の面が三角のもの。
- 錐體スイタイ